



洛友会創立30年史

昭和59年3月

洛友会

洛友会創立30周年記念委員会

一目 次一

I 祝 辞

頁

1. 祝 洛友会創立 30 周年	洛 友 会 会 長	松田長三郎…… 5
2. 洛友会創立 30 周年を祝し教室の発展を顧みる	京都大学工学部電気系教室 近藤 文治	…… 6
3. 30 周年を祝う	洛友会関西支部長	濱口 俊一…… 9
4. 洛友会 30 周年を迎えて	洛友会東京支部顧問	一本松珠璣…… 11
5. 洛友会の思い出	洛友会中部支部長	本多 静雄…… 13
6. 洛友会 30 周年にあたって	洛友会中国支部長	真田 安夫…… 14
7. 洛友会創立 30 周年を祝す	洛友会九州支部長	河本 勝寿…… 15
8. 洛友会 30 周年を迎えて	洛友会四国支部長	徳岡 納…… 16
9. 祝 辞	洛友会北陸支部長	西岡 敬二…… 18
10. 想い出	洛友会東北前副支部長	山下 實…… 18
11. ギャップを埋めること	洛友会北海道支部長	池内 義則…… 20
12. 電気工学講習所の沿革	洛友デルタ会代表	立石 亨三…… 22

II 洛友会 30 周年記念特別講演

1. 洛友会創立 30 周年を祝して	洛 友 会 会 長	松田長三郎…… 24
2. 原子力発電	日本原子力発電株式会社 会長	伊藤 俊夫…… 26

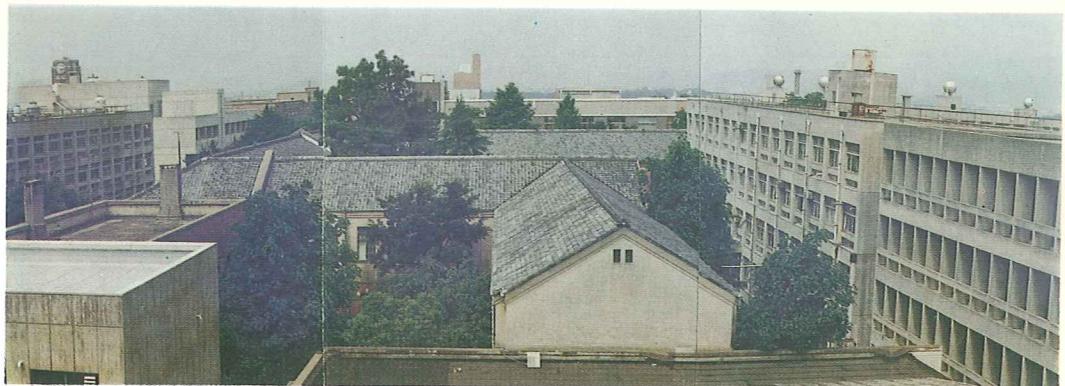
3. 競争と協調	富士通株式会社 会長	小林 大祐…… 37
4. 先端技術の動向	シャープ株式会社 副社長	佐々木 正…… 40
5. 通信網の変革と自然科学	電電公社横須賀電気通信所 伊吹特別研究室長	伊吹 公夫…… 44

III 洛友会30年の歩み

1. 洛友会の30年の足跡	本 部	近藤 文治…… 48
2. 関西支部の30年	関西支部	留岡 寛…… 56
3. 東京支部の歩み	東京支部	小田 敏正…… 64
4. 中部支部の回顧と近況	中部支部	古田 久一…… 68
5. 洛友会中国支部30周年を迎えて	中国支部	細田 順弘…… 71
6. 洛友会九州支部の歩みについて	九州支部	上田 保之…… 73
7. 洛友会四国支部	四国支部	赤股 義高…… 75
8. 北陸支部の歩み	北陸支部	久和 進…… 77
9. 東北支部の歩み	東北支部	三上 謙五…… 78
10. 北海道支部の歩み	北海道支部	芝山 竜一…… 84
11. 洛友デルタ会の現状	洛友デルタ会	藤村 俊一…… 86

改築前の電気系教室の全景（昭和56年）

（情報工学科の屋上にて撮影）



改築後の電気系教室風景（昭和58年）



電気系教室思い出の玄関



後方建物 電気工学第二教室

中央正面 旧中央実験室

左 側 旧電気工学教室の一部

右 側 イオン工学実験施設



初代会長 烏養利三郎先生



現会長 松田長三郎先生

I 祝　　辞

1. 祝 洛友会創立 30 周年

洛友会会长 松田 長三郎

洛友会創立 30 周年を、お祝い申し上げます。

本会が創立されてから、早くも 30 年を経過しました。昭和 58 年 7 月 25 日発行の洛友会会報第 124 号で、“洛友会創立 30 周年”として、拙稿を記るしましたが、本会会員が、我国の電気工学の学術技術の発展に、大きな寄与貢献をなされて來たと、聊が自負し得ることは、私共の大きな誇りであり、慶びでもあります。電気の恩恵は、家庭に、産業に、社会に、益々広く深く、拡まって行くことは明らかであります。世の中はこれから益々、急速なピッチで進展して行くであります。その原動力は、形而上、形而下の学術・技術の発達進歩であり、形而下での中枢をなすものは、電気の学術・技術であります。私共は、この進展の一翼を荷っている心構えで、益々、精進努力を重ねて行きたいものと思います。



2. 洛友会創立30周年を祝し教室の発展を顧みる

京都大学工学部電気系教室 近藤文治

昭和28年洛友会が発足して30年の歳月が流れ、ここに創立30周年を迎えたことを心からお祝い申し上げます。またその間教室に賜わりました物心両面に亘る多大のご支援に対し厚く御礼申し上げますとともに、本来ならば教室で行うべき洛友会のお世話を全面的に引受けて下さっている応用科学研究所に対し厚く御礼申し上げます。

洛友会が発足した昭和28年は、電気教室が旧制大学の最後の卒業生を送り出し、旧制大学電気教室56年に亘る歴史を閉じると同時に、新制大学の最初の卒業生を送り出した年であり、新制大学院が発足した年でもあります。洛友会名簿によりますと、旧制大学の卒業生は総数2,050名で、その内訳は明治年間に171名(既に全員が物故者)、大正年間に404名、昭和の卒業生が1475名となっています。ところが、新制卒業生は30年間で3,267名(電気系学科の学部卒業生3,103名、他大学・他学科等電気系以外学部卒業生164名)に達し、既に旧制卒業生の1.6倍に達しています。したがって洛友会会員数は、発足当時の2.6倍に増えたことになり、誠に慶ばしい限りであります。

さて少し昔話になって恐縮ですが、電気工学教室の創設は明治31年(1898年)9月とされています。明治30年6月京都帝国大学が創設され、理工科大学が発足しました。官制としては、勅令219により、大学発足時、電気工学科の創設が認められていたが、その後文部省令によって、まず機械工学および土木工学の2学科が設置され授業を開始し、電気工学科の授業は翌31年9月に開始されました。このため電気工学科の創立を明治30年とするか31年とするかは議論のあるところですが、京都大学工学部では、実際に授業が開始された明治31年をもって電気工学科の設立の時期としています。したがって電気工学教室が創立50周年を迎えたのは昭和23年で、わが国は戦争の荒廃に基づく戦後の混乱に喘いでいた時でした。募金をして教室の復活に役立てようとしたのですが、その事業の1つとして、戦争中から途絶えていた懇話会名簿の再発行がありました。助教授であった私もそのお手伝いをしました。戦中・戦後の混乱の中で卒業生の住所は大半が変り、名簿の整備に大変苦労したことを記憶しています。とても正確を期し難いが兎角発行しようということになり、印刷刊行にこぎつけたのは昭和23年12月

* 懇話会は、電気工学教室の教職員、卒業生、在学生の研究懇親を目的として明治42年結成され、戦前まで毎年名簿を発行していました。

のことでした。住所の確認された方に無料(?)で配布しましたが、これがきっかけとなり、伝え聞いて新しい住所を報せてこられる方、自分のクラスの知る限りの住所を報せて頂いた世話役の方等名簿訂正の報らせは引きもきらず、昭和 25 年、募金の残金を利用して訂正追補の分だけが小冊子にして発行されました。戦後の猛烈なインフレーションで、貨幣価値が年々低下する中にあって、当時の教授の諸先生を始め関係者の苦労は並々ならぬものがありました。名簿に関係会社の広告を掲載することによって広告費を稼ぎ、少しでも経費を浮かすという工夫もこの時始まったのです。

何はともあれ、懇話会名簿の発行を契機として、各地でクラス会が開かれるようになりました。特に東京では、学年に取られない地区同窓会“洛友会”が活躍を始めました。一方教室では名簿発行の資金がなくなり、かと云って卒業生各位から会費を集めることは事務的に堪えられず、名簿発行は休止されたままでした。この状態を開拓するため、教室の教授の先生や各地区の代表者の間で協議が重ねられ、昭和 28 年鳥養先生を会長に全国的同窓会組織が結成されるようになったのです。名称を「洛友会」とし、同名の東京地区同窓会組織はそのまま東京支部とすることになりました。以上が洛友会誕生の経緯であります。なお事務は、鳥養先生が理事長であられた応用科学研究所が引受け下さることになり、山村忠行常務理事が献身的努力をされたことも忘れられない思い出であります。洛友会の発足に伴ない、懇話会名簿は洛友会名簿に生れ変わり、以後毎年発行されるようになりました。

さて洛友会が発足した昭和 28 年頃の教室の様子はどうだったでしょうか。旧制大学から新制大学への移行については述べましたが、その翌年昭和 29 年には電気工学科の弟分として 5 講座構成の電子工学科が学生定員 20 名で発足しました。当時電子工学科は大変珍らしく、僅かに静岡大学工学部にあっただけです。しかし静岡大学のそれが電子管を中心とする学科であったのに対して、本学の電子工学科は、電子回路、材料、計測、マイクロ波、自動制御など、エレクトロニクスを対象とする学科でした。本学では通信工学は電気工学科が担当していましたし、計算機は研究対象であっても教育対象にはまだまだ達していない頃の話です。エレクトロニクスの今日を予見された当時の先生方の先見の明には感服の外ありません。昭和 33 年初めての電子工学科の卒業生を世に送り出しましたが、教授昇任早々の私が、その就職の世話をすることになりました。しかし上に述べた学科の性格は一般には理解されず、関係会社数十社に教育内容の説明書を送って理解を求めた次第です。今昔の感に堪えません。

さて電気教室には、鳥養先生時代からの伝統として、電気工学を強電・弱電のように分野を細分化して教育すべきでないとの考えがありました。しかし諸般の状勢から官制上は、独立した学科として電子工学科が設立されましたが、設立当初からその運営は電気工学科と一体化して行われました。そのため電子工学科の卒業生は自動的に洛友会に加入することになったので

す。電子工学科のこのような運営の仕方は、他学科に大きな影響を及ぼし、その後工学部の学科運営の一つの標準となり、一体化して運営される複数学科を総称して系学科と呼ぶようになりました。例えば電気系学科と云えば、電気工学科、電子工学科及びその後設立された電気工学第2学科（後述）を指します。工学部には、他に機械系、土木系など5つの系学科がありますが、電気工学科と電子工学科の運営形態がその嚆矢となったのであります。

その後は日本の経済発展は軌道に乗り、高度成長期に入りました。最盛期の昭和34年、8講座構成の電気工学第2学科が学生定員60名で発足し、ここに3学科構成の電気系学科が完成しました。その後臨時工業教員養成所の教官定員の工学部移管による2講座増、情報工学科設立に伴なう2講座の移管、共通講座一般電気工学の新設などの変遷を経て、電気系学科の現況はつぎの通りになっています。

電気工学科6講座、電子工学科6講座、電気工学第2学科6講座計18講座に工学部共通講座である一般電気工学講座を加えて、19講座で構成されています。学部入学定員は120名で、3学科に分かず、電気系学生として入学させています。教育に当っては、電気工学は(1)エネルギー、(2)物性・材料、(3)通信・情報・制御の3本柱からなるとの見地に立ち、これに共通基礎を加えて教育を行っています。ただしこれらの3専門を一般にいうコースとして独立に教育するのではなく、各分野の基礎的知識はすべての学生が修得するようにするために、専門教育の二ヶ年のうち一ヶ年は、大部分の科目はすべての学生が聴講するようカリキュラムを編成しています。最後の学年のみ上記の3分野をコースとして選択するよう指導しています。しかし最終学年における教育の目玉は特別研究にあり、1年間かなりの時間をかけ、研究の一端に触れるとともに、学生の自主性、創造性の涵養に努力しています。

一方、大学院教育については、上記の電気系学科19講座の他に、オートメーション研究施設1部門（講座に相当）、原子エネルギー研究所2部門、ヘリオトロン核融合研究センタ4部門、超高層物理研究センタ2部門、イオン工学実験施設1部門をえた大世帯で当り、工学部では最大の系専攻（大学院では学科のことを専攻という）です。修士課程学生の募集人員は、文部省の定員62名を遥かに超過して85名となっています。これはつぎのような事情によるのです。工学部では新制大学発足当時から、将来の日本の工業技術レベルの向上のためには、高度の教育を受けた学生を多数輩出することが必要であるとの考え方から、定員の1.5倍を募集人員として教育を行ってきました。そのため他大学と比較すると、学部学生に対する大学院学生の比率が高くなっています。しかし大学院の入試は競争試験でなく資格試験であり、大学院学生の質をある程度高くしたいこともあって、電気系専攻の実際の入学者は75～80名です。このうち10～15%が京大電気系学科以外の学生です。したがって毎年電気系教室を巣立つ学生は、大学院を含めても、学部定員と余り変わらず130名程度で、会社の求人の多い昨今では、

心ならずも不義理をすることが多く申訳なく思っている次第です。何卒ご寛容の程願い上げます。つぎに大学院教育の内容ですが、講義と研究の比率は4:6あるいは3:7程度で、研究のウエートが高くなっています。修士論文の内容は、指導教官の大いなる努力によるところが多いにしても、感心するような立派なものが多数あります。

博士課程は、講義はなく研究のみで、毎年7~10名が入学しています。

洛友会が発足してから30年が経ちました。その間新制大学の卒業生も丁度30回になり、洛友会会員はその間3倍近くになり、教室の規模も約3倍になりました。

創立30周年といえば、人間の場合、青年期を終って働き盛りの壮年期を迎えたことになります。将来に向けての更なる発展を祈って止みません。と同時に今後も教室に対して格別のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

3. 30周年を祝う

洛友会関西支部長 濱口俊一

洛友会30周年おめでとうございます。

わが洛友会の発会式は、昭和27年11月23日京都大学楽友会館で行なわれました。

その席上、会長の鳥養利三郎先生は「同窓会は卒業生間の横と縦との連絡を主な目的とすると思いますが、横の連絡は同級生会が主として担当できますから、同窓会は主力を縦の連絡協議におくべきであろうと考えます。

この意味において私は、同窓会での食事には席を設けずカクテルパーティ式、園遊会式にして自由に誰とでも歓談できる様にして欲しい」とご挨拶されております。

あれから30年がたちました。縦の交流の場としてわが洛友会が、大いに活況を呈しておりますことはご同慶至極に存じます。

顧みますとこの30年の間に、電気工学をとりまく環境もまことに大きな変化を遂げてまいりました。

30年前は、電力不足からしばしばその供給制限が行なわれた需要復興の時代で、専ら電力供給基盤の確立が急務とされ、このため重電関係を中心に電気工学の飛躍的発展がみられました。

その後、高度成長時代を迎えていわゆる電化ブームが到来し、ご承知のとおりTV、洗濯機、冷蔵庫、クーラー等の家電を中心に、民生機器関連技術が目覚しい進歩を遂げました。

そして昭和48年の第一次石油危機、続いて昭和54年の第二次石油危機を契機として、高

度成長から低成長へと時代は大きく移り変わるところとなり、産業構造も「重厚長大」から今や「軽薄短小」へと急激な転換が進みつつあります。

そうした中で、とりわけエレクトロニクスと通信技術を軸にいよいよ高度情報化社会を迎えるとしており、電子工学が益々大きな役割をになう時代となっております。

洛友会会員の就職先をみましても、弱電家電関係が30年前の2割から最近は4割を超えるようになっており、この一事にも30年の時代の移り変りが如実に表われているように思います。

こうして電気工学に対する時代の要請は刻々変ってまいりましたし、今後も時とともに変化していくものと存じますが、その役割自体は将来とも益々大きくなることは間違いない処でありましょう。

このため、私ども電気工学士いたしましては、この上とも研修に励み、知識のレベルアップに努力して、ともども新しい時代的役割を果してまいりたいものでございます。

とりわけ広範な技術のシステム化が必要とされる今日、お互いに、専門外の諸情報の積極的な吸収・応用に努めることが殊に大切ではないかと存じます。

その意味からも各分野で活躍される会員諸氏が、本会を通じて、相互交流を深められますことはまことに有意義であると存じる次第であります。

この点発足当初668名であった私どもの関西支部も皆様の熱意とご協力により、現在は洛友会会員の四割強2000人を超えるまでになり、その活動も年々盛り上がってまいりました。

従来とも当関西支部では会員相互の親睦を深めるために、家族会をはじめゴルフ・麻雀・囲碁・将棋大会等いろいろな催しを行なってまいりました。

特に最大の行事である家族会はかねてより大変好評で、今年も琵琶湖のミシガン丸乗船と比叡山詣での計画に300名にもおよぶ申込みがあり非常な盛況でございました。

これからも会員諸氏が楽しく集える場を企画していきたい、とりわけ「若い人も多く参加し活動できる場」を極力作ってまいりたいと思っております。

この記念すべき30周年を機に改めて発足時の初心にたちかえり、当会の益々の発展を期待してまいりたいと考えておりますので、会員の皆様におかれましても一層のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げる次第でございます。

終りに会員の皆様のご健康とご発展とを心からお祈り申し上げ、私のご挨拶とさせて頂きます。

4. 洛友会30周年を迎えて

洛友会東京支部顧問 一本松 珠機

先づ以て、洛友会30周年をお祝い申上げる。

洛友会は、1952年（昭和27年）11月に発足しているので、本年は30周年を迎える。京の地に、共に学んだ我々の洛友会の30年をふりかえってみよう。

洛友会の目的は、会員の親睦を図ることである。そのため洛友会会報および洛友会名簿を作成して会員に配布することが会則に記されている。会報は、6ページから12ページ位で、知っている方の消息が必ずしも載っているので、私も真先に開いているが、大変に懐かしい思いがしている。洛友会名簿は大変に良くできた便利なもので、そのていねいさは、他に類を見ない。この30年間、名簿の整理に献身された事務局の方々に深く感謝をしたい。

洛友会30周年を思いながら、次に30年の昔、電気事業はどんな状態であったか、30年の間にどの様な道を辿って来たか。先ず、この二つの問題について考えてみよう。

今日の電力供給事業の発送配電における一貫体制は、1951年5月にG H Qの指導によって出来たものであるが、これは世界で最良のものだと思う。本家の米国には、中小の電力会社が多くすぎるし、英國や仏国は、経営形態が全国一社方式であるため柔軟性に乏しい。日本が、最適規模で出発できたのは、幸いなことであった。

この30年の間、電力設備の増加は毎年10%から8%の伸びを示した。その間、技術革新により発電所の熱効率は飛躍的に向上し、更に火力発電の原料である石油が豊富、低廉であったことなどにより電力のコストは長期的に安定した。また、この他に全く新らしい電子工学の技術革新も進展した。

それらの変化により、電気教室も発展を続け、1958年には電気工学科の他に電子工学科が新設され、1965年には電気工学第二教室が誕生するに至っている。

電気工学の進展は、そのまま洛友会の発展であった。洛友会会員の増加も、電気工学科だけの時代は、年に50名程度であったが、電子工学科ができる頃は、年に75名程度、電気工学第二教室時代には、年に130名程度になって、現在は会員が4000名にも達している。

以上のように洛友会は常に順調な発展をして来たが、同時に我々も陽のあたる産業に身を置いて仕事をできることの幸せを思わなければならない。

次に洛友会の仕事であるが、特別に変わったことをしているわけではなく、本部を京都の電気教室におき、全国各地に支部があってそれが思い思いの仕事をしている。会員数では関西が全体の半分の2000名、東京が1500名、他が500名となっており、本部総会、支部総会

が年に一度開かれている。

思い思いの仕事では趣味に関連したものが多く、碁、ゴルフ、小唄、絵画等、お好み次第という訳で、それぞれの担当委員が、苦心して楽しくやっているようである。

本部・支部を通して同級生の会合が沢山あるが、私の出た大正14年にちなんでの十四日会は、大正15年と合同で、毎年一度、二泊三日位の特別な旅行会を夫妻同伴で続いている。多い時には60名にもなり、宿の手配なども大変であるが幸いにも、20年以上続いている。

今では男同志はもち論のこと、夫人同志がすっかり打ち解けて和やかである。男どもはみな80歳以上になって、少し体の不自由が表面に出て来ているが、夫人の方はすこぶるお元気で、十四日会の推進役を果たしている。

関西の十四日会では、会員の参加できる年度を拡大して発展を続けており、行事も大規模になって、黒四ダムや福井県にある原子力発電所の見学会などを行なっているようである。

洛友会がこれまで発展をした上で、中心になられる先生がお元気で頑張っておられることも見のがせないことである。

鳥養先生、松田先生などは、洛友会に対して親のような愛情を持っておられる。

我々は、すでに年をとったが、若い人々が会合にも多勢出席し活発に活動を続けている。洛友会は、今まで幸運にも恵まれ発展して來たが今後ますます発展して50年さらには100年と続いて行くことを願っている。

最後に電気評論について一言しよう。

古くからある電気の専門誌であるが、京大電気教室の責任で編集されており、内容が学問的に難かしく一般向けではないというので心配していたが、何とか再生の道を講じようというところから、内容を思いきって分り易く実際的なものにした。と同時に運営も株式組織にして、社長に長老の松田先生になっていただき努力を続けていただいている。

面白目な編集で内容も充実している電気評論を、洛友会の主旨にも合うことでもあり、大いにみな様のお力で発展させたいものだと願っている。

以上

5. 洛友会の想い出

洛友会中部支部長 本多 静雄

歳月の流れるのは早いもので、洛友会が出来てもう30周年になるという。

逆算して見ると、昭和27年のことになる。当時はまだ世の中が混沌としており、敗戦の痛手がまだ残っていた。私は郷里の愛知県に帰って、昔の通信省の人々を集めて電信電話工事会社を始めていた。

丁度そのとき、名古屋工業大学の学長として、私より一年先輩の清水勤二君が名古屋に勤務しており、年来の親友だったが、これがまた大学の鳥養先生の愛弟子というわけで、洛友会創立の話を鳥養先生から受けると、すぐ相談があったので、私は大賛成して当然のこととして皆さんで推挙して清水君に最初の東海支部の支部長になって貰った。

その少し前に、鳥養先生は京都大学の総長というか、新しい名称では学長を勤められた、それの精しい事情は知らないが、清水君の伝えるところだと、普通だと総合大学の学長は法文系か医学系の人が就任するのが例だ、現に私達の大学生当時は、荒木寅三郎さんという医学博士だった。その後も法文系の人ばかりだったが、戦争末期から技術の重要性が強調せられ、文部省としても工科系の学生と教授を増す趨勢にあったが、鳥養先生は、技術的ばかりでなく事務的才能もあり、かつ世情に通じておられ、文部省と大学の交渉で大いに手腕を發揮せられたので、大学内の評判が高かったからだともいった。それに清水君自身が文部省の督学官を勤務したことがあり、文部省内の事情に精通していたので、同君も鳥養先生を公私に亘ってお手助けしたと思う。それやこれやで、鳥養先生は押されて学長になられたのが、終戦直後の20年11月のこととて、辞められたのが26年11月で、6年間在職せられた。何しろ戦後のインフレで毎日の食糧にもこと欠く時代に、学長を献身的にやられたが、大学から出る給料や旅費だけではとても足りなく、東京へ出れば何かと付き合いも多く金もかかるので、鳥養先生はどうしてやりくりしておられるのかと私は心配になった。そこで私は清水君に、名古屋の工事会社も何とか皆んなの協力で経営が成り立っておる。先生のお陰で自分達の食いぶちだけは保つておるが、それだけに先生の勝手元を知らん顔をしていては申し訳ない。一度先生にそれを聞いて、その都合によっては毎月若干の費用位なら支出出来ないこともないと申し出たことがある。もう古いことであり、清水君も亡くなっている、その返事はどうであったか確かなことはいえないが、先生から「有難いが、何とかなっている。いよいよ困ったらまた頼む。」とあったように思う。それで毎月のことは差し控えたが、清水君に数回僅かな小使いというか、交際費を渡したような気がするが確かではない。

その後26年に学長をやめられ、27年に洛友会を創設せられて、それ以後東海の支部の総

会には必ずといってよいほど出席して戴いた。そのこともあるて、現在の会長の松田長三郎先生にも、支部の総会には万障縦合せて出席して戴いている。良い前例であり、今后も続けて貰いたいと考えている。

東海支部の初代会長の清水勤二君も名工大としても名学長の誉が高く、他の大学から羨しがられていると聞いたが、私は碁敵で、良く二人で碁を打った。またその時分、名古屋工業大学に新しい講堂だったか、大きな教室が出来てお祝いがあった時、私も招かれて出席したところ、清水学長が、「私は自分の職業に満足している、教授という教育の仕事に従事出来るのを、満足に感ずる。」と挨拶したので、その少し後に私が祝辞を述べたとき、懇意にまぎれて皮肉なことを言って仕舞った。それは、私の常に言う諺なのだが、私の祖母がよく云った言葉で、
「商売と女房は他家のよそが良い、宗旨と雪隠は自家のうち」

というのである。商売と女房は良いが、上にも良いと望むから、自家のものに満足出来ないことを言ったもので、清水先生は教育者となって良かったかも知れないが、現状に満足しているようでは少々臺が立ったんではないかと、野次ったことがあり、懇意まぎれとはいえ、今になつて考えると汗が出るが、それもこれも年來の親友で、家族ぐるみ交渉していたからである。

洛友会30年と聞いて今更ながら、鳥養先生と清水君の懐しい想い出が湧き出てくるのである。

6. 洛友会30周年にあたって

洛友会中国支部長 真田安夫

洛友会発足30周年、誠におめでとうございます。私の所属します中国支部も本部発足に引き続き結成され、今年同じく30周年を迎えることは、文字通り、ご同慶の極みであります。

わが京都大学電気系学科卒業生は、洛友会発足当時には約2000名でしたが、現在は約5500名にものぼり、さらにこれに電気講習所卒業生を加えますと、実に7000名になんなんとする大世帯となっており、その隆盛は全く心強い限りであります。

この30年間の世の中をふりかえりますと、前半は驚異的な高度経済成長の時代でありましたが、後半は二次にわたる石油危機の試練を受けた産業構造の転換期であると言えるかと思います。最近はG.N.P.の伸びにも拘わらず、エネルギーの総需要量は横ばいからむしろ低下傾向にあります。しかし、その中にあって電気エネルギーへの依存度は一層高まってきております。従つて、今後我国の社会を支えてゆくための電気技術の進歩への期待は、極めて大きいものがあると考えております。

電気教室も、これらの社会的な変化に対応して、電子工学科・電気工学第二学科を増設して社会の要請にこたえ、また、その卒業生が各方面で我国の技術進歩に多大の貢献をしておられるのを目のあたりにしますと、誠に頼もしい限りであります。

このような中で、「洛友会」の果たしてきた役割は誠に大なるものがあったと確信しております。初代洛友会会长鳥養先生は、「同窓会は卒業生間の縦と横との連絡を主たる目的とするものですが、横の連絡は同級生会が主として担当できるので、洛友会は縦の連絡協調に主力をおくべきであろうと考えます。」と洛友会会報創刊号の中で述べておられます。洛友会は、教室の創立以来 85 年の伝統に輝やく同じ学窓に学んだ者同志が、我国の電気工学の基礎を築いてこられた諸先達から、現代のエレクトロニクス時代の先端を担う若い人達に至るまで、年代を超えた交歓の場としての活動を続けており、我国の大学の同窓会の中でもユニークな存在であると思います。

これから社会は情報化社会であると言われております。工学・技術の分野はますます細分化され専門化されてゆくことでしょう。しかし、世の中がこのような方向に進めば進むほど、人間相互間のコミュニケーションや協調の重要性が一層高まるものと考えます。このためには、自分の専門分野を超えた人々との幅広い接触を通じて、より広い視野を持つことが大切になってくるのではないか。洛友会では、学会をはじめ産業界のあらゆる分野で活躍されている方々と幅広い交流ができるという点で大変意義あることだと思います。

洛友会が 30 周年を一つの区切りとし、今後ますますその真価を發揮し、さらに大きな飛躍と発展を遂げるよう祈念してお祝いの言葉にかえさせていただきます。

7. 洛友会創立 30 周年を祝す

洛友会九州支部長 河本勝寿

昭和 27 年 11 月 23 日に、鳥養先生をはじめ当時京都大学にご在職中の諸先生方および東京・大阪在住の卒業生の方々のご尽力により洛友会が設立され、30 周年を迎えました。設立時は 2000 名程度の卒業生も現在 6000 名以上となり、洛友会がますます隆盛をきわめてまいりましたことは、会員の一人として誠に喜びに堪えません、心からお祝い申し上げます。

鳥養先生は、洛友会会報の創刊号において、「洛友会は主力を縦の連絡協調に置くべきであり、明治の老卒業生から、昭和 20 年後の青年卒業生まで、すべてを打って一丸とし、これ等すべての同窓生を、親愛のルツボに熔かし込むことに努めなければならぬ。老若お互の間に少しでも遠慮や気兼ねが残ってはなりません。」とご挨拶で述べておられます。毎年開催される本

部・支部の総会、その他の諸行事も、鳥養先生のご趣旨にそった形で続けられてまいりました。洛友会九州支部は、本部の結成に遅れること一年、昭和28年10月に発足いたし、現在私が四代目の支部長をお引き受けしております。初代福井正治（明治43年卒）、二代高柳与四郎（大正3年卒）、三代宮田秀介（大正15年卒）の諸先輩は、いずれも長年電力事業に従事され、会社の経営者として、また技術者として高く評価された方々であります。九州支部の発足はもとより、その後の発展に貢献され、常に公私にわたり、私達、会員に深い愛情と、適切な激励を賜っておりました。また、手許に残っております古い幾つかの支部総会の記念写真を眺めておりますと、鳥養先生、加藤先生、大久保先生、林先生のお姿も拝見できるわけで、諸先生の有意義なお話を傾聴できたことは、誠に幸せなことであります。最近は、毎年、松田先生のご来駕をいただいております。先生のお姿を拝見するだけでも、私達の喜びであります。

京都大学の電気工学科の卒業生の各界における活躍には、目を見張るものがあります。戦前はもとより、戦後の復興期および高度成長期の日本の発展の一翼をになって来たとの自負をもっております。この背景に洛友会という縦の強い連繋が心の支えとなっていると申し上げても過言ではありません。

昭和48年のオイルショック以来、日本の経済の成長も安定期を迎える、エレクトロニクスに象徴される先端技術の発達、情報化社会の出現など、社会のあらゆる面で大きな変化が起りつつあります。このような社会の中核において活躍される会員の方々には、強い精神力と思い切った発想の転換が求められております。このような観点から見て、洛友会の存在価値は高く評価され、ますます発展するものと確信いたしております。

30周年を迎えた洛友会のこれまでの発展に寄せられました鳥養先生、松田先生および本部役員、幹事のご尽力に対し最大な尊敬と深甚の謝意を表し、ご挨拶といたします。

第8章 洛友会30周年記念式典

8. 洛友会30周年を迎えて

洛友会四国支部長 德岡 育

此度、洛友会が30周年を迎えたことは御同慶の至りであります。四国地区に在住致します洛友会四国支部会員一同を代表いたしまして、心からお祝い申上げます。

省みますと、サンフランシスコ講和条約を締結し、国内外の終戦処理もほぼ片付いて、戦後の混乱からようやく抜け出し、「神武景氣」に続く「戸戸景氣」に象徴されるように経済の高度成長が始まり、復興の雄音高く響く頃、日本の産業を支える電気エネルギーの供給や、電気技術の革新に努力していた各地の京大電気教室出身の同窓が集い、相互の親睦と後継者の育成

のために結成したこの洛友会も、日本経済のめざましい発展に伴って隆盛になり、各地で指導的役割を担う人材が輩出したことは大変喜ばしいことであります。

イラン・イラク戦争に端を発した石油ショックによって、今や世界経済は低成長時代へと移行しておりますが、非資源国である日本は、エネルギー問題の重要性を再認識させられるとともに、エネルギー資源の多様化が迫られていることは周知のとおりであります、水、石炭、石油、原子力などを使用する電気エネルギーは、その旗手の座を占めるものであり、電気技術者の使命は、今後ますます重要性を加えてゆくものと思われます。

また、コンピューターの発達は、情報革命と呼ばれる一時代を画し、技術立国を目指す日本は、半導体技術、自動制御技術などの分野で、アメリカを凌駕するまでに成長して来ましたが、これにも我々電気技術者は大きく貢献しました。更にエレクトロニクスの技術革新を推進していくことが、今後やらねばならない重要な使命であります。

さて、四国は多分、日本でも最も古くから電気と縁の深い処であります。と申しますのも、かの平賀源内が、安永5年（1776年）にエレキテルと呼ばれた摩擦起電器を製作し、世間の人達を驚かせた話は有名で、皆さんもよく御存知と思いますが、彼は讃岐（現在の香川県）の出身でありますし、源平合戦の古戦場として知られる屋島の東方に位置する志度町の生家跡は、現在、源内遺品館として、一般に公開されております。

かって、鳥養先生を御案内したことがありました。私が管理人のお婆さんに、京都大学の教授で、日本の電気工学の大家である旨御紹介しましたところ、いたく感激して、是非記念に記帳して欲しいと頼れたことなどが、なつかしく思い出されます。

また、近くには、謡曲「海人」で有名な房前の母の墓があるといわれている志度寺もあります。四国へ来られる機会がありましたら是非一見されることをお勧めします。

洛友会四国支部は、昭和30年に結成され、現在84名の会員が在住しております。渡部兼雄先輩（大12卒）を筆頭に、昭和年代の卒業生が大体各年度に一名、多い年度で三乃至四名居ります。県別の居住者数は、香川県が43名で最も多く、愛媛県21名、徳島県14名、高知県6名の順となっております。

毎年五月か六月頃に、最長老の松田先生をはじめ教室の先生方にお出でいただきて、支部総会を開催し、会員相互の親睦をはかっております。

気候温暖で風光明媚、人情こまやかな四国、瀬戸大橋も間もなく開通する予定で、そうなると之迄のような孤島の感じは無くなると思われます。地方の時代といわれる今日、将来に大きな可能性を秘めた四国の開発に情熱を捧げたいと考える若い人達が来られることを願っております。

以上

9. 祝 詞

洛友会北陸支部長 西岡 敬二

この度、洛友会創立 30 周年を迎えて、地方在住の一員として、謹んで祝辞を申し述べます。顧みますれば、我々卒業生は、戦前戦中を通じて、教室懇話会に属して大いに活躍をしていました。そして敗戦に際しては、当時を思いおこすことすら忌まわしい大きな打撃を受けました。そして戦後、試行錯誤をくり返し、血のにじむ努力を重ね、一步一步、今日の基礎づくりに励んだのであります。洛友会が創立結成された頃であります。時は池田内閣の所得倍増政策にマッチして、国民は大いに意気あがり、現在の経済大国に迄、次第にのしあがってきました。

北陸地方は、戦前戦後を通じて、交通不便で、冬は寒く雪多く、陰惨な地方に思えました。途中経過は省略しまして、北陸トンネルの開通、国鉄北陸線の複線電化、黒四ダムの完成、北陸地方における電力供給の充実、原子力発電所の建設等々により、北陸地方は目覚しい発達を遂げてきました。これらの事業の中核には、洛友会の卒業生が多く参画致しております。尚、将来の自動車高速道の利用、北陸新幹線建設等々により、北陸がより一層京都は申すに及ばず、太平洋岸ベルト地帯への密接な環境となることは必須であります。

洛友会の新進気鋭の卒業生諸賢の、北陸地方への進出を待つことや切なる次第であります。終りに洛友会の今後のご発展を期して止みません。簡単でありますが、一言祝辞を致します。

10. 想い出

洛友会東北支部前副支部長 山下 實

洛友会が発足以来既に 30 年を経て、全国の会員各位が各界に進出活躍され、大発展をとげられましたことを心からお祝い申し上げます。

私共の洛友会東北支部は他支部と異なり大変遅れて発足しておりますので、ここに支部結成当時の想い出を記し祝詞に替えさせて頂きます。

かえりみますと今から 17 年前、関係各位から切望されて居た洛友会東北支部は昭和 41 年 6 月 11 日午後 6 時より仙台市グランドホテルで開催された総会によって設立されました。

設立総会は本部より鳥養会長、林副会長、山本幹事の三先生にご来仙戴き、出席者は 30 名中 14 名で出席率 47 % 盛会裏に開会されました。発足こそ殿を勤めましたが出席率では恐ら

く各支部中最高ではないかと鳥養先生のお褒めを頂きました。

ご指名を受けて不省私が設立準備の経過報告を申し上げ、内田英成東北大教授を議長に選出して議事にはいり、会則並びに役員が万場一致で承認されました。続いて平井支部長より東北支部初代の支部長として東北支部発展の抱負と決意を示され、鳥養会長より激励のお話を戴き、引き続き林副会長、山本幹事より電気教室及び洛友会本部の近況報告等があり会員一同感激のなかに議事を終了しました。

ついで鳥養会長の音頭で乾杯し懇親会に移り、鳥養会長、平井支部長をはじめ昭和2年卒業の林先生から昭和40年卒の松本君まで大正昭和にまたがった大学時代の想い出や近況報告で終始和やかなうちに時間の経つのも忘れ午後9時過ぎ散会しました。

洛友会本部が昭和27年11月23日京都で設立せられて以来中部、東京、関西、九州、北陸、北海道、四国が相次いで設立せられ、電力再編成の各ブロック単位に支部が生れましたのに独り東北だけが遅れをとって居ましたのは私共の力不足は素より、広大な地域を擁する東北六県と行政上或は東京管内に、或は甲信越管内にと錯綜した新潟県とを一緒にした東北ブロック内に属していることも影響していた様に思います。此の広い東北7県内に散在する会員が誠に疎でありお互の居住距離が少なからずマイナスであったと思います。

たまたま昭和27年12月1日に東北電力の社長に御就任幾多の東北の遅れにメスを加えられ、御多忙そのものであられました平井社長の偉大なる御力と洛友会本部の強力な御要請に依り東北支部の設立と相成った次第であります。

今こそ航空路も要所に開設され昨年6月には東北新幹線、11月には上越新幹線も開通となり距離のマイナス点は漸く解消に向いつつあり、又このような東北ブロックであったればこそ未だに緑と水に恵まれ清浄な空気が残されて居るのでエレクトロニクスを始め多くの先端技術その他高度の技術産業の進出には誠に残された最適地ではないかと考えます。必ずや洛友会会員の皆様の御進出を期し皆々様のお力もお借りし乍ら東北の発展と洛友会東北支部の隆昌に微力をつくすようつとめて参る所存であります。

終りに設立以来東北支部に寄せられました本部並びに関係の皆々様の御支援に深く感謝申し上げると共に関係の皆様の強い期待のなかに生れました洛友会東北支部に今後ともお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

11. ギャップを埋めること

洛友会北海道支部長 池内義則

洛友会の30周年を迎えるに当たり、北海道支部会々員一同心より御祝い申し上げます。洛友会創立当初から私達が驚嘆に接した鳥養先生や加藤（義信）先生が会長・副会長を引き受けられ、その後、現松田会長が永年に亘って本会の発展に尽力してこられたことは、真に有難いことで私達会員の常に拠りどころとなって来たことあります。私は特にこの三人の先生には私なりに大きな影響を受け、不思議な因縁を感じています。

私の卒業論文の指導は加藤先生で、「超短波の測定」というテーマでありましたが、戦時中のことで充分な時間がなく、主として文献調査に終始しました。三回生の時、松田先生の電力応用の試験が自問自答の形式で、私は当時から興味を持っていた農事電化について書いたことを覚えています。終戦後、就職難に当って、鳥養先生が「これから日本はギャップを行く人間が重要である。電気屋が電気専門の職場に行く必要はなく、専門と専門の間のギャップを埋める人間が大切なのだ。」と云われ、私はこの言葉に大変感銘を受けました。

私が北海道大学農学部に無給副手として勤務するようになったのは昭和22年ですが、動機は鳥養先生のギャップを埋める精神、松田先生の試験で書いた農事電化のキッカケ、そして加藤先生の卒論研究中に興味を持った植物に対する超短波の影響を北大の超短波研究所（現応用電気研究所）で研究してみたいという希望からありました。初め、農学科の工芸作物学教室に七年お世話になり、次いで農業工学科の農業機械学講座に移り、作物、土壤、機械など、農学と工学の間のギャップを埋めるためにいろいろなことを経験し、やがて40年近くになります。十数年前になると思いますが、雑誌その他で、よく、学際という言葉が流行したことがあります、この言葉こそ鳥養先生の教えられたギャップを埋めることであり、先生の先見に感銘を新たにすると同時に私自身の進み方も間違っていなかったと秘かに快哉を叫んだ次第です。私は現在、農畜産加工機械学講座を担当し、農業電気工学と銘打って電気工学概論を受持っていますが、農業機械学、自動制御・畜産機械・製図法などまるで電気工学とは違った講義をしています。「二兎追うものは一兎を得ず」の諺通り、農学と工学を両立させることは確かに難かしく、専門を志す学生にとって、農業工学に疑問を与える場合もありますが、私の体験を通してギャップを埋めること即ち学際的分野そのものが専門であると説明し、また、誇りを持つように教育しています。

30周年の記事に我田引水的なことを書きましたが、私自身、電気工学科の卒業生として余りにも畠違いの職場に進んだと思っていますので、弁解を含めて自己紹介した次第です。但し、

このような人生を歩むことができたのも、京大の電気出身というバックを持ちながらのことでの洛友会々員の一員であることを常に感謝している次第です。

さて、洛友会北海道支部は昭和29年8月3日、加藤義信先生が札幌に見え、故橋本篤四郎氏（昭・2、当時北海道電力工務部）を中心に八名が参集して支部発足の機運が動き、同年10月10日、第一回総会を開いて正式に誕生しました。初代支部長は松田会長と同期の故大塚徳雄氏（大・6）で、当時、高校の校長先生がありました。この頃、北大には侯野麻太郎（大・14）、片山辰雄（大・15）の両教授が工学部電気工学科に在職され、私にとって非常に心強い先輩がありました。副島敏夫氏（昭・13）は札鉄に勤務され、支部の行事には種々御世話を戴きました。生田努氏（昭・14）も懐しい先輩でした。

二代目支部長は故小田部毅氏（大・7）で、昭和31年から昭和47年まで16年間に亘って支部のために御尽力いただきました。三代目支部長は山上孝氏（大・14）でしたが、昭和52年に東京支部へ転出され、その後、私が四代目支部長を受け継いでおります。

現在、道内会員は15名、大先輩の侯野先生を始め、帰山寛一氏（大・15講）、山田武一氏（昭・2）、藤谷良一氏（昭・14講）、師尾守泰氏（昭・17）の各先輩がおられ、私ごとき弱輩者が支部長を名乗るのは烏鵲がましいことですが、師尾副支部長、芝山竜一（昭・28）幹事その他の会員の御協力によって何とか大役を務めております。北海道電力側の谷村実氏（昭・31）、中山道夫氏（昭・33）、土橋多一郎氏（昭・34）は既に中堅以上の要職で活躍され、北海道大学では、一瀬孝氏（昭・38）、天野要氏（昭・46）、田中譲氏（昭・47）が理・工学各学部で御活躍、南外孝氏（昭・43）は新日鉄室蘭製鉄所で孤軍奮斗であります。今年、大阪変圧器側の高橋博美氏（昭・28）が転勤のため離道されたのは残念でした。

偶、去る6月25日、本年度洛友会本部及び東京支部総会に出席、松田会長先生始め母校の先生方、旧北海道支部会員の山上先生、副島先輩などに会い、又学生時代の先輩、同級生に会えて感激の極みがありました。記念講演会も素晴らしいもので、所謂電気工学専門での先進技術の華やかな、しかも、日本の命運を背負った一面を垣間見た感じで心強く思いました。

洛友会発足以来、支部の会員は20名足らずで、会員の少ないので悩みの種子ですが、会合があれば和気藹々、結構お互いに楽しくやっています。一人でも、二人でも仲間が増えることをみんなで希っています。

12. 電気工学講習所の沿革

洛友デルタ会代表 立石亨三

昭和8年3月に青柳栄司先生の御退官を記念して、青柳先生還暦祝賀委員会が結成され、“噪音集”と“樂只帖”と題する2冊の立派な石版印刷の記念誌が発行された。“噪音集”的第1頁に先生自ら“感激に浸りつつ記憶を辿りて”と題して京都帝国大学電気工学教室の創設を始めとして先生の御一生を回顧する文章が詳しく書かれているが、昭和8年以降の卒業諸兄の手許にはこれをお持ちでないと存じますので、その極く一部をここに御紹介します。

“明治天皇の崩御により國を挙げて最大の不幸と悲哀に当面したが、私共は天皇の御鴻恩の万一に報い奉ると共に聊が斯界に奉仕せんがため有意義な記念事業を行いたいとの微意から、同志と相謀り我が教室教官が中心となって、大正2年1月、専門雑誌“電気評論”を創刊して今日に至っているが、この為に多大の好意と援助を与えられた川北栄夫氏及びその他の諸氏に対し厚く感謝しなければならぬ。“同志に代って我が電気工業界の現状を論じ電気評論を発刊する所以を明にす”と題した創刊号誌上の拙文を読み返してみてそぞろに今昔の感なきを得ない。創刊当時編輯主任として執掌せられたのは司城正木氏（京都帝国大学電気工学科明治44年卒業）の方で舌筆の雄で講習所の講師もされた。これに次いで同年10月23日、更に第2の記念事業として、私立電気工学講習所を設立し高等補習教育の一機関たらしむることに意見が一致し、同志自ら講師となり恰も海外に於ける日曜学校の如く奉仕的に教鞭を執ることを申合せ、翌年1月8日から大学の電気教室を利用して夜間授業を開設することになった。この計画に就いても各位の熱誠なる援助と同情を辱うしたが、殊に故澤柳総長が教室及び学内地所の借用に就いて非常な斡旋の労をとられた厚意を忘却することが出来ない。本講習所は深く現代の世相に鑑み、新たなる学風をつくるため、専門学科の教授のみでなく、時代に適応した德育の方面に力を注ぎ特に学生達をして宗教的信仰心を涵養せしむる方針に努めているが既に約900名の卒業生を出し、これと略同数の京都大学電気科卒業生の股肱ともなり互に相倚り相扶けて一意斯界の為に奮励努力せられつつある有様を見て私はひそかに感涙を禁じ得ない。“苦心經營の結果として先年建設することを得た本講習所の校舎2棟（大学構内にあり）は竣工と同時にこれを大学に寄附し、爾來講習所と共に用することにしている”以上が青柳先生の講習所開設の御思出であるが、その御意志はいまだに引継がれ我々同窓生は入学当時からたたき込まれた“智情意”的三美を具した教育方針に徹底した訓練を受け、常にその精神を忘れることなく励まし合って發展して居るが、昭和13年頃京都大学構内で授業を続ける事は卒業とともに電気事業主任技術者資格を得るため等の都合もあり、當時講習所の運営の実際に当つて居られ

た故閑野弥三先生の音頭に依り講習所の京都大学構内から転出の気勢をあげる意味も含めて、講習所卒業生に依って母校移転資金募集委員会結成して同窓生に呼びかけたところたちまち目的金額の30,000円を集め学校建設用地としては丁度京都府立第一中学校の移転した跡地、現在左京電話局、近衛中学（東山線近衛）にある土地の一画を学外の校舎にて今迄の独特的教育方針を変えることなく又技術的な教育を続けるに必要な実験用機械器具も測定器類も完備されて居る等独立学校設立の機運が熟していた。ところが時を同じくして、たまたま立命館大学中川総長が時勢から考えて科学技術者の重要性を考えられ立命館にもぜひ科学技術部門をつくり理工学部をもつ綜合大学計画の念願が具体化して、京都大学高橋逸夫教授を通じて京都大学工学部に援助を懇請された。これに依って講習所は同一京都地区に同じ様な専門学校を同時2校設立する不都合を考慮され急転直下根本方針が変り、在校生は勿論機械器具一切を無償で譲渡しようと云う話がたちまち出来上った。もともと講習所は前述の通り既に1000名近い卒業を出し夫々独立した事業に専念し立派に会社を設立したもの或は有力な技術者として各方面の事業場に於てなくてはならない立場にあるもの又は教育界に活動する者等独特の精神と体力を持つ技術者として創設当時の先生方の御方針を貫いて活躍して居る同窓の集りであることから同じ教室で同じ先生の門下生として勉強して来た事から押して京都大学電気教室出身者の組織する同窓会（名称洛友会）の準会員として名簿の一部にその氏名を加えて貰って居ましたが昭和31年6月3日洛友会総会が愛知県犬山市で開催された時、講習所卒業生も洛友会正会員として認められたことに決議され創設当時の卒業生から昭和15年卒業生迄の京都大学に於て勉学した者は洛友会会員として名簿に名前を記入して貰っています。

II 洛友会 30 周年記念特別講演

1. 洛友会創立 30 周年を祝して

洛友会会長 松田 長三郎

本会が創立せられて以来、茲に 30 年を経過し、現在会員数約 6700 名（電気工学講習所の卒業生を含む）を数え、我国の学界・技術・産業界各方面に活躍せられ、我国が世界に誇り得る文化の興隆に重要な一翼を荷って貢献されて來たことは、私共の大きな誇りであり、慶びであります。

我が電気工学科は、明治 34 年に、第一回卒業生 6 名を社会に送り出して以来、卒業生を出すこと約 5400 名に及び、これらの卒業生各位は、京大電気卒業の誇りと自負を以て、謙虚に、各界の第一線に立って活躍して來られたので、私共は限りなき慶びと誇りを感じる次第であります。なお、洛友会創立までは、電気工学教室懇話会というのがあって、同様の仕事をしていたが、これには関野弥三先生のお力によることが、最も大きかった。感謝の誠意を捧げたい。

人類の福祉や一国の盛衰は、科学技術の振興普及に係わるところ、甚だ大なるものがあり、この傾向は、今後益々、増大する情勢であります。私共は、その中でも、中心的要素と考えられ、又社会からも、大きな期待を寄せられている電気の学術技術に関与出来ることは、大変幸せなことです。これからは、一層、先端技術の開発が要望されます。摸倣追隨から創造へ、独自の技術を創造して行くことが大切です。会員各位が国内外の各方面に雄飛活躍しておられますことは、誠に慶祝の至りであり、又心強く感ずる次第でありますて、今後、益々世界的視野に立って、国内は勿論、世界における日本の信望と聲価を揚げて頂きたいものです。

17 年後に来る 21 世紀へ向っての力強い、意欲的な活躍を心掛けたいものです。

自分のことを申して済まないのですが、私は今、京都の日独協会の会長や、京都市のケルン委員長や、商工会議所の国際特別委員などを勤めさせて頂いている関係上、西独の大統領や首相などと、お目にかかる機会に恵まれ、殊に故アデナウアー首相の印象は、甚だ濃厚であります。去る 10 月には、京都に創設されたドイツ文化会館開館式には、コール西独首相が見えました。こういう、一地方の開館式に、首相が参列されることは、珍らしいことで、このことを、首相に尋ねましたら、日本における京都の重みと、云われました。

私は昭和 7 年元日の朝、白雪で淨められた伯林に安着、多年、あこがれの学術の国ドイツに着いたのですが、11 月 26 日、京都を立って、神戸から郵船靖國丸（12,000トン、当時、欧洲航路の最優秀船であった、一等船賃、文部省の在外研究員として、2割引きで 960 円）で、34 日かかって仏国マルセイユに着き、パリを経て伯林に直行したのです。

駅前のタクシーに伯林第一のホテルへと頼んだら、ホテル・アドロンに送ってくれました。大使館での新年宴会に出席した際、大使から、どこにお泊りですかと尋ねられ、ホテル・アドロンに泊っていると云ったら、あそこは、政府高官や富有人の泊る所ですと云われた。そんな、ぜい沢をしていたものだから、文部省の在外研究費だけでは足りなくて、留守宅へ、幾度も、金送れと、電報したが、今になってみると、あれやこれやの、そんなぜい沢が、良い思い出になっています。

当時は、我国も、国力・国富とも、それ程では無かったが、現状と比較して、隔世の感が深く、国の有り難さが、しみじみと、身に迫る思いである。

そのシーズンは、ダンスのシーズンでもあったので、誘わるるままに、タキシードに着替えて、大学舞踏会にも出かけて行ったが、夜を徹して踊って、翌日はケロッとして、教授も学生も、朝の講義に出ると云うあんばいで、彼等の健康を羨やましく思ったことであった。

私の在外研究は、昭和6年11月から昭和9年1月の間であります。その間、パリでの万国電気会議や、北欧四ヶ国での世界動力会議などにも、日本代表として出席の機会に恵まれましたことは、大変幸せであります。ストックホルムでの会議を終え、折角、ここまで来たのだから、ソ連に行きたいと考え、武者小路公使（当時は公使館であった）にその旨申し出たら、「生命の保障はできませんよ」と云われたが、意を決してソ連入国を計り、再びフィンランドに引き返したが、船が入港すると、3社の新聞記者のインタビューに遭い、翌朝の新聞に、大きく取りあげられているのに驚いたが、新聞記者諸君のインタビューは、これが初めてであります。これらの皆さんとの親切で、市内を案内された後、レニングラード行きの列車に乗り込んだが、これが、武者小路公使から、「生命の保障は出来ませんよ」と、宣告された運命の旅行のかど出かと思うと、一種悲そうな感に打たれた。沿線で、そこで、ロシア・ロマノフ王朝の皇族達が処刑された所ですと知らされた時には感無量であった。レニングラードに着くと、ストックホルムで、ソ連のインツーリスト（ソ連の旅行公社）に頼んでおいたので、レニングラード大学の女子学生が迎えに来て下さっていて、この人の案内で、レニングラード大学や有名なエルミタージュ博物館などを見せて貰った。同大学では、教授や夫人達10数人が集まって下さって歓迎昼食会に招かれたほか、1000万ボルトの衝撃試験装置などを見せてもらった。モスクワで、大田大使にお目にかかると、「よく来られましたネ」と慰労の言葉を頂いたが、兎角、いつの間にか、消されている日本人があつたからであろう。

モスクワでは、大学やその他を見学したが、ホテルの窓から望見する街の光景は、深夜でも或る程度の人通りがあり、又役所へ行くと、堂々たる体格の女性のお役人が、親切に応待して下さる。ソ連は、国としては厳しいが、個人個人は、温たかな人が多いように思われた。

南方、ドニエプル発電所の見学に出かけて行ったが、9万馬力、9基（米・英製）のうち、

3基が据え付けられていた。ここも警戒厳重で、剣付鉄砲で身構えた兵士に守られていたが、これは爆破の危険が予想されたからとのことであった。何れにしろ13日間（当時は、これ以上の滞在は許されていなかったようである）の滞在を終え、キエフを経てポーランド経由、ウイーンに安着、電気教室や留守宅に無事ウイーンに着いたと、電報で知らせたことであった。

〔注〕本文は、昭和58年6月11日関電会館における講演をもとに追補されたものである。

2. 原子力発電

日本原子力発電株式会社 会長 伊藤俊夫

戦争の痛手まだ癒えやらぬ昭和25年の初春、吾々の大先輩である一本松さんが戦後はじめての電気事業調査団の一員として渡米された節、雪深いデトロイト市で、当時デトロイト・エジソン電力会社の副社長をしていたシスラー氏から「アメリカでは既に原子力発電の研究をしている」と云う話を聞いてこられた。これがそもそも始まりである。その翌年アメリカではすでに100kWの実験用原子炉を完成していたのである。続いて昭和28年には、アメリカの大統領アイゼンハワーは「アトムス・フォア・ピース」とよびかけて原子力の平和利用を解放し、それまで機密の扉の中にあった原子力技術並に器材の米国外への移転の道が開かれた。

その後、我国における原子力技術の発展は急速で、昭和41年7月には東海村に最初の原子力発電所が英國製16.6万kWのガス炉で運転が開始され、次いで昭和45年3月には敦賀に35.7万kWの米国製軽水炉が誕生したのである。以来各電力会社が主体となり関係各方面の援助と協力により、次第に規模の大きい原子力発電所が着々として建設され、現在電気事業用で運転中のもの24基、1717.7万kW、建設中及び建設準備中のものを合わせると44基約3600万kWに達している。（第一表）この数字は世界の各国と比較して、運転中のものでは米国、フランスについて第3位であり、計画中のものを含めた総計では米国、ソ連、フランスについて西独と4,5位を争っている。（第二表）

原子力発電は開発の当初は火力発電と比較して、その発電コストは必ずしも優位にあるとは云い難かった。それは、燃料費は原子力の方が格安であったが、キロワット当たりの建設費が火力の約2倍かなり固定費が割高になるからである。ところが昭和48年のオイルショック以来石油価格の高騰により燃料費の格差が大きく原子力は経済性において火力よりもはるかに有利になって来た。

発電所の建設費も二回にわたるオイルショックのための物価上昇で原子力、火力ともに10年前とくらべると約3倍となり、原子力の建設費が火力の約2倍と云う点では同様であるが発電コストでは火力のなかでは燃料コストの安い石炭火力と比べても原子力発電は低位にある。

（第三表）

今後石油の値段は上下の変動はあるだろうが、その埋蔵量は数十年であると云われる石油の命脈を考えると、石油代替エネルギーの主役として、又低廉な電力を安定的に供給を行っていくため、原子力発電の役目は今後益々重要になって行く筈である。

このため政府策定の電源開発目標によると、原子力は昭和65年4600万kW、75年で9000万kWとなっている。だがこの要望通り建設を進めることは決して容易ではない。先ず立地問題の解決が必要であり、このためには原子力施設の安全性、信頼性の向上はもとより、周辺地域の利害問題、住民の納得等、円満な了解を前提とする必要がある。

最近のエネルギー事情の変遷から石油代替としての原子力の必要性が一般に認められ、又10年以上の安定運転の実績から、次第に原子力発電の理解が深まって来たように思われるのは幸であるが、立地問題は容易ではなく、各電力会社の現時点における長期見通しから推察すると、70年代で5000万kW程度の目途しかついていないようである。

国内でのエネルギー総需要の中で電力の占める割合は年々増加しており、昭和55年で約3割、75年には4割に達するものと想定されている。電力事業用の発電々力量の推移は、昭和35年頃から水主火従から火主水従に移り、48年度では火力は81.3%（内石油だけで71.1%）までに達したが、55年度では水力16.6%、火力67.5%、原子力16.0%であり（第四表）、57年度で原子力は20%に達している。将来目標として65年度は原子力は設備容量で22%、電力量で30%、75年は設備容量で30%、電力量で43%が期待されている。

上記の様に長期的には原子力への依存度が大きく見込まれているが、原子力の割合をどこまで延ばせるかについては、限度があると思われる。今後石油及びLNGの消費は極力制限し、天与の資源である水力の有効利用を行うとともに、石炭、地熱の併用をも考えるべきである。然し各種電源の運用に際しては次の事柄を考慮すべきである。

- (1) 水力、火力、原子力の発電コスト特性が夫々異なるので、最も経済的な運用配分を考える必要がある。
- (2) 電力需要は昼夜並に季節的に絶えず変動する。従って各種電源の負荷追随性能を考慮して負荷配分することを要する。
- (3) 夏期冷房需要の増大に伴い、年間負荷率は65%から50%近くに低下しつゝある。このピーク対策に原子力は不向きである。

最近原子力発電は電力会社はもとより、関係各方面の多年の努力の集積が実を結び、57年度には我国の原子力発電所24基の総合設備利用率は67.6%と云う世界に誇るべき記録をしるした。又九州電力玄海1号機及び東京電力福島第二1号機は夫々367日、384日の連続運転記録を達成しプラント信頼度の高さを示した。今後も益々記録の向上が示されることと思われる。だが将来電力供給の中の原子力の寄与度が高くなるにつれて、上記三条件が問題とな

原子力発電所の運転。

	設置者	発電所名(設備番号)	所在地
運転中	日本原子力発電 東京電力 中部電力 関西電力 中国電力 四国電力 九州電力	東海第二 敦賀(1号) 福島第一原子力(1号) 福島第一原子力(2号) 福島第一原子力(3号) 福島第一原子力(4号) 福島第一原子力(5号) 福島第一原子力(6号) 福島第二原子力(1号) 浜岡原子力(1号) 浜岡原子力(2号) 美浜(1号) 美浜(2号) 美浜(3号) 高浜(1号) 高浜(2号) 大飯(1号) 大飯(2号) 島根原子力(1号) 伊方(1号) 伊方(2号) 玄海原子力(1号) 玄海原子力(2号)	茨城県那珂郡東海村 福井県敦賀市 福島県双葉郡大熊町、双葉町 福島県双葉郡大熊町、双葉町 福島県双葉郡大熊町、双葉町 福島県双葉郡大熊町、双葉町 福島県双葉郡大熊町、双葉町 福島県双葉郡大熊町、双葉町 福島県双葉郡大熊町、双葉町 静岡県小笠郡浜岡町 福井県三方郡美浜町 福井県三方郡美浜町 福井県三方郡美浜町 福井県三方郡美浜町 福井県三方郡美浜町 福井県三方郡美浜町 福井県三方郡美浜町 福井県三方郡美浜町 島根県八束郡鹿島町 愛媛県西宇和郡伊方町 佐賀県東松浦郡玄海町 佐賀県東松浦郡玄海町
	小計		
	日本原子力発電 東北電力 東京電力 中部電力 関西電力 九州電力	敦賀(2号) 女川原子力(1号) 福島第二原子力(2号) 福島第二原子力(3号) 福島第二原子力(4号) 柏崎刈羽原子力(1号) 柏崎刈羽原子力(3号) 高浜(3号) 高浜(4号) 川内原子力(1号) 川内原子力(2号)	福井県敦賀市 宮城県牡鹿郡女川町、牡鹿町 福島県双葉郡富岡町、楓葉町 福井県大飯郡高浜町 新潟県柏崎市、刈羽郡刈羽村 静岡県小笠郡浜岡町 福井県大飯郡高浜町 鹿児島県川内市
	小計		
建設中	北海道電力 東北電力 東京電力 中部電力 関西電力 九州電力	泊(1号) 泊(2号) 巻原子力(1号) 柏崎刈羽原子力(2号) 柏崎刈羽原子力(5号) 島根原子力(2号) 伊方(3号) 玄海原子力(3号) 玄海原子力(4号)	北海道古宇郡泊村 新潟県西蒲原郡巻町 新潟県柏崎市、刈羽郡刈羽村 島根県八束郡鹿島町 愛媛県西宇和郡伊方町 佐賀県東松浦郡玄海町
	小計		
	北海道電力 東北電力 東京電力 中部電力 関西電力 九州電力	(1号) (2号) (1号) (2号) (5号) (2号) (3号) (3号) (4号)	
	合計		

- (注) 1. 着工年月日は、工事計画認可の月とした。
 2. 運転開始予定年月は、原則として昭和58年度施設計画によった。
 3. 建設準備中とは、電調審で決定し、工事計画認可を受けていないものをいう。

建設状況（電気事業用）

第一表
(昭和58年5月1日現在)

炉型	認可出力(万kW)	電源開発調整審議会決定年月	原子炉設置許可年月日	着工年月	運転開始年月日
GCR	16.6	34-12-12	34-12-14	36-3	41-7-25
BWR	110.0	46-12	47-12-23	48-4	53-11-28
〃	35.7	40-5	41-4-22	42-2	45-3-14
〃	46.0	41-4	41-12-1	42-9	46-3-26
〃	78.4	42-12	43-3-29	44-5	49-7-18
〃	78.4	44-5	45-1-23	45-10	51-3-27
〃	78.4	46-6	47-1-13	47-5	53-10-12
〃	78.4	46-2	46-9-23	46-12	53-4-18
〃	110.0	46-12	47-12-12	48-3	54-10-24
〃	110.0	47-6	49-4-30	50-8	57-4-20
〃	54.0	44-5	45-12-10	46-2	51-3-17
〃	84.0	47-2	48-6-9	48-9	53-11-29
PWR	34.0	41-4	41-12-1	42-8	45-11-28
〃	50.0	42-12	43-5-10	43-12	47-7-25
〃	82.6	46-6	47-3-13	47-7	51-12-1
〃	82.6	44-5	44-12-12	45-4	49-11-14
〃	82.6	45-5	45-11-25	46-2	50-11-14
〃	117.5	45-10	47-7-4	47-10	54-3-27
〃	117.5	45-10	47-7-4	47-11	54-12-5
BWR	46.0	44-5	44-11-13	45-2	49-3-29
PWR	56.6	47-2	47-11-29	48-4	52-9-30
〃	56.6	50-3	52-3-30	52-12	57-3-19
〃	55.9	45-5	45-12-10	46-3	50-10-15
〃	55.9	49-7	51-1-23	51-5	56-3-30
(24基)	1,717.7				
PWR	116.0	53-12	57-1-26	57-3	62-6(予定)
BWR	52.4	45-5	45-12-10	46-5	59-6(〃)
〃	110.0	50-3	53-6-26	54-1	59-1(〃)
〃	110.0	52-3	55-8-4	55-11	60-7(〃)
〃	110.0	53-7	55-8-4	55-11	62-9(〃)
〃	110.0	49-7	52-9-1	53-11	60-10(〃)
PWR	87.0	53-3	55-8-4	55-11	60-2(〃)
〃	87.0	53-3	55-8-4	55-11	60-8(〃)
〃	89.0	51-3	52-12-17	53-11	50-7(〃)
〃	89.0	53-7	55-12-22	56-3	61-3(〃)
(11基)	1,070.4				
PWR	57.9	57-3	申請中		63-12(予定)
〃	57.9	57-3	〃		65-12(〃)
BWR	82.5	56-11	〃		66-12(〃)
〃	110.0	56-3	〃		65-10(〃)
〃	110.0	56-3	〃		65-4(〃)
PWR	82.0	56-3	〃		63-9(〃)
〃	89.0	58-3	申請準備中		65-10(〃)
〃	118.0	57-9	申請中		66-10(〃)
〃	118.0	57-9	〃		67-10(〃)
(9基)	825.3				
(44基)	3,613.4				

世界の原子力発電設備の運転

項目 国名	進 捗 別							
	運 転 中		建 設 中		発注済・計画中		合 計	
	出 力	基	出 力	基	出 力	基	出 力	基
ア メ リ カ	6,517.2	80	7,194.4	63	496.8	4	14,208.4	147
フ ラ ン ス	2,496.4	32	3,186.7	27	2,046	15	7,729.1	74
日 本	1,734.2	25	1,070.4	11	853.3	9	3,657.9	45
ソビエト連邦	1,725.5	33	3,044	30	3,900	36	8,669.5	99
西 ド イ ツ	1,030.5	12	1,399.3	12	1,338.2	10	3,768	34
イ ギ リ ス	881	32	622.4	10	249.6	2	1,793	44
ス ウ ェ ー デ ン	770.7	10	220	2			990.7	12
カ ナ ダ	769.7	13	837.6	11			1,607.3	24
ベ ル ギ 一	358.5	5	209.4	2			567.9	7
台 湾	324.2	4	190.2	2	187.2	2	701.6	8
フィンランド	231.2	4			239.2	2	470.4	6
ス ペ イ ン	205	4	970.7	10	510	5	1,685.7	19
ス イ ス	203.4	4	100	1	217.2	2	520.6	7
東 ド イ ツ	184	5	264	6	176	4	624	15
イ タ リ ア	132.5	3	207	3	600	6	939.5	12
ブルガリア	132	3	144	2	700	7	976	12
チェコスロバキア	88	2	264	6	417.4	7	769.4	15
イ ン ド	86	4	141	6	47	2	274	12
ユーゴスラビア	66.4	1			104	1	170.4	2
韓 国	58.7	1	702.8	8			761.5	9
オ ラ ン ダ	53.5	2					53.5	2
アルゼンチン	34	1	138.9	2	187.2	3	360.1	6
パ キ 斯 タ ナ	13.76	1			90	1	103.76	2
そ の 他			1,053.1	15	2,720.2	29	2,773.3	44
合 計	18,096.36	281	21,999.9	229	15,079.3	147	55,175.56	657

- (注) 1. 日本原子力産業会議原子力発電所一覧表による。
 2. 正味電気出力3万kW以上の発電所を対象とする。
 3. 日本の進捗別内訳には、新型転換炉「ふげん」(運転中16.5万kW)
 及び高速増殖炉「もんじゅ」(計画中28万kW)を含む。

・建設状況 (1982年12月31日現在)

第二表
(単位万kW グロス電気出力)

炉 型 别				ガス炉	重水炉	その他の 熱中性子炉	高速増殖炉 (FBR)
軽水炉	炉	計	その他				
加圧水型 (PWR)	沸騰水型 (BWR)						
9,454.7	4,595.5			14,050.2	34.2		38
7,336.4				7,336.4	236	7.7	149
1,700.6	1,896.2			3,596.8	16.6	16.5	28
5,897.5	7			5,904.5			75
2,830.9	721.8			3,552.7	30.8	5.8	178.7
114.4				114.4	1,506.1	10.3	162.2
278	712.7			990.7		1,607.3	
567.9				567.9			
190.2	324.2	187.2		701.6			
93	138.2	239.2		470.4			
1,092.2	343.5	200		1,635.7	50		
169.8	350.8			520.6			
624				624			
628.5	290			918.5	16	5	
976				976			
769.4				769.4			
	42			42		232	
66.4		104		170.4			
693.7				693.7		67.8	
47.7	5.8			53.5			
		90	90			360.1	
2,442.3	135	946.4	3,523.7			1376	
					249.6		
35,795.6	9,562.7	1,766.8	47,125.1	1889.7	2,575.86		630.9

電源別建設単価及び発電原価(内訳)

第三表

56年度運開					
	建設単価 (円／Wh)	送電端 発電原価 (円／kWh)	発電端 発電原価 (円／kWh)	固定費	燃料費
一般水力	54.2	18.7 (94)	18.6	18.6	—
石油火力	11.5	19.8 (100)	19.0	3.6	15.4 〔81〕
石炭火力	18.7	14.8 (75)	13.5	6.1	7.4 〔55〕
LNG火力	14.2	17.6 (89)	17.0	4.4	12.6 〔74〕
原子力	24.9	11.1 (56)	10.5	8.1	2.5 〔24〕

(注) 1. 送電端発電原価は昭和56年度近辺に運開した、あるいは運開が予定されている地

点を参考(施設計画ベース)にモデル的なプラントを想定し算出した。

2. 利用率は、いずれも70% (水力は45%程度)を前提とした。

3. 価格は、運開初年度時点価格とした。

4. モデルプラントは、次のように想定した。(新規立地を前提)

一般水力(ダム・水路式) 1~4万kW

石油火力 60万kW 4基

石炭火力 60万kW 4基(海外炭使用)

LNG火力 60万kW 4基

原子力 110万kW 4基

5. ()内は、各運開年度における石油火力を100とした時の各種電源の送電端発電原価の相対値。

6. []内は発電原価に占める燃料費の百分率。

って来る。それは原子力発電所の負荷応答性が色々と工夫が行われつゝあるが、水力、火力並みと云うわけには行かないからである。

原子炉は3年から4年分の多量の核燃料を常に炉内に保有している。電気出力100万kW級の原子炉で約90～140tの微濃縮ウラン（ウラン235濃縮度2～3%程度）を装荷しており、毎年その1/3及至1/4を取替えし運転をしているのである。

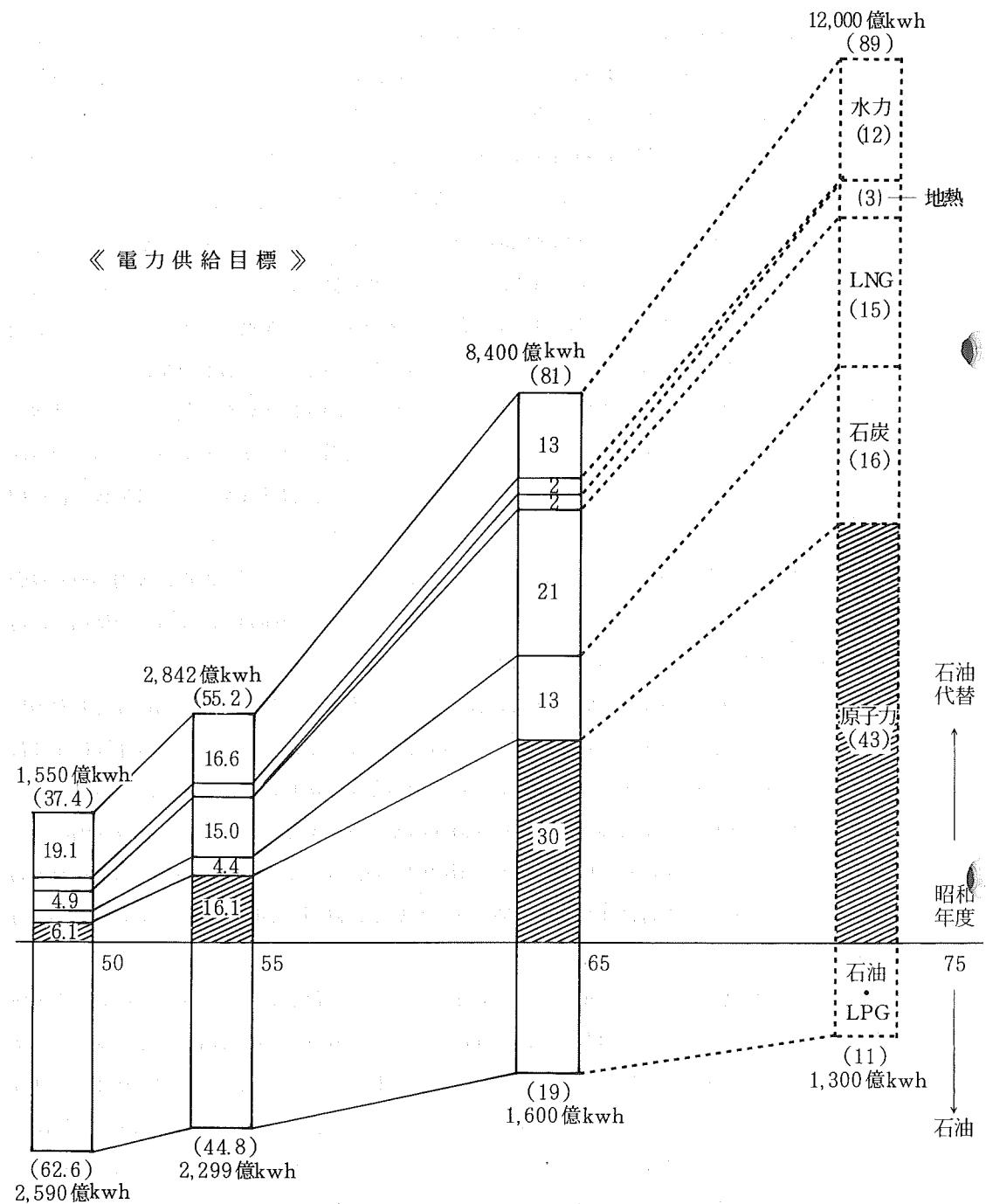
火力では100万kWで年間の燃料消費量は石油で150万kl、石炭なら250万tである。この量の3～4倍分の燃料を昔の煉炭ストーブのような格好で火炉内に抱えこんでいたらどうなるだろうか。幸にして化石燃料の消費は瞬間的であって、燃えてガスとなって煙突から出て行く。だが原子力は重量こそ少いが単位重量あたりでは5～8万倍の莫大なエネルギーをもつ燃料を3～4年かけて緩慢に燃すのであり、その際ウランの3%程度が燃えて灰になるだけで炉内の重量の減少は皆無に近い。勿論燃焼用の空気も不要である。（これが潜水艦に利用される所以である。）原子炉が一定負荷で運転されている際には問題はないが、負荷の急変に遭遇すると装荷中の燃料集合体全部が温度変化を来し、燃料棒破損につながるおそれがある。即ちゆるい負荷変化でないについて行けない。従って深夜停止早朝再起動なんてことは現状では無理である。

電源構成中原子力の割合を大きくしていくにつれ、揚水式水力の開発促進、火力の運転機動性の向上、ガスタービンの採用等の対策と併せてピークロードの抑制、深夜負荷の増加等、電力需要の時間的平坦化、年負荷率の増加への努力が必要であろう。

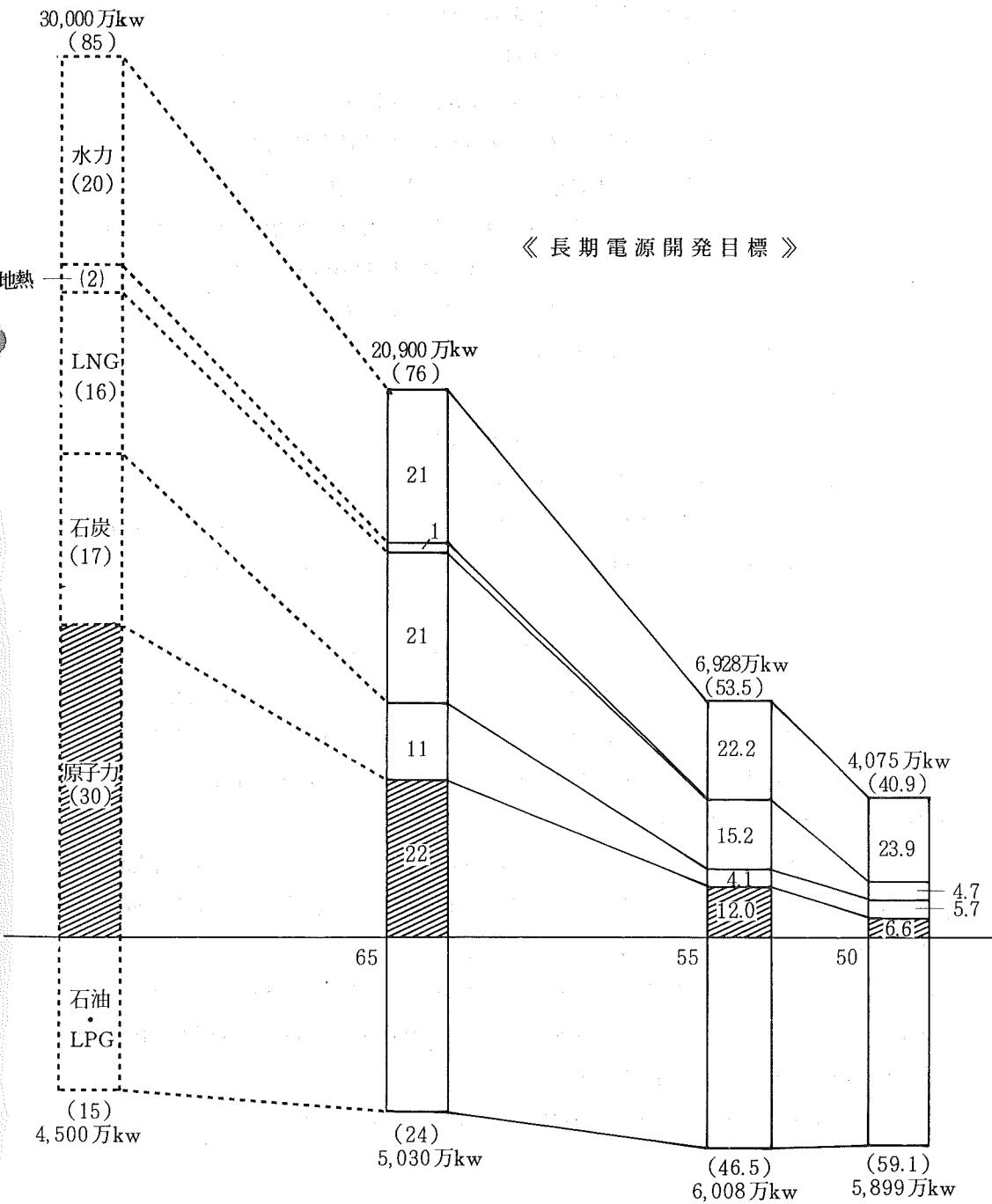
ところで世界の原子力発展の歴史は大面白い。原子力発電を最初に積極的に推進したのは英國であった。昭和31年コールダーホール発電所の運転を手はじめにその後6年間に13台のガス炉を完成、一時はなんでも世界一を誇る米国の鼻をあかしたものである。これは特に英國のエネルギー事情によるもので、その後北海油田発見等もあり、第一位はやはり米国にゆずり、今では第六位にあまんじている。これと対照的なのはスペインで、小国ではあるが原子力にはじめから熱心で現有は4基200万kWにすぎないが、計画は英國について第七位1685万kWである。

一方米国の開発は英國とは数年おくれて昭和34年20万kWドレスデン発電所運転以来実用化段階にはいり、昭和41年頃から急速に発展、毎年1500～2500万kWの発注が続き、47年には4100万kW48年には4700万kWの発注が行われ、一時は計画として250基2億4500万kWと発表されたが、重なるオイルショック、不況、電力経営の不振、TMI事故安全規制の強化、原子力工期の長期化、原子力コスト高等々の原因が重なり、米国の原子力開発意欲は急速に冷却し、この10年間が計画並に建設中のものの中止が100基に及び、昭和54年以降は発注はゼロとなり、現計画は147基1億4000万kWに低下してしまった。（もっとも計画中止は原子

電力供給構成比の推移



第四表



力だけでなく、この間火力の中止も 39 基 2300 万 kW に達している)

米国の原子力発電が低迷している今一つの理由は国の原子力政策が流動的であることである。昭和 52 年カーター大統領が就任と同時に核拡散防止政策を強く打出し、原子力発電を否定するわけではないが、使用済燃料中に含まれる少量のプルトニウムの軍事転用をおそれるあまり、使用済燃料を再処理し、抽出したプルトニウムを高速炉に利用してウラン資源の有効活用を計るべきだとする原子力開発の基本理念にブレーキをかけ、使用済燃料は再処理をしないで半永久的に貯蔵するのが好ましいとする方針をとった。この方針は各国のひんしゅくを買い、国際的な核燃料サイクル評価会議で約 2 年間討議され、米国の主張は実質的には受け入れられなくて終っている。(55 年 2 月) だがその前年 54 年 3 月米国 TMI の事故は誇大な報道も加わって、世界中に衝撃を与え、原子力推進の足を引張る結果となった。TMI 事故の実態はその後十二分に検討され、世界各国ともその対策としては、安全性、信頼性向上のため充分な改善努力が行われて来ている。

こうした各国の変遷にめげず、依然として健実な進展を続けているのはソ連とフランスであり運転中はフランスが 2 位で、計画総計はソ連が 2 位である。

米国も昭和 56 年レーガン政権に移ってから原子力産業界の期待は大きく膨らみ、大統領もこれに応じて「核不拡散と平和利用協力」に関する積極的な声明を出し、原子力体制の改善に乗り出して来ている。本年(58 年)1 月「放射性廃棄物政策法」が成立した。これによると放射性廃棄物の処分のみならず、使用済燃料の処分も 1998 年迄には政府がその施設を完了することになっている。これは廃棄物の処理処分の見当もつかないで原発の建設は経済的に認められないとするカリフォルニアその他の州のモラトリアム指向に対する政治的な対応策とも見られる。米国内の民間再処理工場の運転開始とか、クリンチリバー高速炉の建設についても、米政府の予算がつかぬようで、残念なことである。

原子力開発のトップランナーであった筈の米国が前述のようなことで、すっかり冷却状態であるが、日本としては水力以外これと云う天然エネルギー資源を保有しないのであるから、資源保有国のまねはしていられない。原子力と云ってもウランは輸入しなければならない。この貴重なウランを徹底的に利用し尽くすためには、軽水炉、再処理、高速炉の核燃料サイクル路線に沿ってその実現のため一層の研究開発の努力がなされるべきである。と同時に国際的な技術交流、原子力政策外交への協調が求められる。

〔注〕 本文は、昭和 58 年 6 月 25 日目黒八芳園において講演されたものである。

3. 競争と協調

富士通株式会社 会長 小林大祐

緒 言

日米の経済関係は将来、半導体やコンピュータ等の高度な技術分野で両国間の競争が激しくなり「深刻な貿易問題」が起こる、と米国人の有識者の多くが考えていることが外務省がこの程発表した「米国における対日世論」の調査結果で明らかになったと新聞で報道されている。米国政府、議会で日本の産業政策への批判が強まっている反面、日本型産業政策を学んで競争力をつけようとする動きが出ているのも、先端技術分野での日本の追上げに対する米国のいだだを反映するものだろう。米国の危機感、威信をかけて優位の維持を図る先端技術分野での米国の対日批判は貿易収支の赤字だけを問題視するような単純な議論ではない。その根底にあるのは、将来この分野での米国の優位が、日本の挑戦によって崩れるのではないかという危機感であり、外務省の発表した対日世論調査で、「日本の先端技術はこの分野における米国の指導的地位に対し深刻な挑戦であると思うか」との質問に対し米国人有識者層の75%が肯定的回答をしている。このような世論を背景に米国政府と日本政府の間の産業育成策についての議論が目下続けられている。

一国の産業政策はその国の産業の生い立ち、その国なりの風土が反映しているのである。いわば「風景」があって、この違いを無視して一律に論じることは出来ない。

今、先端技術産業として取りあげられているコンピュータは30年、半導体で20年と、その歴史は極めて浅く、偶々この時代に、この産業界の渦中にあって悪戦苦闘を重ねて来た者にとっては誠に感慨無量である。

経過を顧みて

第二次大戦の荒廃の中から、米国よりの食糧援助を受け、ひたすら生きるため、また国際経済社会において一人前の地位を回復できる日を目標に努力を重ねてきたのである。

政府は戦後の復興のため合理化機器の導入を奨励し、輸入国税は免除し、また将来の発展が注目される電子計算機については技術導入を推奨し、業界は先を争って米国メーカーと技術導入を実行した。わが社はIBMにのみ対象を絞って交渉したため成功せず、独自路線を歩まざるを得なかった。結果からではあるが、技術進歩の激しいこの分野では外国技術に依存することは一長一短があり、立上りに時間を要するが、独自路線の選択が成功の第一歩であった。1960年代の前半のアメリカコンピュータ業界は隆盛を極め、自立心が旺盛で政府依存の考え方は歯牙にもかけずその意気は恐るべきものであった。例えばある有名なメーカーの首脳は直接私に「政

府に研究補助金を申請することは研究計画の内容を公表することであり、企業秘密の最大のものを公表することで到底考えられないこと」と言っていた。また、急成長のミニコン業界の先駆を走っていたDEC社の幹部は「高利潤をあげる秘訣は政府の仕事をしないことである」と広言してはばからないアメリカ産業界のわが国と極端に違う風土を感じたのであった。

アメリカ政府は多額の研究開発費を投じている。主として防衛関係であるが開発そのものがビジネスの対象であり、量産は開発と別扱いとなっている。わが国の場合には開発と量産は表面では別扱いではあるが実質、一体であり、柔軟な取扱いが実行されており、国際的には大きく違う風土の一つである。従って政府と民間の研究費の比率、日本28%、米国32%（国防関係を除く）は実質あまり差がないのではないか。アメリカ社会はすべて競争によってけじめをつける風習が根強く、また市場も大きく、これを受け入れ易い社会であるが、日本は市場も小さく、競争も激しく、競争のルールも未成熟で、アメリカ社会からは理解が難しく、閉鎖的と見られるのも致しかたない。研究開発に対する補助政策は欧州の方がわが国よりも多額であるが、補助することにより、業界を再編成し、機種ごとに一社に統合して集中的に助成する政策をとった。英国はICLに、仏国はCII、西独はシーメンス等である。わが国では6社のメーカーを第一次は3グループに、次いで2グループに研究組合を編成して補助する方策をとった。わが国でも編成の過程で1グループに対する強い意見もあったが、競争の原理が自由社会では欠くことのできない原則であって今日の状況となつたが、結果は欧州では日本に比べ成果をあげることが出来ないのは競争よりも協調が強いためである。

ヨーロッパは狭い地域で大国が共存してきた歴史的過程から協調の風土が育成されているのであろう。米国は広い地域で自由に競争して発展している風土から協調よりも競争が激しく強者はますます強くなる風土である。独禁法で規制されていた数年前より「強いアメリカ」政策がとられ、世界に向かって競争を強いる政策を展開しつつある。わが国は競争しつつまた政府の政策に従って協調を保ちつつ今まで発展してきたのであるが、今や新しい局面に遭遇しているのである。

競争と協調

これから高度技術産業社会においては、競争は一段と激しくなり、それに伴って情報の機密をどう守っていくかが大きな問題となってくる。昨年の「IBM産業スパイ事件」はその一つの現われと言えよう。こうした情報の機密を護るために、いくら法律で縛ってみたところで根本的解決になるとは思えない。むしろ法律に訴えることはお互い傷つき、決してプラスにならない。競争にも限界があることを理解し、お互い協調していくことが重要と思う。

昨年10月、当時IBM会長であったケアリー氏がカリフォルニアで開催されたAEA（ア

メリカン・エレクトロニクス・アソシエーション) の年次総会でおこなったスピーチはなかなか示唆に富むものである。以下少しその内容を紹介しよう。

私は長い間、この業界において、誰も彼もがそういった(機密を盗むこと)をするのではなく、ごく一部の人々であることを知っている。いづれにしても、いくつかの反応があり、それらはいづれも様々な方法で、非論理的な行為を合理化しようとしている。

この種の合理化は、我々の産業が基盤としている投資を危うくするものである。この脅威に対抗しうるものは何か。それはビジネス論理と言う名の古くから言われている常識的な原則である。

原則①企業がある人を傭い、その人が会社の機密や、従業員に接する場合、彼が仕事上で生みだすものはすべて、その企業に属する。彼の頭の中に入れようと、カバンにつめ込もうと、企業の知的所有財産を外に持出し、それを売る何の権利も持たない。

原則②研究開発した企業は、その技術革新の報酬に対する権利を有する。それはパテント、コピーライトに対する権利であり、またリードタイムに対する権利などであり、いづれも投資の結果、企業が手に入れるものである。

われわれは一たん出荷された製品を研究することは普通のやり方であり、完全に適法であることを十分承知している。しかし機密情報を盗むことによって、技術革新のリードタイムを短くすることは、法的に問題があるし、論理的にも問題がある。研究開発投資の報酬を無にすることは、投資の動機を失わせることになる。

もしわれわれが、ごく少数者の論理基準が大きくなることをそのまま放置すれば、それはやがて技術革新と研究開発投資に大きく依存しているこの企業をむしばむガンになる。

彼がここで言いたかったことは新しい技術を開発した者は、それだけの先行者利益を得て当然である。それを不正な手段で手に入れ、先行者利益を横取りするようなことは許されべきでないということであろう。この点に就いて私も全く同感である。

先行投資による先行者利益は守らなければならないが具体的には“論理”で解決することは難しい。論理に基づいた協調が伴わねばならないと思う。

I B Mは世界のコンピュータ市場の60%程度のシェアを占めていると言われている。この市場でI B Mコンパチブル製品が燎原の火の如く急速に受け入れられ普及しつつあり、このことが事件の発端である。世界の60%の市場に競争原理を適用して大いに歓迎されているのであり、ソフトウェアの互換性は大きな社会問題となりつつある。互換性維持に必要な最小限度の情報は特許等のように、適法に公開されるべきであり、この程度の協調がなければ根本的解決にならないのではないか。

情報処理のような歴史の新しい技術に就いては著作権等、法制度は勿論、社会での常識的な理解も低く、特に目に見えない知的部分の多い分野であり、問題は今後共、絶えないと思われる。

協調についての先進国ヨーロッパでは逆に先端技術分野で遅れをとっているのに対し競争の最も激しい米国で、特にレーガン政権の「強いアメリカの再現」政策に裏付けされた米国の先端技術産業界は日本の将来に対し強い関心を持っており、競争は益々激しくなる傾向にある。つとめて協調、即ち話し合いに最大の努力を続けることがわれわれの努めと考えている。

〔注〕本文は、昭和58年6月25日目黒八芳園において講演されたものである。

4. 先端技術の動向

シャープ株式会社 副社長 佐々木 正

私が洛友会の関西支部長の在任期間中に最も力を入れたことの一つに日本の先端技術が国際摩擦問題を引き起こしその対策に駆り出されたという事がありました。そこで、この先端技術について思い出話としてお話をしたいと思います。

結論的に申しますと、日本にはハイテクノロジーがあると言われていますが、アメリカに比べるとハイテクノロジーはなく、非常に遅れているというのが定説になっています。そしてどうしてアメリカに追い付くのかが現在の問題であり、日本がハイテクノロジーを持っているから国際摩擦が起こるというのはおかしいというのが、東京方面での意見であります。私もこの方面について多少調べてみました。今回は時間の都合で概略的なお話しになりますが、話させて頂きます。

松田先生からもお話のありましたように、21世紀は日本の時代と言われています。それでは、2000年頃にはどのようになるかと言うことを目安として述べたいと思います。まず、2000年からの技術革新の一つはエネルギーの革新であろうと思います。これは石油ショック以来定説となり事実そのように進んでおります。このエネルギーに関連し日本の経済誌では、コンドラチエフの波という波動説を取り上げています。御存知のようにコンドラチエフの波とは50年周期で景気が変化するというものであり、一時は無視されていましたが、経済学者の間で最近見直されているものです。そしてその周期は特に技術革新と関係があるというもので、技術革新が進んでいる時は景気は上向きにあり、技術が成熟期に入ると景気は下向きになるということです。この50年周期説が話題になった時、当時英国のエコノミストでは100年周期

説を取り上げています。大英帝国が繁栄したのは、1800年のいわゆる産業革命から1900年までの100年間であり、そのベースは石炭にあった。これは勿論第一産業革命は石炭により作られたスチームが総ての動力のもとになっていたという事で、石炭産業が100年間非常に隆盛を極めた訳です。それが斜陽産業となり、1900年前後から石油にウェイトがかかってきました。そして、石油がエネルギーの原動力となりました。そして10年前これもエコノミストに端を発しているのですが、石油がそろそろ無くなると言うことを言い出し、ローマクラブがこれに火を点け“石油有限説”が出てきました。これをうまく利用し戦略的にアラブが石油をコントロールした事から、いわゆる石油ショックが世界を揺るがしました。これから石油の見直しがされ始めた訳です。また、これとは別に地球のエントロピーから考えて、どうしても石油を節約し、地球自身が反省しなければ破滅するというエントロピー説も生まれ、石油を大事に使い他のエネルギーに転換する必要が説かれ始めました。このようにエネルギーについては、1800年からの100年は石炭、1900年からの100年は石油、そして2000年以後には新しいエネルギーが出て来るであろうという具合に100年単位に推移しているという訳です。この2000年以後のエネルギーについては、原子力あるいは太陽を中心となっていますが、他にも色々と出てくるであろうし多様化されつつある現状です。ともかく石油丈ではないという形で現われています。

次に情報工学についてですが、先程のエントロピー説から見た地球の破滅というものに対して、最近では情報工学から見た地球の破滅という事が出てきています。これは京都の品川先生を始めとした情報工学関係者や地球物理の竹内先生等が宇宙の始まりから現在に至る長い歴史を調べた結果宇宙観が変わりつつあり、新しい宇宙観を持たなければ今後の地球は有り得ないという事です。そしてその根本は情報にあるという事です。何故情報であるかという事の詳しい話はまた述べる機会があるでしょうが、太陽が出来たのも情報を核にしてエントロピーを小さくする形であり、それから2億年遅れてやはり情報を中心に地球が出来たという説であり、宇宙観も変わりつつあります。またバイオテクノロジーにおいても遺伝子の中に地球発生以来の情報が隠されているのではないかと言われ始めました。総てのものの中には情報が入っているという事です。そこで情報がいろんな形になって現われた時、これをどう処理するかが社会にとっても人生にとっても大事であるという事で、情報を処理することが一つの情報産業として出てきています。従って2000年以後新しい情報技術が一つの大きな技術革命になり、それに合わせてエレクトロニクスの革命が力となっていくのが第二の産業革命であろうと思います。1800年代は石炭をエネルギーとして火力発電機が生まれ、機械と電気の融合が図られ、その典型がモータであり、1900年代に入ると1907年の電子管の発明を機に機械、電気、エレクトロニクスの融合が始まりました。それが1948年の半導体の発明と1950年前後のコン

ピュータの出現により、エレクトロニクスの占める比重が段々大きくなり、今やエレクトロニクスの中心は半導体とコンピュータと言われて、処理の対象も情報が中心となりつつあります。これが2000年頃には大変な量の情報が現われて来るだろうという事です。新しい説で、数学者が情報について計算を行なって結果出てきたものですが、簡単な話として人口に比例して情報が増えるという仮説に則れば、地球上の人口の増加が問題になるのと同様に情報についてもその問題が生じて来るという事です。地球上の人口は2040年にそのピークに達し大変な数になるから人口の拡散を図るためにラグランジポイントを3つ見付け、第2、第3、第4の地球を作ろうというのがスペースシャトル計画の中にありますが、一方情報をうまく処理して人間が豊かな生活を保持してゆく為にどうしたら良いかという問題があり、これを解決するために情報工学とバイオテクノロジーの結び付きが既に始まっています。

そこでバイオテクノロジーに話は移りますが、その一つがバイオチップであります。現在のシリコンチップは皆様のお手元に届いているもので5畳角の中に10万～100万の半導体が組み込まれています。将来電子ビームやX線の技術を用い、更に密度を上げていきますが、シリコンチップで100億ビットと言われる大脳と同じレベルにまで密度を上げられる見通しはありません。大脳に対抗するには分子の核を持ってくる必要があるというのが現在の結論であります。そこでバイオテクノロジーと結び付いて、2000年以後情報処理の基礎デバイスはシリコンチップからバイオチップに移行するものと思われます。バイオチップに関して研究のノロンを上げたのはアメリカです。先般、バイオチップの研究者がアメリカで発表した後、天理の私を訪れディスカッションを交わしましたが、日本としても早く手懸ける必要があると感じました。その内容は、1ミクロンの細胞の中に計算上では3兆ビットのメモリーが入るというものです、果たして出来るのかどうか大変な技術だと思います。要は遺伝子の操作にあるようですが、現在先端技術としてバイオチップが取り上げられていますが、彼等が実現出来ると自信を持ったのは、LB膜が使えると分かったからだそうです。LB膜（ラングミア・ブラジェット膜）は1940年に発表され、当時はまったく無視されましたが、バイオチップにおいて人間の細胞膜に相当する働きでバイオチップの生命を保持できるものです。

またドイツにおいてもハンブルグ大学のケスター教授を中心に非常に興味ある研究がなされています。私の見るところ、現在のコンピュータに比べればまだまだ劣ったものですが、優れた思い付きであります。それは趣味として用いていたパソコンが4bitあるいは8bit単位で成り立っていることと、細胞におけるDNAの中でC・T・A・Gというアミノ酸が4ヶ単位でうまく組み合わさってメモリーになっていることに気付き、このC・T・A・Gを利用出来ないかと研究に着手したとの事です。ここで一番足りないのは遺伝子に関する測定器だそうで、電子顕微鏡を覗きながらでは大変なので、何か良い測定器が出来ないかという事です。彼等は細胞膜

を隔てた濃度の違いで電位が多少生じることを利用して測定しているとの事で、これは神経パルスがナトリウムとカリウムの濃度差で生じるのと同じ原理です。何にしてもエレクトロニクスとバイオテクノロジーが結び付くためには、こういったセンサーに関する技術が非常に重要なことになるでしょう。ここでもう一つの情報工学とバイオテクノロジーの結び付きが行なわれようとしているのが第5世代コンピュータであります。現在のコンピュータはノイマン型と言われるデータベースのもので、1952年にノイマンが発表し、最初は数値計算だからスタートしノイマン・セオリーにより数字と文字の組み合わされたデータが扱えるようになったものです。今後は数字・文字に加えて声・手書き文字・図形といったパターンを扱う必要があります。この数字・文字・パターンの組み合わせが人間の知能・知識を形成するものであるところから人工知能と呼ばれ、データベースに対して知識ベースのソフトを作つてゆこうというのが第5世代コンピュータの研究であります。私は日本の第5世代コンピュータの委員会に入っておりますが、1990年頃までに完成し2000年までに実用ソフトを作つて21世紀に臨もうというものです。このような第5世代の高度なソフトを実現するには大量のメモリーを必要とし、大脳が立方的な構成であることから現在平面であるシリコンチップを立方的に集積した3次元LSIを作り大脳に対抗しようとするが、シリコンチップのあり方であり、第5世代の基盤技術の一つとなっています。日本はバイオチップへの着手は遅れていますが、その他の手段もあるはずです。要は情報の技術を極限まで押し進めるとともに、カントムジャンプをして新しい技術に飛び込むためには、バイオテクノロジーと手を結ぶか他の材料技術と手を結ぶ必要があります。その材料の一つは光だとも言われていますが模索中です。しかし模索をしながらも非常な勢いで進んでいます。

アメリカはバイオチップを筑波の科学博に出展する予定だとのことですが、私の感じではまだまだソフトが足りません。例えば細胞をどのように配置するかという問題でも、シリコンチップのようにリソグラフィーの技術では不可能で、CADのソフトをうまく利用する必要があるといった具合です。まだソフトサイエンスと結び付いておりません。

私は日本がこれに取り組むなら、CADとバイオテクノロジーをうまく結び付けることにより、アメリカに追い付けると感じています。これを考え始めた頃に支部長を交代することになりましたが、今後は少しでもこの方面に専念してみたいと思っている次第です。

最後になりますが、私も20年間シャープで技術関係を見てまいりましたが、今後の経営者は技術開発に一步でも遅れると負けであり経営に響くということで、技術者を大切にし技術者を養成し技術開発に力を注いで会社を引っ張って行かねばならないというのが私の信念です。先程の近藤先生のお話によりますと、これからも技術者をなかなか増やして戴ける状況に無いとのことであり、技術者を養成するのは大変なことだと思います。しかし、一方経営者は経営

も考える必要があり、技術開発にだけお金を注ぎ込む事は出来ません。技術開発と経営のバランスをどうしてゆくかという事です。結論を申しますと、これから要請されることはゼネラリストが経営者になるという事では無く、ネオゼネラリストの出現なのです。すなわちスペシャリストであって、新しく横に広めた技術を、ポイントポイントの雑学という形では無く、集積して身につけるという事です。あらゆる業界の進み方を集積して獲得した会社が勝ち残って行くでしょう。今、日本では大変悪いことに複合すれば新商品が生まれるということで、複合技術が次の時代だと言われています。複合はただ人の知恵を借りてくっつけるだけあります。それは誰にでも出来ることである上、不連続であり、インタフェイスが出来ていません。これでは次の時代はやってゆけません。複合されたものの究極にある集積された技術でなければ経営は危いという事を、経営者の一人として日ごろ感じております。

また今後色々と皆様にお教えを頂くことが多いと思いますがよろしくお願ひ致します。

〔注〕本文は、昭和58年6月11日関電会館において講演されたものである。

5. 通信網の変革と自然科学

電々公社横須賀電気通信所
伊吹特別研究室長 伊吹公夫

通信の変革や計算機の発達が、文明社会に及ぼす影響について、最近、関心が高まっております。メガトレンドのような未来ものの異常な売れ行きは、この好例でしょう。

農業、工業、高度情報化へと進展する世界史のなかで、文明の中心は絶えず動いております。かつて農業文明で繁栄した国が工業化に乗遅れて辿った運命は、他山の石として、米国の有識者間で取沙汰されておりました。それが一般化し、我国にも広まった結果です。近隣諸国との相互関係において、日本の立場が指摘されております。

さて、高度情報化社会 (Information Network Society) への経路は、必ずしも一通りではありません。その国の風土にあった進み方をしております。

たとえば、米国の場合には、医薬分業の例にみられるように、知識情報の価値というものを古くから尊重する慣習があります。このような風土では、ソフト産業がネット化無しで栄えます。情報化社会は知識情報の価値を評価し、代償を支払う社会だと言われております。米国は既に、高度情報化社会の前身としての情報化社会 (Information Society) へ全面的に入っており、ネットワーク化への模索をしている段階です。

・ 我国はどうでしょうか。医薬分業のような慣習はありませんでした。医療知識情報は、医薬保険という間接的な形態で流通し、今日の長寿命社会を築いております。医療保険はある種のネットワーク化です。協調社会の産物です。この事情は他の分野にもみられます。

我国のソフトウェア産業は役務提供が主体で大企業化せず優秀な人材が集まらぬという悩みを聞かされます。ネットワーク化の前にまず情報化というアプローチが成功したとは言い難い状況です。

しかし、すべての業種が高度情報化で劣っているとは言えません。たとえば、キャッシング・サービスを始めとする金融業です。どの銀行の預金でも50円の手数料で引出せるというネットワーク化が完備しております。金融業は、一足躍びに高度情報化まで進んでいます。全国的なネットワーク化には高度なソフトウェアが必要ですが、その費用は間接的な形で消費者から支払われております。50円の手数料はその一部です。つまり、ネットワーク化は、情報産業製品の流通機構の役目も果しているのです。

欧米でも、他行間相互の全国ネットを組みたいという議論は盛んです。ローカル・エリア・ネットワーク（LAN）の域を出るのには、競争関係にある企業間を誰がネットに編めるかの問題があり、論議の空転が多いのですが、種々、努力がはらわれています。

このように見て参りますと、高度情報化社会へ到達するのに、欧米は、先ず、各業種が情報化され、次にネットワーク化へと向っております。一方、我国では、ネットワークされ易い業種が高度情報化まで進み、逐次、他の業種へと関連づけて広がっていくという路線を歩んでいることが判ります。

このことは明年、三鷹地区で実施が予定されているINS実験への参加申込みが、情報産業となじみの薄かったあらゆる業種からも殺到し、謂ゆるINSフィーバを呈していることからも判ります。

つまり、近隣諸国の追上げから、脱工業化を模索する努力の顯れでしょう。工業が近隣諸国に移行していく趨勢の中で、それぞれの企業が、自身の産業に関連して育てた社内の情報関連部門を、いかにネットワーク化し、広く利用販売していくか。次世代への産業転換を計り、どうして生残るかが真剣に検討されております。通信網は、単なる情報伝達手段としてではなく、情報価値の流通機構、つまり、高度情報化時代の産業基盤としての役割が期待されているのです。

さて、このような背景を踏まえて、通信網は、どのように変革しているのでしょうか。通信網を大別すると線と節から成立っています。

線については、視覚情報等、大量な情報が安価に送れるよう、光通信が育ってきております。また、国際間の通信距離を克服できるよう衛星通信も手に乗り、このような技術を背景として、

通信量や距離のため、禁止的と考えられてきた通信の利用形態が、桁違いに経済化され、一般普及する日も、そう遠くないでしょう。光通信はデジタルになじみます。狼煙があるか、ないかに対応するのです。INSがデジタルと呼ばれるのも、このような理由です。

節の技術は半導体によって進歩致しました。それは電子化です。電子化も部品技術とともに進歩しております。つまり、空間分割交換、時分割交換、蓄積交換と順を追って、高度化への道を辿っております。時分割と蓄積とが全デジタルです。これらは伝送路のデジタル化と親和性があります。蓄積交換は、そればかりでなく、機能の高度化が飛躍的に向上します。デジタル・コンピュータ技術をフルに活用できるからです。

技術的難易度は、交換機形式だけではなく、扱う対象の情報量とも関係し、データ、音声、画像の順に高速部品を要します。したがって、現状では、動画まで扱えるのは空間分割で、時分割は音声まで、蓄積はファクスを含むデータまでです。臨場感のあるテレビ会議には画像処理が必要です。この種の動画像の蓄積交換が普及するのは21世紀でしょうが、これには、部品技術、方式技術両面に亘って、自然科学にまで遡った研究が必要です。

さて、産業文明の変革は新しい自然科学を生み、新しい自然科学が産業文明の変革推進に寄与して参りました。それでは、高度情報化社会の自然科学は、どのような形態になっていくのでしょうか。

先ず、工業社会や情報化社会で必要だったもの以上に、何が要るのか考えてみましょう。情報化社会では、複雑な機能をソフトウェアで実現するため、ソフトウェア工学が発達しました。これは特定の仕様から出発して機能を実現する計算機単品のソフトウェアを製作する個別生産には適しておりますが、ネットワーク化して類似機能を全国的あるいは世界的規模で製造供給する量産には適しておりません。量産には機能実現の部品化や一般産業として、それぞれの業種の専門家が広く分業生産できる形態が必要なのです。また、超LSIの進歩で、布線論理設計の計算機を利用した設計も含め、総合した形態が必要になります。そこで、仕様から出発し、トップダウン的に設計するソフトウェア工学ではなく、論理素子から出発し、布線論理と蓄積論理双方の機能部品を階層的に組上げていく論理機能合成学が必要になります。

また、多くの企業がネットワーク化して、あるサービスを消費者に提供する場合は、適正な課金や提供企業間での報酬配分が重要です。これには、情報価値の計量化が前提です。計量情報学とでも呼ぶべきものが必要です。

この二つの学問分野を、それぞれ工業化時代の学問と対応づけてみましょう。工業社会での学問対象は、物質・エネルギーでした。この合成学として化学があり、計量学としての物理があります。情報化や高度情報化社会での学問対象は情報です。合成学が論理機能合成学であり、計量学が計量情報学です。化学や物理等、長期にわたる人類の叡智の蓄積は、これら新学

問へのアプローチの仕方にも大いに参考になります。この詳細は、情報処理学会講演と重複しますので、省略させて頂きます。

さて、このような基礎学に対して、応用学はどうでしょうか。工業化時代の工学は電気、機械、化学等に分科して発展しました。高度情報化時代の応用論理機能合成学も、専門業種毎に分科して発展するのでしょうか。具体例で説明しましょう。

ネットワーク化し、分業して提供する巨大システムは信頼性が重要です。ソフトウェアを伴うと、システムは脆弱になります。そこで、これを避けるため、論理機能合成学で説く階層化手法を適用して分業化をはかります。つまり、分業した企業がそれぞれ提供するサブシステム間相互のインターフェースはその企業の専門家が理解し易い言語で記述します。言語という固いインターフェースで結合することにより脆弱化が防げます。また、それぞれの専門家が容易に情報産業に転換できる手段を提供することになります。

公衆データ通信を利用した経済記事情報サービスを電子交換機を介して提供するこの例があります。これは新聞業と通信業が共同で一つのサービスを開発したもので、高度情報化時代の新聞業を先取りした例と言えましょう。通信業からみると、電子交換機では、布線による局建設が局データの作成へ、ジャンパ線による保守がタイプライタのコマンド言語操作へと産業構造の転換がはかられております。これは職員の訓練を通してなされました。

産業構造の転換には訓練や教育が大切です。産業構造の転換が全産業に及ぼうという今日、学校教育もそれに対応することが必要でしょう。また、学問の形態も普通教育に適合せねばなりません。このため、論理機能合成学は、化学の手法を参考にしております。

近隣諸国工業化の急迫に対して、高学歴社会の我国は、これと競争するよりも、国際分業による協調が必要です。プラント・ロボットのソフト、超LSIの論理設計、あるいは医薬の国際分業、等々、高度情報化の面で協調できるはずです。衛星通信の発達で、在宅勤務ならぬ在国勤務が可能です。

電気出身者は適応性に富み、何でもこなします。来るべき高度情報化社会への産業転換にも生残れるに相違ありません。洛友会の皆様が健在なる限り、高度情報化時代の中心に位置されることでしょう。

〔注〕 本文は、昭和58年6月25日目黒八芳園において講演されたものである。

III 洛友会 30 年の歩み

1. 洛友会の 30 年の足跡

1. 洛友会の発足

昭和 27 年 11 月 23 日京都大学楽友会館において洛友会創立総会が開かれ、ここに洛友会が発足した。当時の役員はつぎの通りである。

会長	鳥養利三郎	幹事	山村 忠行
副会長	石川芳次郎	〃	工藤 寿夫
〃	佐藤 穏徳	〃	美岐 忠雄
〃	加藤 信義	〃	大谷 泰之
		〃	近藤 文治

洛友会結成の趣旨として、洛友会会報創刊号（昭和 28 年 8 月 1 日号）に掲載されている会長鳥養先生の挨拶を再録しよう。

私の長い世渡りから見て、人と人とのつながり程大切な、そして有難いものはない。まして、同学同門の交りは、それが偶然の運命的なものであるにしろ、吾々を、どれだけ力づけるか、今更言を要しないと思います。

外国の大学では、同窓会が母校に対し、ひいては社会に対して、非常に大きな力添えをしている様であるが、日本の大学では、今まで同窓会は殆ど顧みられなかったようである。今回皆様の周到な企画と熱情によって洛友会が結成せられるに至ったことは欣快に堪えないところであります。その将来の活躍と成果は大いに注目されるものがあります。

同窓会は卒業生間の、横と縦との連絡を主なる目的とするものと思いますが、横の連繫は同級生会が主として担当出来ますから、同窓会は、主力を縦の連絡協調に置くべきであろうと、考えます。明治の老卒業生から、昭和 20 年代の青年卒業生まで、すべてを打って一丸とし、これ等すべての同窓生を、親愛のルツボに熔かし込むことに努めなければなりません。この意味において、私は同窓会での食事には席を設けず、カクテル・パーティー式、園遊会式にして、自由に誰とでも談笑出来るようにして頂き度いと思います。

国立大学では、同窓会の結成は、まだ例が少いようありますから、この洛友会は一つのテスト・ケースとも見られると思います。切に皆様の御尽力を御願い致します。

以上が鳥養会長挨拶の全文である。

つぎに洛友会発足の経緯について述べる。

母校電気工学教室の創立は、明治31年9月とされている。京都帝国大学理工科大学(現在の工学部の前身)が、機械工学科、土木工学科の2学科で発足したのが、明治30年6月で、その翌年電気工学科が授業を開始した。その後、教室は順調な発展を遂げ、明治42年には懇話会という組織が電気工学科に誕生した。京都大学史(昭和18年12月発行)によれば、「電気工学科懇話会は、本教室職員学生全員を会員とする外郭団体であって、当初正科の講義以外に研究事項を発表することを主眼としたが、後に学生の実習報告を行わしめ、同時に懇親を促進することもその目的とするに到った。現在学術又は一般講演会、庭球大会、遠足会、運動会等を開催して効果をあげている。」と記載されている。

懇話会設立後、卒業生も会費を出してこれに参加するようになり、懇話会名簿も発行されるようになった。これが卒業生の同窓会の始めである。この懇話会を明治・大正・昭和の三代に亘って世話をされたのは関野弥三先生であった。

懇話会の活動は大正から昭和へと続き、太平洋戦争のさ中にも絶えることはなかった。しかし戦争末期に至り、学生の一部が日本電気株式会社石山工場(現関西日本電気株式会社)に動員されるに及んで、活動を中断せざるをえなくなった。その後終戦さらに戦後の混乱期を迎え、心ならずも懇話会の活動は休止されたまゝになっていた。しかし戦後の混乱が漸く収まるきしが見え始めた昭和23年10月、活動再開の手始めに懇話会名簿が復刊された。その費用は、電気工学科創立50周年記念後援会^{*}の募金および関係会社の広告掲載料で購われた。名簿に広告を掲載することはこの時始まったのである。しかし、名簿の発行を大学の教官が片手間に行なうことは大変な仕事であり、かつ資金の調達も容易でないため、戦前のように毎年発行するという訳にも行かず、昭和25年にその後の異動分だけを小冊子にして刊行された。しかし懇話会名簿の復刊により、不完全ながらも、同窓生の住所が判り、各地でクラス会が開催されるようになった。中でも東京には“洛友会”という名の東京在住卒業生全体を包含する同窓会組織が大正6～8年の卒業生が中心となって結成され、関西では大正14年卒業生を中心とする14日会というクラス会を始めとし、母校の教官を中心に多くのクラス会が旺んに活動するようになった。ところが昭和27年頃には、懇話会名簿再版の発行が必要となつたが、それを母校の教官の手で実施することはあまりにも問題が多いので、この際卒業生の同窓会を作り、会費を集めることによって刊行の費用を作り、卒業生の手で名簿の発行を行なつてはとの声が上り、会長に鳥養先生を戴き、名称を洛友会とした同窓会組織を発足させることになった。また事務処理は、鳥養先生が理事長をされていた応用科学研究所で引受け、教室の教官の援助の下に、常務理事の山村忠行氏が当られることになった。かくして、冒頭に記した洛友会の発足と

*

電気工学科の創立50周年は昭和23年である。

なったのである。

なおこれに伴ない、従来の懇話会は、名簿の発行を洛友会に依存し、会員を在学生および教職員とする組織に再編成し、洛友会と密接な関係を保ちつつ、従来通りの活動を続けることとなった。その後懇話会は大学紛争およびそれに続く臨時職員闘争のため一時活動が低下することはあったが、最近ではその活動は再び活発になりつつある。

2. 洛友会の発展

洛友会は、その事業として、総会の開催、会報の配布、名簿の発行、各支部活動の援助、懇話会の援助などを行っている。

洛友会のこのような事業を支援し、より活動を旺んにするため、全国に9つの支部が相次いで結成された。すなわち、洛友会創立直後の昭和27年12月の中部支部の創立を皮切りに、翌年には東京、関西、九州、中国各支部が発足し、昭和29年には、北陸と北海道に支部が結成された。その後昭和31年には四国支部が設立され、さらに昭和41年の東北支部の結成によって9支部が完成した。

一方洛友会発足の2年後、昭和29年4月わが国では初めての電子工学科が京都大学工学部に設立された。新学科は電気工学科と合体して運営され、昭和33年初の卒業生を世に送り出したが、これを洛友会員に包含した。さらにわが国の経済高度成長にあわせて、昭和36年設立された電気工学第2学科の卒業生も洛友会員として、洛友会は大きな発展を遂げ今日に至っている。

* 一方大正3年、電気工学科の教授青柳栄司先生は大正天皇御即位記念事業の一つとして、学内に“私立電気工学講習所”を創設された。これは電気技術者の養成を目的とする夜間の教育機関で、教育には電気工学科の教授を始め各教官が奉仕的に当り、大学の講義と同じ講義を行った。講習所は学校法人に基づく正規の学校ではなく、いわば“塾”的なものであったが、教育内容から見て、卒業生は高等工業専門学校卒業生あるいは場合によっては大学卒業生と同等の資格で社会に受け入れられ、業界の発展に大きな貢献をした。講習所は昭和15年度の卒業生を最後にして、保有していた建物を大学に寄付するとともに、設備等は立命館大学衣笠校舎に移し、立命館日満高等工科学校となり、正規の学校として新発足した。今日の立命館大学理工学部の前身である。講習所卒業生は早くから独自の卒業生名簿を発行していたが、立命館大学理工学部の同窓会相訪会の発足と共に相訪会に吸収され、以後講習所卒業生名簿が独自に発行されることになった。しかし講習所卒業生は京都大学における教育の思い出よりも、洛

*

その他に電気評論の発刊、青柳研究所（現在の応用科学研究所の前身）の設立がある。

友会に所属したいとの強い希望があった。これを受け、洛友会は昭和33年講習所卒業生を正会員として受け入れることにした。洛友会会員名簿に電気工学講習所卒業生名簿があるのは以上のような経緯による。^{*}講習所は大正4年から昭和15年に至る長い歴史の中で、1,280名の卒業生を世に送り出したが、昭和58年現在、物故者586名、居所不明者281名を除いた413名が活躍している。なお講習所卒業生の全国的クラス会組織として、デルタ会が昭和31年6月結成され、旺んな活動を行なっている。

最後に、歴代の洛友会会長、支部長等を記すと下記の通りである。

洛友会（昭27.11.23創立）会長

昭27～50 烏養利三郎、昭51～現在 松田長三郎

中國支部（昭27.12.13創立）支部長

昭27～38 清水 勤二、昭39～現在 本多 静雄

東京支部（昭28.2.12創立）支部長

昭28,29	佐藤 穏徳、昭30,31	巽 良知、昭32,33	菅 琴二
昭34,35	富永 和郎、昭36,37	橋本 真吉、昭38,39	石川 辰雄
昭40,41	山本 三郎、昭42,43	久野 清、昭44	青木 三郎
昭45	西本 憲三、昭46	吉岡 俊男、昭47	和氣幸太郎
昭48	市村 宗明、昭49	高木 正、昭50	中山 健一
昭51	正木 知己、昭52	富岡 正春、昭53	筑木 二郎
昭54	相木 一男、昭55	永安 弘、昭56	尾繩 真男
昭57	古川満智雄、昭58	小田 敏彦	

関西支部（昭28.4.15創立）支部長

昭28,29	石川芳次郎、昭30,31	石沢 四郎、昭32～35	今田 英作
昭36～40	芦原 義重、昭41～43	森 薫、昭44,45	加藤 博見
昭46,47	野田忠二郎、昭48,49	上西 亮二、昭50,51	伊藤 俊男
昭52,53	坂本 勇、昭54,55	大森 武同、昭56,57	佐々木 正
昭58～現在	浜口章二郎		

九州支部（昭28.10.26創立）支部長

昭28,29	福井 正治、昭30～37	高柳与四郎、昭38～54	宮田 秀介
昭55～現在	河本 勝寿		

中国支部（昭28.12.1創立）支部長

昭28～32 真田 安夫、昭33～37 鈴川 貫一、昭38～現在 真田 安夫

*

前述の昭和25年発行の懇話会名簿に講習所卒業生名簿が掲載されている。

北陸支部（昭29.5.6創立）支部長

昭29,30 高木 金生、昭31~38 長井 要臘、昭39~54 荒井 武治
昭55~現在 西岡 敬二

北海道支部（昭31.7.1創立）支部長

昭29,30 大塚 徳雄、昭31~41 小田部 豪、昭42~51 山上 孝
昭52~現在 池内 義則

四国支部（昭31.7.1創立）支部長

昭31,32 弘田亀之助、昭33~39 渡部 兼雄、昭40,41 北脇 保喜
昭42~50 宮地 冬樹、昭51~54 藤本 吾郎、昭55~現在 徳岡 豪

東北支部（昭41.8.11創立）支部長

昭41~52 平井寛一郎、昭53~56 二村 忠元、昭57~現在 三国文治郎

デルタ会（昭31.6.3創立）代表 立石 亨三

幹事長 昭31~58.2 上野 満、昭58.2~現在 神戸 俊夫

3. 会員数の変遷

洛友会発足時の会員の状況は、

総数 2,111名

内訳 居所判明者 1,255名、不明者 57名、物故者 799名

であった。この数字は、東京大学工学部の電気工学科のそれを可なり上廻るものである。これはわが国の工業技術の発展のためには、できるだけ多くの技術者を養成することが必要であるとの考えから、われわれの電気工学科では大正11年には早くも入学定員50名としたことによる。

洛友会創立以後現在に至るまでの会員数の変遷の模様を図1に示す。昭和58年10月現在では

・電気系学科卒業生 総数 5,426名
(大学院卒業生を含む)

居所判明者 4,238名 不明者 318名

物故者 870名

・電気工学講習所卒業生 総数 1,280名
居所判明者 413名 不明者 281名
物故者 586名

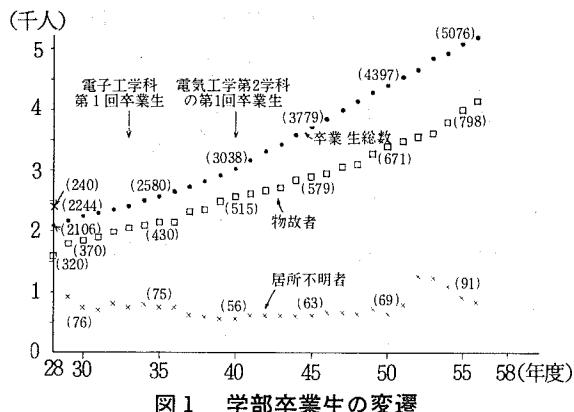


図1 学部卒業生の変遷

であって、洛友会発足時の 2.57 倍（講習所を含めると 3.17 倍）に達している。既に述べたように、電子工学科は昭和 29 年 4 月 20 名の定員で発足し、第 1 回卒業生を昭和 33 年に送り出している。その後入学定員は逐次増加され、昭和 35 年以後は 30 名になった。さらに昭和 36 年には電気工学第 2 学科が入学定員 50 名で発足した。かくして電気関係学科（これを総称して電気系学科と呼ぶ）は電気工学科、同第 2 学科および電子工学科の 3 学科構成、入学定員 120 名の大教室となり今日に至っている。

なお昭和 33 年洛友会に編入された電気工学講習所卒業生の数は、既に閉鎖された組織であるためこれ以上増加することはないことに注意されたい。

一方これらの会員の支部別分布について眺めると、昭和 58 年現在では、関西支部が 1,881 名で最も多く、東京支部が 1,717 名でこれに次ぎ、以下中部支部（333 名）、中国支部（153 名）、九州支部（138 名）、四国支部（101 名）、北陸支部（86 名）、東北支部（40 名）、北海道支部（16 名）の順となっている。

4. 諸事業の概要

4.1 会員名簿の発行

洛友会の最も重要な事業として会員名簿の発行がある。昭和 28 年 10 月 5 日、従来の懇話会名簿を引き継ぐ形で、初めての洛友会名簿が昭和 28 年 10 月に発行された。形式は縦書き、A5 版、216 頁であった。以後毎年 11 月下旬あるいは 12 月上旬に刊行されてきたが、事務量の増加を抑制するため、昭和 57 年版を刊行した後は隔年発行となった。一方名簿の形式は、昭和 37 年版から、従来の縦書きを横書きに改め、さらに昭和 47 年版から大きさが現在の B4 版に改められた。また、昭和 37 年版からは従来の卒業年度別名簿に加えて勤務先別名簿を追補するなど、内容の充実に努めてきた。

また昭和 58 年度には、洛友会創立 30 周年記念事業として、名簿のコンピュータ処理が完成し従来の名簿と多少活字の感じが違った名簿となった。

なお洛友会名簿は会費納入者に限定して発送している。そのため昭和 59 年版の印刷部数は 3,800 部である。因みに頁数は 382 頁で発足時の 1.76 倍になっている。

4.2 洛友会会報

洛友会ならびに各支部の活動状況の周知、会員相互の情報交換、意志疏通の手段として洛友会会報を発行している。その第 1 号は昭和 28 年 8 月 1 日に創刊され、以後 85 号（昭和 50 年 4 月 1 日発行）に至るまで隔月に発行されたが、その後 3 ヶ月に 1 回、年 4 回発行に改められ今日に至っている。昭和 59 年 1 月 1 日号は第 126 号に当る。本部に保管の洛友会会報を通

観すると、時代の移り変りがひしひしと感じられ、誠に感慨深いものがある。参考までに、常任幹事の独断と偏見で各号記載の記事1つだけを選んで並べたものを附録に掲げる。なお洛友会会報は洛友会会員全員に配布していて、第126号の印刷部数4,700部である。

4.3 会費の入金状況

洛友会の活動を支えるものは何と云っても会費収入である。発足時には本部会費300円、プラス支部費（中部200円、東京・関西100円）であった。その後の会費の変遷は図2の通りで、創立当時本部会費の納入率は、居所判明者の87%程度であって、この種の団体の会費納入率としては驚異的な値で、如何に関心が高かったかが偲ばれる。現在では55%程度の納入率に低下しているのは残念である。洛友会創立当時は、毎年の余剰金を積み立て、将来洛友会館でも建て、会員の会合や宿泊の便に供したいとの構想があった。しかし、インフレの進行による貨幣価値の下落、会費納入率の低下などにより、この構想は実現しなかったが、洛友会に500万円程度の基金をもつことができ、会の運営に大きな貢献をしている。

洛友会としては、何とか会費納入率を向上させ、会費を値上げすることなく、会の活動を旺んにしたいと考えている。

会員の皆様のご協力をお願いしたい。（文責 近藤 文治）

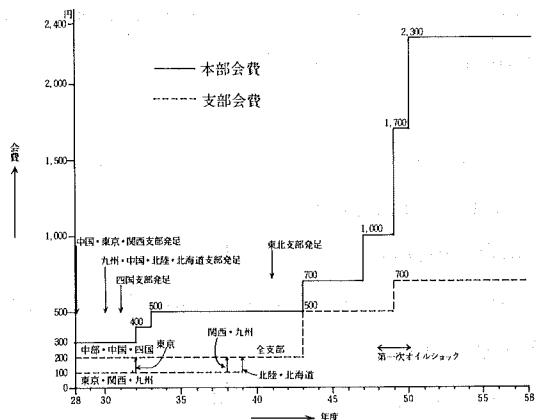


図2 会費の変遷

附録 洛友会報には各号極めて興味の深い記事が多数あります。貢献の関係で常任幹事の独断と偏見によって、各号から1つだけを選んだものです。歴史の流れがそこはかとなく感じられ、捨るにはもったない気がして敢えて掲載させていただきました。何卒お赦し下さい。

号	年・月・日	頁数	備考	号	年・月・日	頁数	備考
1	28・8・1	8	創刊号	10	30・2・1	4	麻雀、囲碁、ゴルフ大会
2	10・1	4	空から見た電気教室	11	4・1	4	教室だより
3	12・10	4	第1回総会記事	12	6・1	4	各支部総会記事
4	29・2・10	6	総会こぼれ記	13	8・1	4	阿部教授退官記事
5	4・5	6	懇話会記事	14	10・1	4	洛友会の存亡
6	6・1	6	各支部総会記事	15	12・1	4	総会記事
7	8・1	4	品位を持ちたい	16	31・2・1	4	関野弥三先生を訪う
8	10・1	4	エチケットから連想して	17	4・1	4	第60回十四日会記事
9	12・15	6	エチケット問題を起したクラ会の為に	18	6・1	4	懇話会体育大会記事

号	年・月・日	頁数	備考	号	年・月・日	頁数	備考
19	31・8・1	6	本部及各支部総会記事	56		4	教室だより
20	10・1	4	洛北三千院の庭	57	43・7・10	6	京都生活の雑感（上之園親佐）
21	12・1	4	信友会例会記事	58	10・1	6	青柳先生の二十五回忌
22	32・2・1	4	松田教授退官記事	59	44・2・20	6	十四日会四国地をゆく
23	4・1	4	教室だより	60	4・10	10	石川芳次郎氏追悼記事
24	6・10	4	総会記事	61	9・20	8	洛友会及各支部総会記事
25	8・1	4	応研40周年記事	62	45・1・31	8	最近の大学紛争（潮見公安）
26	10・1	4	教室だより	63			
27	12・1	4	加藤教授退官記事	64	8・1	8	石口 博記念号
28	33・2・1	4	北京だより（彭錫謙）	65	12・15	6	情報工学科創設記事
29	4・1	4	阿部、松田、加藤三先生謝恩会	66	46・2・20	6	過去55年の生活を顧みて（七里義雄）
30	6・1	4	第7回洛友会総会記録	67	4・1	4	熊谷三郎氏追悼記事
31	8・1	4	関西支部家族遠足会	68	6・1	6	隨筆（平井寛一郎）
32	10・1	4	ボストンこぼれ話	69	8・1	8	こま犬神社（本多静雄）
33	12・25	42	京大電気教室創立60周年記念誌	70	10・1	8	電力系統の信頼度制御（伊藤俊一）
34	34・8・1	4	加藤副会長を悼む	71	12・1	8	多田耕藏氏、乙葉真一氏追悼記事
35	12・1	6	海外旅行の印象（田中哲郎）	72	47・2・1	8	老の縁言（宮崎新吉）
36	35・4・1	4	欧米雑感（阿部 清）	73	4・1	6	先生からの年賀状（鳥養利三郎）
37	7・1	4	チューリッヒにて（高津 幸）	74	6・1	4	前田憲一氏日本学士院受賞記事
38	12・1	4	隨感（鳥養利三郎）	75	8・1	6	南極越冬を終えて（伊藤正則）
39	36・2・15	4	電気工学第二学科新設について	76	10・1	6	思い出（堀岡正家）
40	4・15	4	文字読取器	77	12・1	4	私のゴルフ談義（喜田村善一）
41	7・15	4	ソリオンの将来（阿部 清）	78	48・2・1	6	大学の使命（鳥養利三郎）
42	37・4・15	4	隨感（鳥養利三郎）	79	4・1	8	大学よ甦れ（平野 進）
43	7・1	4	隨感（鳥養利三郎）	80	6・1	6	台湾、沖縄の旅（松田長三郎）
44	38・3・15	4	欧米視察談（松田長三郎）	81	8・1	6	祇園祭とお稚児さん（中沼保三）
45	6・20	4	若返りの術（伊藤忠雄）	82	10・1	6	教育雑感（篠原一恭）
46	9・1	4	在米雑感（近藤文治）	83	12・1	8	年寄の冷水（栗本順三）
47	39・1・20	4	隨感（鳥養利三郎）	84	49・2・1	8	昭二会お伊勢参りの記（大島文平）
48	4・1	4	成人病の追放（伊藤忠雄）	85	4・1	6	私の健康法（藤本悟郎）
49	7・1	4	第13回洛友会総会の記	86	6・1	12	住所変更正誤表（9頁）
50	40・2・1	4	甲子会40周年大会記録	87	8・1	8	鳥養先生と人絹工業（和田正弘）
51	6・15	4	第14回洛友会総会の記	88	10・1	10	阪口忠雄氏追悼記事
52	41・3・31	8	山村忠行氏追悼記事	89	12・1	10	鳥養先生、勲一等旭日楓花大綬章
53	10・20	4	回顧談（野田清一郎）	90	50・2・1	10	岡本赳氏、山本三郎氏追悼記事
54		18	林 重憲教授退官記事	91	4・1	8	植物栽培のオートメーション（有馬敏彦）
55		6	鳥養先生文化功勞者顕彰記事	92	7・1	10	六十年の友（小宮義和）

号	年・月・日	頁数	備考	号	年・月・日	頁数	備考
93	50・10・1	10	初秋つれづれ（松田長三郎）	110	55・1・20	12	甲子会の集い（芦原、菊池、本多）
94	51・1・1	14	十四日会50周年記念大会	111	4・20	10	宮田秀介氏追悼号
95	4・1	10	研究室紹介	112	7・20	12	藤田真一氏追悼号
96	7・1	12	ヨーロッパ親善団体の旅（斎藤敏雄）	113	10・15	10	シンガポール洛友会（近藤文治）
97	10・1	10	水泳雑考（吉田洪二）	114	56・1・1	16	松田先生米寿祝賀記事
98				115	4・1	10	山本茂雄氏追悼号
99	52・4・1	14	鳥養利三郎先生追悼号	116	7・20	10	ソ連領シルクロードの旅（鈴木 茂）
100	7・1	8	鳥養先生をしのぶ会	117	10・20	10	ハノーバ等雑感（古川満智雄）
101	10・10	10	林 重憲先生追悼号	118	57・1・1	10	講習所と私（的場広治）
102	53・1・10	10	姑蘇域外塞山号（石川辰雄）	119	4・1	10	宇宙開発雑感（木村小一）
103	4・1	6	平一寛一郎氏追悼記	120	7・1	10	赤道真下で思うこと（川口龍夫）
104	7・1	6	研究室紹介	121	10・1	10	電気系教室の新館完成（近藤文治）
105	10・1	8	大久保達郎先生追悼号	122	58・1・1	10	L S I 時代への対応（田丸啓吉）
106	54・1・10	12	芦原義重氏、黙一等旭日大綬章受賞	123	4・1	10	感謝（橋本真吉）
107	4・10	12	青柳先生のお手紙添えて（橋本真吉）	124	7・25	10	会員名簿の電算機化（近藤文治）
108	7・20	12	阿部 清先生追悼号	125	10・25	10	吉田洪二氏追悼号
109	10・20	8	あゝ、ペトベン記念館（坂入武彦）				

2. 関西支部の30年

1. 関西支部の発足

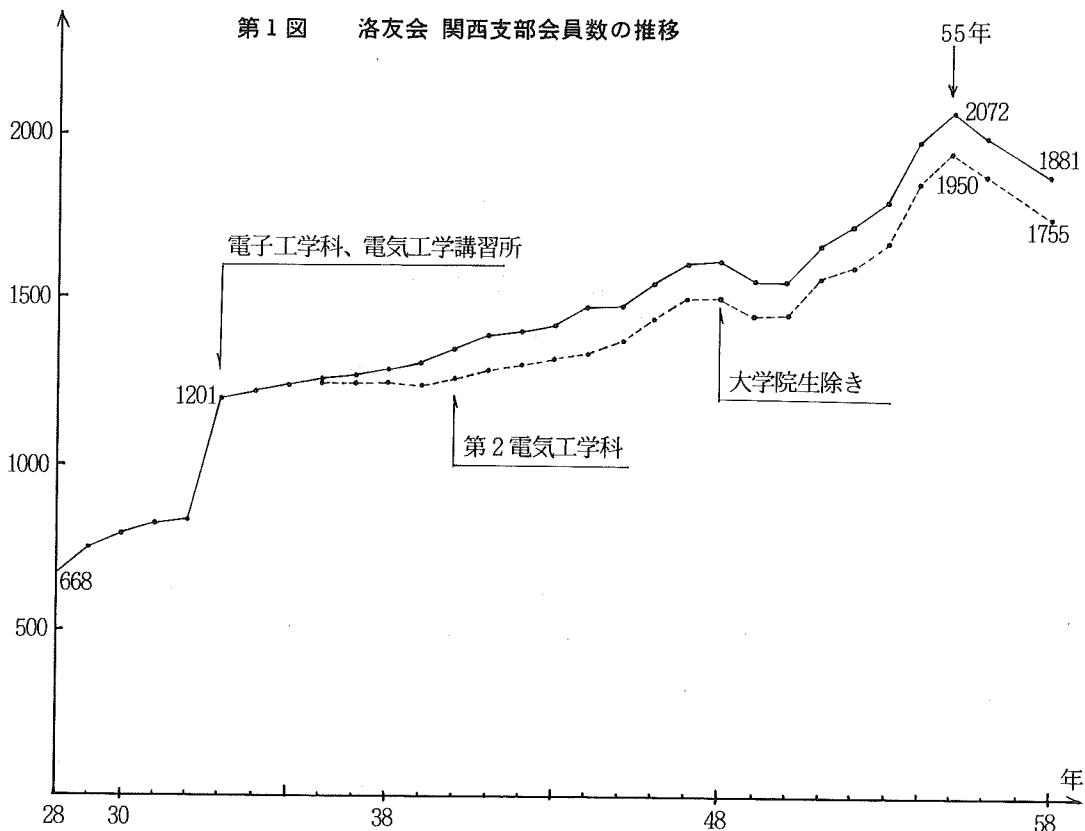
昭和27年11月23日京都大学工学部電気工学卒業生の全国的な組織として洛友会が発足した。この年度末の28年は最後の旧制大学生が出ると共に最初の新制大学課程を履習した者が卒業した年であり、以降新制に全面的に切換る節目であった。この学制が切換るに際し旧制卒者としては帝国大学の衿持を保つべき集団として、又新制大学が伝統を継承すべき事を祈念して発足への動きが洛友会結成に至ったものと考えられる。

さて関西支部は東京・中部支部に引続く3番目の支部として発足した。発会式は28年4月14日午後5時半より大阪市堂島の中央電気クラブで百名を越える出席者の下に開かれた。支部長は本部の創立準備委員長として洛友会創立に努力された石川芳次郎氏（本部副会長）が満場一致で選出され、副支部長には一本松珠機、工藤寿男両氏が支部長より委嘱された。石川支部長は「ヒューマンリレーションでの円滑化により国家社会・世界人類のためのサービス向上に役立つべし」と説いておられた。この様に大方の意志の盛り上りによって成立した関西支部は当時の関西実業界の若手幹部たる大正末～昭和1桁台卒業の会員の主導によって活動が進め

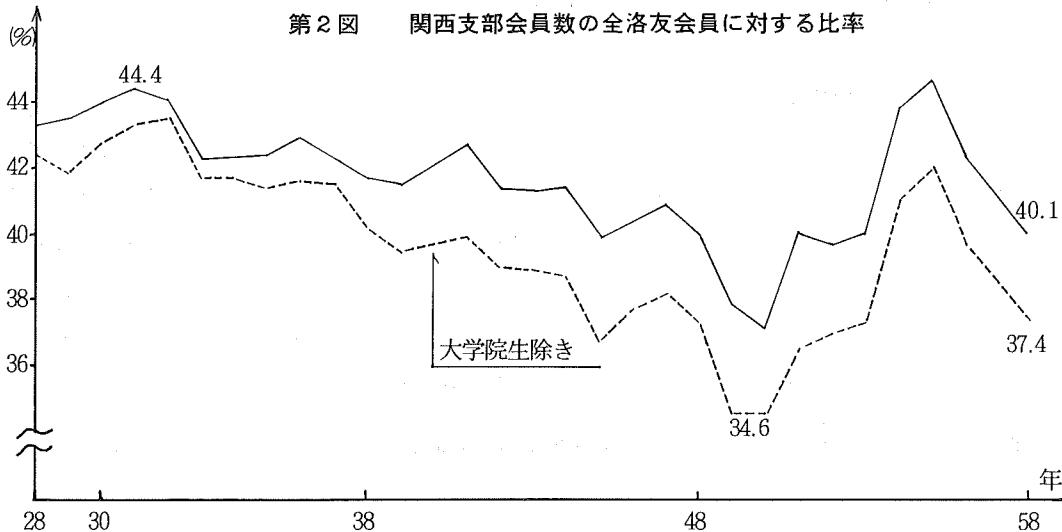
られる事となった。昭和 29 年には麻雀・囲碁大会、ゴルフ大会が始まり翌 30 年には家族見学会が始まりこれら行事が現在まで支部活動の中心行事となるに至っている。

2. 支部会員の推移

(1) 会員数 発足当初 28 年 9 月には支部会員は 668 名であったが、その後電気工学講習所卒業生の併入（昭 33 年）、電子工学科（第 1 回卒業生 33 年）第二電気工学科（第 1 回卒 40 年）の設立に伴い、又社会全体の長寿命化に伴い年々増加の一途をたどり昭和 55 年には遂に 2072 名と 2 千の大台にのった。しかし本部総員は 56 年も増大しているにもかかわらず 56 年は 1998 名と 2 千を割り、58 年は洛友会員総数が初めて減少を見た影響も受け支部会員数は 1881 名となり最大であった 55 年に比べて 200 名近く減少している。



会員総数に対する比率は第 2 図の通りであり、10 年毎の平均で見ると 28 ~ 37 年では支部比率 43 %、次の 10 年では 41.2 % と落ち 48 年以降では 40.5 % と傾向としては下っている。関西支部には学部を卒業して修士課程に在籍する者も含まれており、彼等は各支部の予備軍でもあるのでこれを除いても同様の傾向である。



(2) 会員の分布 関西支部会員の分布状況の推移を示すと第一表の通りである。大学関係(大学院生を除く)は20年間で2倍に増えているものの最近は頭打ちで比率は減少してきた。電

第1表 関西支部員の勤務先分布

		大 学	電 力	交通運輸	弱 電 メー カー	弱電メー カー、電線	鐵鋼 機械造船	放 送 通 信	支部会員 (大学院生除)
28年	人数	85	77	81	60	66	65	14	654
	比率%	13	12	12	9	10	10	2	100
38年	人数	115	130	56	126	156	52	12	1248
	比率	9	10	4	10	13	4	1	100
48年	人数	174	156	58	212	182	95	19	1510
	比率	12	10	4	14	12	6	1	100
58年	人数	170	163	50	331	213	118	21	1755
	比率	10	9	3	19	12	7	1	100

注) 洛友会名簿による。

力についても同様で電気関係の採用数がほぼ一定となっており総人数で飽和し比率は減少している。鉄道関係は当初約12%と大学を除けば一番多かったのが、技術的には確立しており路線延長も少ないためか減少の一途をたどっている。強電メーカーの比率も下る一方に対し、弱電系メーカーは30年間に5倍、58年では大学・電力を合わせた比率を占めるに至っている。

勤務先別分布：10年毎の勤務先別ベストテンを示すと第2表の通りとなる。30年間の常連は関西電力・三菱電機・京都大学・島津製作所・松下電器であり上位三者の順位は不動である。28年に4社も入っていた私鉄4社は38年には姿を消し住友電工・松下電子・日新電機がその後の常連となっている。48年以降三洋電機・シャープが急増し、28年4位にあったがその後姿を消していた川崎重工がロボット人気もあってか58年には復活している。

第2表 関西支部員勤務先ベストテンの推移

28年			38年			48年			58年		
順位	勤務先名	支部員の比%	順位	勤務先名	支部員の比%	順位	勤務先名	支部員の比%	順位	勤務先名	支部員の比%
1	関西電力	11.8	1	関電	10.4	1	関電	10.3	1	関電	9.3
2	三菱電機	4.4	2	三菱	6.7	2	三菱	8.9	2	三菱	9.2
3	京都大学	4.3	3	京大	5.0	3	京大	6.5	3	京大	6.0
4	川崎重工業	3.1	4	松下電器	2.6	4	松下電器	4.6	4	松下電器	5.9
5	神戸工業	2.3	5	島津製作所	1.5	5	住友電工	3.0	5	住友電工	3.4
6	阪神電鉄	2.0	6	神戸工業	1.4	6	神戸工業	1.7	6	シャープ	2.0
7	島津製作所	1.8	7	住友電工	1.3	7	島津製作所	1.6	7	三洋電機	1.9
8	阪急電鉄	1.7	8	大阪変圧器	1.1	8	三洋電機	1.5	8	松下電子	1.9
8	松下電器	1.7	9	松下電子	1.1	9	松下電子	1.3	9	島津製作所	1.8
10	京阪電鉄	1.4	10	日新電機	1.0	10	大阪変圧器	1.3	10	川崎重工業	1.3
10	近畿日本鉄道	1.4				10	日新電機	1.3	10	日新電機	1.3
						10	シャープ	1.3			

注) 支部員の比= (勤務先の人員 / (関西支部の人員数 - 大学院生)) × 100
洛友会名簿による。

関西支部の特徴を挙げると(1)出身の京大の膝下である事もあり大学勤務者が多い (2)官公庁勤務者が少ない (3)放送通信事業従事者は少ない (4)これに対し民間で発生した事業である電力は相当人数ありこれに関連して交通運輸関係も当初多かった。

3. 活動状況の推移

(1) 支部総会 発足当初はほぼ百名以上 (当初5回の平均104名、出席率14%) の参加を得て本部総会とは別に独立して開催されていたが、会報に詳しく支部総会が記載されていたのも第8回までで以降41年頃まで記事は殆んどない。34年度は本部総会と同時に開催され以後毎年の支部総会の中一年毎に同時開催となっている。最近の10年間では支部単独の場合は出席者平均60名弱、出席率は4%を切る程激減している。この徵候は第2回支部総会で石川

支部長が「会員数は多いが他支部の活動と比べると関西支部は教室に近過ぎるので郷愁も少いのかどうも会員のみ多くてまとまりがつかない。若い人の活動を期待する」と言われ時すでに現われている。できるだけ若い人が参加できる様にという呼びかけは鳥養会長が28年47年等何度も言われているが妙案はなく改善されていない。ただ会の運営方法としても定型化・マンネリ化しておりスピーチも大先輩が延々としゃべられるので若い者はうんざりし、週休2日制も普及し遊びも多様化してきているのも一因かもしれない。

いくつか特記すると第2回(29年)では電源開発の映画に朝日新聞経済部長の「鉄のカーテン内」の話があった。第3回では余興として参加者の奥さん(又は彼女)の平均年令のあてっこがあり一等は西山節男氏(昭29)、見当はずれのラッキー賞に稻田豪吉(昭12)、武藤良介(昭28)の両氏で8氏に賞品が出たとか。又この席で森薰氏(阪急・昭3)が今後は国鉄よりも飛行機や自動車が競争相手とスピーチされたとか(京都一大阪間の運賃は当時国鉄が大分安かったが今では国鉄は私鉄の2倍する)。発足時鳥養会長が「同窓会は縦の連絡協議に重点を置くべきで、そのためには食事には席を設けずカクテルパーティ式・園遊会式にして誰とでも快談できる様にしてほしい」と要望された立食パーティは第4回に実現した。43年は宇治静山荘で家族見学会と兼ねて行われ、会員は喜撰山ダムと天ヶ瀬^ス、家族は平等院見物であった。45年は万国博記念で本部総会兼ねて新阪急ホテルで開催され221名もの出席者(支部共催では記録)があり会食後万国博見物を行った。筆者もVIPのために電気自動車を運転したのを記憶している。58年は30周年に当たるため、前支部長佐々木正氏(昭13)の「先端技術の動向」が記念講演としてありバイオコンピュータ等興味深い話があり流石新技術のリーダーの一人だとうならせるものがあった。

(2) 家族見学会 現在も支部行事の中心である家族見学会(家族会・遠足会)の第1回は阪急の森薰氏のお世話で宝塚歌劇を見てそれから次の公演の稽古を宝塚音楽学校で見せて貰うという催しで小雨の中を予想百名をはるかに上廻る約二百名が集まり幹事連を面喰わせたと記されている。毎年確実に行われたかどうか記録はないが44年頃から支部の重点行事として定着している。33年頃からバスを貸切って何処かへ見学(又は見物)に行き現地の一寸気の効いた所で全員楽しく会食というのがほぼ定着したパターンである。行先によって参加者数に多少の変動はあるものの記録にある17回の平均が207名、42~47年の平均245名、それ以降10回の平均が202名とほぼコントントである。会員は平均100名で残り半数以上が奥様(約70名)、子供孫(約30名)である。46年以降の参加者の分布で見ると第3表のとおりで、支部も洛友会全員の平均分布と同じと仮定すれば、電気講習所の出席が際立って高く、それ以外は卒後21年以上になって分担比率より高くなる。企業では部次長・課長クラス以下と考えられる卒後20年以下では出席すべき分担比率の50%以下である。家族の名称がついている

第3表 家族見学会 参加支部員の年令別分布

卒業後経過年数		~10年	~20年	~30年	~40年	41以上	講習所	計
参加会員の分布	A %	12	12	20	12	20	24	100
全洛友会会員の分布	B %	27	23	15	11	15	9	100
分担比率に対する達成率	A/B %	46	51	131	112	112	280	—

注) A: 46~51、54~58年参加者の卒業後経過年数分布の平均

B: 58年度洛友会々員名簿による分布(学部卒業者のみを対象)

ため独身者は世話役以外は来にくい所もあり、その他遊びも色々あるという事だろうか。

いくつかのトピックを紹介すると施設の見学を主にしたものが3回(美浜の原子力発電所、淡路鳴門の送配電線、奥多々良木橋水発電所と生野銀山)が相当参加者もあり淡路行は300名と最大を記録している。創作を主としたのが45年のたぬきの里信楽陶郷行で土をこね、ひもづくりで茶わんや銚子を作り焼き上って送ってくるのを家で待つのも楽しみであった。講話を主とした事2回、48年千本釈迦堂で住職の前人文研教授塙本善隆氏の「釈迦堂の起りと仏法について」の話と49年比叡山で高僧葉上照澄師によるものであった。47年は京阪電鉄さんのお世話で琵琶湖で遊覧船を貸切り人々と湖上遊覧を楽しんだ。似た催しが58年で、琵琶湖のミシガン号(アメリカミシシッピ川に昔あった外輪船の型を模した)でグリーン席を貸切り金髪美人の運んでくるワインを傾けるのも一興であった。以前仲好しだった子供同志が久し振りに再会してはしゃぎ廻る姿も見られた。本会は申込多数で定員を上廻ったのでやむなく一部の方にお断りせねばならなかった。一番遠距離が51年の岐阜県明治村行であったが参加者260名と第2位を記録している。54年の姫路城行では松田先生の洛友会の歌の披露があり、55、57年と歌唱指導が行われている。

交通の手段としては京都と大阪からバス各2~3台計数台を用いている。会費は参加者からも徴集しているが支部の補助も多く割安で楽しめる事も参加者の多い所以であろうか。又忘れてならないのは阪急・京阪・阪神等私鉄に大先輩の大幹部がおられ、これら諸氏に毎度多大の御助力を得てきた事である。

(3) ゴルフ大会 昭和29年11月22日某ゴルフ場で第1回が開催されたという。参加者11名という。当時はゴルフは一種のステータスシンボルと見られていたが大衆化に伴い参加希望者も増えてきたので38年に同好会を2分し卒後25年以上で構成するシニア部とそれ以外の者のジュニア部とした。運営方法としては参加希望者を登録メンバーとする同好会を構成しキャプテンと称する代表者が責任持って実施する方式である。シニア部は一応会員の財政が比較的豊かだという事で当初は支部の補助ナシであった。ジュニア部は当初から賞品代の補助を

受けしておりカップも役員改選の度に支部長又は副支部長等大先輩方から寄贈を受けている。シニア部の場合特定の熱心な人がいる間はよいが実際の働き手がないという事もあってか何時しか立消えとなつた。会報にも45年5月22名参加で武庫ノ台で第5回加藤博見支部長杯があり、福中希生氏（昭11）が優勝したとあるだけである。

ジュニア部は25年未満の最年長者台の方がキャプテンという事でどういう訳か関電の部長次長級が、あたり輩下の課長以下を幹事とする事で、38年大阪パブリックで高橋博美氏（昭28）が優勝して以来確実に年2回行われ58年11月23日で第40回を重ねている。シニア部がなくなっているため25年過ぎても留まる者が増え、58年以降ジュニア部を称する事を止めた。若い人も多く第40回では参加者の分布は会員の分布と殆んど同じであった。

(4) その他 麻雀大会は29年11月20日電気クラブで14名の参加で行われて以来現在も年1回行われている。従来は半ドンの土曜日の午後を利用していたが週休2日となり態々麻雀しに出て行くのもおっくうなのか最近はメンバー探しに苦労してせいぜい4卓（4ヶ年平均13人）。カップはあるが記録はない。メンバーも決っている。

囲碁・将棋も麻雀大会と同日16名の参加で行われて以来現在も年1回林重雄氏（昭32）の幹事で行われている。最近5ヶ年の平均参加者は囲碁・将棋合わせて15人、麻雀同様登録メンバーも増えず固定されてきている。これら三室内遊戯は最近若年層に昔程人気がない事と日取りの問題、メンバー固定化等もあり実施の有無も含めて考え直す時機に来ていると考えられる。

4. 支部の運営

(1) 組織と運営 支部長・副支部長・評議員と支部長の業務を処理する幹事という形は他支部と同じであるが、実務を処理するのは幹事の中でも支部長に近い者にならざるをえず、その慣習より責任を明確にするべく昭和42年に総務幹事・会計幹事が支部長より委嘱され総会でも了承を得る習慣となり準役員の形となっている。これら両幹事は支部長の所属する会社の比較的若手が当り、結局支部長の所属する会社の支部員が一体となって運営する事になる。会則では支部事務所は電気教室に在る事になっており、当初はそうだったが、近年総務幹事の席である。従って相当数の支部員を擁する会社の重役方が支部長に就任する事になっている。第4表に支部役員（支部長・副支部長）の延人数の分布を示す。

(2) 会則 支部会則は第12条の会費以外変更はない。

(3) 会計 創立された年度の決算報告では総支出136千円で創立総会費52千円で38%を占めている。その後当分の間資料は失われているが46年の実支出規模114万円、48年134万円、58年予算では269万円である。主たる用途は家族見学会に50～60%、ゴルフ、

第4表 支部役員の勤務先別推移

勤務先 \ 期間	28 ~ 37	38 ~ 47	48 ~ 58
電力関係	30%	17%	34%
鉄道関係	44	36	
総合電機	3	7	
強電系メーカー 電線メーカー	13	27	44
弱電メーカー		13	22
その他	10		

注) 期間毎の支部役員(支部長・副支部長)の延人数の割合を示す。

囲碁将棋麻雀の一般活動に12~3%、支部総会は場所・人数により差があるが通常15%以内程度となっている。収入では従来は支部会費が最大の財源であったが49年以降700円となっており、49年以来会費収入は殆んど変らない。即ち支部会員の会費納入率は落ちている事になり最近3年間で見ても九支部の中で最低である。これは第1回支部総会において早くも本部山村幹事に指摘されている。広告収入は最近では会費収入を相当上廻っているが商法改正により企業も掲載を控える傾向が強く今後が懸念される。

まとめ

支部発足後社会情勢と関連づけると支部発生以前は電気関連産業はエネルギー供給のため(或いは動力として利用するため)の産業であった(電鉄会社も電気事業を営んでいた)。発足後第2期の10年間は万博を中心とする好景気時代でクーラーを始めとする家電等民生機器による豊かさを供給する産業であった。最近は素材・重化学工業のトンの時代から家電精密機器

第5表 全国電気機械生産価格(名目)の推移

	昭35年	昭45年	昭55年	
重電機器	27.5%	18.7%	15.9	
民生用電気機器	29.5	31.4	29.6	
その他軽電機器	43.0	49.9	54.5	電子計算機 同付属装置 7.1 その他軽電機器 47.4
計 生産価格	13,959 億円	76,324 億円	212,235 億円	

注) 産業連関表による。

等の時代を経てエレクトロニクス新素材に象徴されるグラムの時代であり、その基礎となるLSI、超LSI等情報化社会の「米」を供給し、社会の高度の“神經”を構成する電子情報産業を中心に変貌している。以上の状況はこれまで述べた支部会員の分布状況の推移にも一致している。

1982年科技庁が行ったアンケートにおいても今後科学技術の全分野で最も重要度が増すのは情報通信分野とされておりエレクトロニクス時代は今後も続くと考えられる。

関西の生産量の全国に占める割合は近年減少して来ており（例えば電気機械器具の出荷額で昭和33年の28%から54年20%に減少：日本統計年鑑）、又通信情報機械の分野でもシェアは減少してきている。重化学・家電の時代は関西も充分対応してこれたが、通信情報の分野では関西の基盤は弱い。即ち通信事業は官営で始まり從って中枢になる電々公社の研究所はすべて関東にあり、NHK、国際電々又然り。その結果部品生産は別として情報関連産業は殆んど関東に集中している。

従って関西支部員の最近の減少は当然の勢であり、今後もこの傾向は続くであろう。しかしながら関西の復権と国のセキュリティーを考えるならば何らかの形で楔を打ち込める方法を考えられないであろうか。

以上洛友会々報、同名簿、支部記録を基に記したが、不明な点が多くありかなり独断が入っている。御教示願えれば幸である。

(文責 留岡 寛)

3. 東京支部の歩み

当支部は在籍会員数約1700名、関西に次ぐ大世帯であり支部活動は後述の如く極めて活発多彩である。今その歴史をふりかえる時、特筆すべきことは、「東京は洛友会発祥の地ともいうべきところ」という点でありその経緯については、「電気評論」昭和37年12月号掲載の山村忠行氏（大6卒）の隨筆「洛友会十周年を顧みて」の中の一文により明らかである。

曰く、「これより前（注 昭和24～26年頃か）、東京では東京在住の卒業生有志が読書会を作り各自の研究発表をなすとともに親密な連絡をとっていたので、これ等の人々から同窓会を作つはどうかという議が起り、乙葉真一氏あたりから熱心に加藤教授や阿部教授にもちかけて来た。そこで昭和27年春頃に両教授はこれをもち帰つて電気教室の会議室で教官連との協議会を開いたのである。その結果……」と。かくして洛友会結成へと発展して行ったというが、当時会合になにかと世話をやかれた松尾三郎氏（昭13年卒）の熱意がしのばれる次第である。ちなみに、乙葉氏と両教授は、大正7年卒の同級生である。

さて東京支部の発会式は昭和28年2月12日盛大に催され、初代支部長に佐藤穏徳氏（明

44卒)、副支部長に乙葉真一氏(前記)が選任され、筆頭幹事は筑木二郎氏(昭14卒)であった。しかして当初より盛り沢山な行事が行われたが、年を経るに従い極めて多彩でかつ充実したものとなり、会員相互の親睦交流に寄与するところ大となっている。そのための主たる財源は名簿広告収入によっているが、これには歴代支部長の並々ならぬお骨折りや、協力を惜しまれなかった会員諸氏のあることを銘記したい。中には本部の台所の一助にもと会報に新年名刺広告の掲載の端緒を開いた支部長もおられた。

次に東京支部の特記すべき事項として、支部長の任期は一年とし、順次年次を繰下げて行くという制度がある。これは昭和44年、青木三郎氏(昭5卒)が支部長を引受ける際始められて以来現在に至っている。それ以前は2年交替、時には数年に及ぶ在任もあるとのことだったが、名簿広告募集の仕事が大へんなこと、支部長の年令が60才過ぎという若さ(?)を維持できるので、自ら十分な活動ができると、なるべく多くの人に経験させること、その結果支部活動に認識が広まり一層活気が出て来ること等々の理由から改革に踏切られた。副支部長を一年やって次の支部長をやるということで引継ぎもスムーズに行われている。なお補佐役の総務・会計の両幹事もそれぞれ一年交替であり会計→総務と2年続くことになる。その成果は名簿広告募集の実績に最も顕著に現われ、大世帯をまかなうため先輩各支部長の奮斗と御労苦のあとが偲ばれそれが後任者に対する大きな刺戟となって続いて行く。また会の運営も若手(大先輩から見れば)にまかせることでファミリリーな雰囲気になったこと、苦労して得た金は生きてくることなどその効果は巾広いものがある。

支部総会は毎年6月目黒の八芳園で開かれるが、100名を越える参会者があり、斯界で御活躍の会員から時勢にふさわしい課題の講演を聞くのが慣例となっている。

さて支部の基幹行事としては旅行会・見学会・講読会があり、別に同好の士の集りに趣味の会を持ち、そのほかに支部独特のものとして「グループ活動」がある。以下これらの概要について記したい。

1. 旅行会

当初は年2回行われ行事のハイライトであったが、行事の多様化につれて年1回とし11月3日(祝日)に行なうことが恒例となった。100名前後(含家族同伴者)の参加で観光バス2台を連ね秋の一日を楽しんでいる。最近数年の実績は次の通りである。

「湯ヶ原・芦の湖」「秩父名所めぐり」「三浦半島」「房総めぐり」「甲斐武藏国境」「足利の史蹟と桐生」「御岳・奥多摩方面」「横浜めぐり」「益子焼の里」「勝沼・甲府方面」等。

2. 見学会および講読会

これらは会員の見聞を広めるため先端技術の開発・実用化されている所を訪れる催しで講読会では必ず洛友会会員が講師として講演することになっている。これとは直接関係はないが、

十数年前には社会的に活躍された大先輩の声を残しておきたいということで数名の方の録音テープが保管してあると聞いている。

見学・講読両会の最近の実績を次に記す。

(1) 見 學 会

「防衛庁技術研究本部」、「東京航空交通管制部」、「航空宇宙技術研究所」、「海上自衛隊横須賀地方統監部（自衛艦・潜水艦）」、「筑波研究学園都市」、「宇宙開発事業団・地球観測センター（ランドサット）」等。

(2) 講 読 会

「最近の宇宙開発の動向（木村小一氏・昭19卒）」、「80年代における情報化社会の展望（山本幹次氏・昭16卒）」、「朝日新聞社・コンピュータによる新聞製作（大泊勝氏・昭28新卒）」、「国鉄新幹線指令本部のシステム（武藤良介氏・昭28卒）」等。

支部会員からは個人では訪問・見学できないところを……との声が多く裏方の役員幹事は場所の選定に頭を悩ますこともあるようだ。参加者はそれぞれ50名前後で好評であった。

3. 趣 味 の 会

これには次の六つの会があり、古いものは支部発足以前からの引継ぎがあり同好の支部会員が年数回集って腕を競っている。

「囲碁会（約60名）」、「将棋会（約20名）」、「麻雀会（約40名）」、「ゴルフ会（約100名）」、「落語会（諺曲・約20名）」、「テニス会（約30名）」、数字はそれぞれ在籍者数である。これらは支部の年間行事の一環として予算に組み込み補助している。

4. グループ活動

これは当支部独特の活動形式で数年度にまたがるいわば同窓会の一形式である。支部発足当初あたりから明治大正卒の会員が鶴友会という一つのグループを作り会合を重ねては………、現在次の8つの会がありそれ各自性のある活動をしている。これらの会も支部の年間行事の一環として位置づけ補助の対象となっている。その効用の一つに総会の出席者が増えたという。以下に近況を記す。

(1) 鶴友会（明・大卒）——松田先生のご上京の機に合わせ三菱クラブで午餐会の開催が恒例で57年度は三回参加者延38名、ほかに忘年会を行い参加者8名。

(2) 洛東会（昭2～7卒）——毎月16日に中食会を、別に夜の懇親会を2回、参加者延約180名。

(3) らっきょう会（昭8～11卒）——懇親会を年2回9月、3月の第三木曜を開催、参加者延40名。

(4) 洛楽会（昭12～16.12卒）——年1回ゴルフコンペを行っている。参加者10名前後。

(5) 東友会（昭17～20卒）——夏期を除き毎月中食会を行い、その中1回は忘年会又は新

年会で夜の部となる。参加者延約 120 名。

(6) おぼろ会（昭 21～24 卒）— 一年 1 回懇親会開催、参加者 20 名前後。

(7) 五九洛会（昭 25～29 卒）— 56 年度新発足、年 2 回講演会兼懇親会を行っている。演者は同会メンバー、参加者延 70 名前後。

(8) 洛友デルタ会東京支部（講習所卒）— 洛友デルタ会総会（京都）に参加のほか幹事会、忘年会等を行っている。参加者延 20 数名。

吉田寛一氏（講・大 14 卒）によると昭和 2 年 11 月に講習所同窓会東京支部第 4 回同窓会に出席したが、その頃は豊永滋氏（講・大 6 卒・家庭電気普及会）が代表で支部の運営に当っていたようである。その後昭和 5 年西銀座にあった遞試社（吉田寛一）内へ支部の事務所を設置し、歴代の支部長は、林一郎氏（講・大 5 卒）、山谷為吉氏（講・大 5 卒）、長井貞夫氏（講・大 6 卒）が就任した。戦後は事務所を愛知産業㈱内に移転、会長（東京デルタ会）に井上弥三郎氏（講・大 9 卒）を迎えた。現在は洛友デルタ会東京支部と改称し（昭和 52 年 5 月）、支部長は中村秀治氏（講・大 10 卒）、事務所は中野壮二氏（講・昭 12 卒）宅である。このデルタ会の呼称は昭和 13 年講習所が京都大学構内から立命館へ移管されることになった時、東京在住の卒業生が同窓会の名称が消え去るのを残念に思いこれを存続させることを決定した機会に名称の簡略化をはかり「東京デルタ会」と決定した由である。

5. 慶弔関係

毎年支部総会において当該年内に米寿および喜寿を迎えた先輩をお祝いすることを恒例としている。米寿の方には羽根ぶとんを、喜寿の方には毛布を、支部会員の総意として贈呈している。

また会員が死去された場合遺族の方に香典をさしあげている。

6. 結び

最後に今後の課題と思われる点にふれて見たい。支部の目玉的存在のグループ活動は経年増加の要素を持っている。趣味の会もふやしたい希望がある。活動のためには資金が必要。ところが一方広告募集は商法改正或は名簿の隔年発行等のマイナスの影響が出はじめている。新規の行事を計画するどころではないという空気もある。その対策には強力なスポンサーを求めるのも一法だが、当面は折角歴史のある広告募集に、全力投球するのが常道であろうと思われる。それには新規の開拓を広く強力に進める必要があろう。これから発展が予測される業界、たとえば情報革命関連の企業で未開拓のものを目指すとか、個人企業分野での発掘など案外盲点かも知れない。

また行事面で資金のより効率的な活用が望まれること勿論であるが、余り窮屈でも角を矯めて牛を殺すことになり生彩を欠くようになっても困る。旅行会なども道路交通事情の悪化で（

バス利用が圧倒的に多い)往復にとられる時間が多く遠出はむつかしくなる傾向にあるので、「近郊横浜めぐり」の例などを参考に新趣向を考える必要があろう。ともあれ先輩の努力により順風で進んで来た支部の運営もようやく一つの峠にさしかかったように感じられるが、筆者の杞憂であることを祈っている。

以上東京支部の特色と年間行事について概括的に記したが、洛友会の全国の皆様に少しでも御認識いただき御参考になれば幸いである。

終りに臨み、拙文をまとめるに際し御指導御援助いただいた先輩はじめ同窓の方々に厚くお礼を申し上げます。

(文責 小田 敏正)

4. 中部支部の回顧と近況

(1) 回 顧

本部が創設されたのを受けて昭和27年12月13日に中部支部が開設された。支部会員の構成は愛知・岐阜・三重・静岡・長野の中部5県に在住する洛友会々員と定められ、初代支部長は当時名工大学長の清水勤二氏(大12)、そして顧問に当時神鋼電機KKの社長小田島修三氏(明45卒)を決めて発足した。

開設後清水支部長は積極的に活動を展開されて中部支部の声価を大いに高められたが昭和39年1月に急逝された。そこで副支部長の本多静雄氏(昭13)が総会の議を経て第2代の支部長になった。同氏また支部発展のための企画を心掛け前進に寄与された実績から重任につぐ重任を重ねて現在に至っている。

さて、開設以来会員相互の親睦を図るために数多くの楽しい集合が実施されてきたし、支部総会には必ずといってよいほどに会長が出席された。これについては前期(清水支部長時代)と後期(本多支部長時代)に分けて回顧してみることにする。

前期には名古屋市内の鳥久の広間ですきやき鍋を囲んでの集合がしばしば開かれた。そのときの余興として行われた福引がなつかしい。各自が引いた紙縋を開けてみると恩師や母校に因んだユーモラスな文句が書かれていて、この文句と引換えに后刻渡される景品との連想に夢とスリルを味うのであった。そして后刻幹事から珍文句・珍景品が発表されるとその都度爆笑が湧き上った。このほかの集合場所としては鳥羽の真珠島・松阪の和田金・三河三谷なども記録されている。

后期となると総会とは別に家族同伴の集合が数多く企画された。第1回は足助香嵐渓の觀楓であった。途中本多氏宅に立寄ってご自慢の古陶器コレクションを鑑賞した。ほかに伊勢スカ

イライン探勝・明治村見学・思い出の京都を訪ねること数回、そして近年になると浜岡原発の見学・天龍川下りなどがあるが、家族に最も人気のあったのは常滑市陶芸研究所で催した一日陶芸教室と小原村の和紙工型館で開いた和紙抄き実習であった。なお、ここ10年余に亘って恒例の集合となっているものに伊勢五ヶ所湾内の七日島での観月会参加と、当日はここで一泊し翌日鳥羽カントリークラブで開くゴルフコンペがある。この集合には毎年母校からも先生のご参加をいただいている。この観月会参加と一泊の費用はすべて支部長の会社のサービスであるので有難い。

さて、本部総会といえば東京と関西で交互に引受けるのが通例だが中部で引受けたこともあった。第1回は昭和31年6月3日で76名が参加した。木曽川下りを楽しんだあと、この急流に聳え立つ岩山の頂上の城山荘で本部総会を開いた。日暮れて宴漸く酣になった頃鶴飼の篝火が眼下の急流を流れてゆく神秘な光景に歓声をあげた思い出はなつかしい。第2回は昭和44年5月25日で95名が参加した。名鉄グランドホテルで本部総会を開いたあと、バスで明治村に向った。村内に移築し保存される代表的な建築物を通して明治の人たちの知恵と努力に触れた参加者一同の感激は一入のようだった。

30年を回顧すると、この機会に書きとめておきたいことが次々と蘇ってくるが紙面の制限もありこれでおく。

(文責 古田 久一)

(2) 近況

中部支部は現在本多支部長のもと、古田総務幹事（昭6）、前原会計幹事（昭28）、坂入庶務幹事（昭33）の3名が幹事となって運営されている。組織としては、主要な会社単位で班を編成して班長をおき、また、愛知県以外の在住者に対しては県単位で枝部を設けて会員相互の連絡を便ならしめている。中部支部の運営は古田幹事およびそれを補佐する前原幹事に負うところが大きく、特に前述の組織作りは古田氏の多大の努力によるものである。

現在中部支部の会員は約300名。うち約200名が名古屋を中心とする地域に在住または勤務し、長野、静岡、三重、岐阜がそれぞれ20～30名である。会社別では中部電力32名、神鋼電機16名、名鉄グループ8名、新日鐵4名、トヨタ自動車工業21名、日本電装18名、三菱系各社19名、日立製作所10名、東芝7名といったところが主だったところである。以下会社別に、会員から寄せられた近況報告をもとに洛友会会員の動静をお伝えする。

〔中部電力〕会員30数名を擁する最大の「派閥」であるが、転勤が多く、定着率の悪いのが悩みの種である。OBの最長老は河津吉兵衛氏（大13）、ついで大杉幹氏（昭12）は中部環境緑化センター社長をながらくつとめられ、自称「植木屋の親王」。現役では飯尾博一氏（昭31）がこのほど支配人に昇格。坂入武彦氏（昭33）は洛友会中部支部の庶務幹事であったが、

このほど東京へ転出。以上二人は原子力畠であるが、これに限らず中部電力の洛友会メンバーには原子力屋が多く、水野勝己氏（昭20）、中村修三氏（昭32）、根石信行氏（昭42）、沢田一朗氏（昭46）など計10名を数える。その他では火力部門が多い。このところ毎年2名ずつの入社があり、会員は増加の傾向にある。

〔神鋼電機〕横川京次氏（昭28）をまとめ役として現有勢力は16名であるが、30年前には小田島修三氏（明45）を筆頭に25名であった。その後特に昭和45年以降は母校よりの入社がなく、減少の一途を辿って現在に至っている。現在はOB5人現役11人で、最長老は富満通哉相談役（昭7）であり、現役のトップは西尾又一専務（昭23）である。以下、木崎和郎電機技術本部長（昭28）、横川京次技術開発本部副本部長（昭28）とつづき、最年少は昭和45年入社の岡崎健二、笠井一夫の両氏である。今後新人の入社が望まれる。年に一回は会を持って親睦をはかるのが通例となっており、今年は特に伊良湖岬へ一泊ででかける予定である。

〔名鉄グループ〕現在会員は8名であるが、名鉄には関連会社が多く、しかも名鉄本社と関連会社の間で自由に人事交流がおこなわれるので、所属会社がときどき変るという現象を呈する。現在最年長は名鉄自動車整備社長外山敏夫氏（昭22）であり、ついで名鉄百貨店副社長大野彰氏（昭25）、名鉄技師長付武田哲夫氏（昭25）、名鉄技術研究部長石川進氏（昭26）、中央設備エンジニアリング専務遠藤茂氏（昭27）とつづく。名鉄は会社そのものが単なる運輸業を超えて、流通・レジャー・不動産・技術建設と多角化しつつあるので、会員のなかにも電気工学とほとんど関係のない分野で活躍している場合が多くある。

〔新日鉄名古屋〕現在の会員は5名で、電気、計装の技術部門に3名（昭41 白井晋、昭48 芳谷直浩、昭51佐志原洋一）、設備工事部門に1名（昭35 大谷正治）、生産管理部門に1名（昭45 中村孝太郎）である。鉄鋼業における電気屋の職分は、かつてはモーター・や計器の保守整備が中心であったが、最近はプロセス制御の分野が急激に増大しており、かつ、鉄鋼業の将来を左右すると言われているので一同ますます張り切っている。



なお、他のグループについては原稿締切りまでに十分な資料が集らず、今回は見送らせていただいた。いずれ洛友会会報等で順次御紹介することとしたい。(文責 坂入 武彦)

5. 洛友会中国支部 30 周年を迎えて

(1) 中国支部の誕生

洛友会中国支部は、本部創立に遅れること約 1 年の昭和 28 年 12 月 1 日に発足しました。中国地方では、洛友会発足前から故鈴川貫一氏（明 42 卒、元中国配電社長）を中心に折々に会合をもち、同窓会活動を行なっていましたが、これが洛友会中国支部に発展した形となりました。

支部の創立総会は、本部の都合などもあって、翌年の昭和 29 年 4 月に、本部から故鳥養会長、松田先生、故山村幹事をお迎えし、安芸の名勝巣島を対岸に見渡す中国電力「宮島荘」で行なわれました。

このとき、支部役員としては、前述の鈴川貫一氏を顧問として迎え、支部長としては真田安夫氏（昭 2 卒）、幹事として故高橋親雄氏（昭 4 卒）、松谷健一郎（昭 16 卒）ほかの方々が選任されています。



今は懐しい創立総会の記念写真

(2) 会員数の変遷

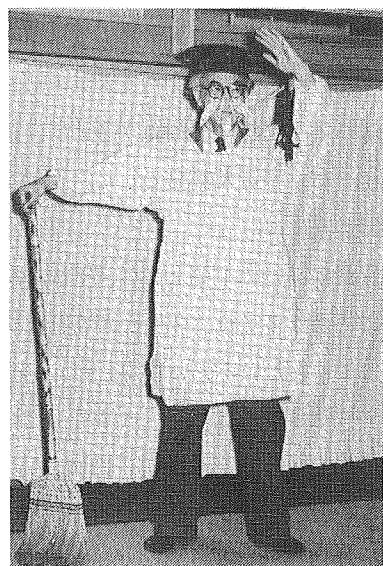
支部会員数は、発足当時 80 名強でしたが、その後着実に増え続け、特に昭和 36 年度からは電気講習所卒業生も加わることとなり、会員は一挙に 100 名を越えることとなりました。昭和 40 年以降は、毎年 1 ~ 2 名ずつ新卒者が加わり、現在では支部会員数は 133 名となっております。

(3) 諸先生のこと

支部総会は毎年 5 月頃に 1 回催しておりますが、学会や研究会あるいはその他の行事が広島で開催された折に、御来広の先生方を囲んで有志集まって盆をくみかわしております。

ちなみに、中国支部総会によく出席していただいた先生方としては、故鳥養先生、故林重憲先生、松田先生などでしょうか。

鳥養先生には昭和 36 年頃迄はよく来ていただきました。先生はよく色紙を書かれ、多くの方が頂戴し



ありし日の林重憲先生

ておられたようです。

林先生は中国電力の技術研究面の指導をされていたことと、真田支部長と同期生ということもあり、支部総会への出席は最も多かったようです。林先生はなかなかの芸達者な方で、懇親会の座をにぎやかに盛りあげていただきました。

次に松田先生も林先生同様、しばしばおいでいただいており、現会長として今後も引き続き御来広をお願いしたく思っております。先生は意外と(?)女将にもてる方のようで、一度会場として使った料亭の女将などは、支部総会の開かれる5月頃になると、「松田先生はお元気ですか。」と、会場に利用してくれというのではなく、幹事の方へ電話がかかってきます。

このほか、故加藤先生は郷里が岩国ということもあり、洛友会以外にもよく立ち寄られました。また、近藤先生、木嶋先生は林先生と研究指導に御一緒されたことも機縁となり、その後もよく来ていただいております。

なお、本部幹事としては、初回から40年迄は山村幹事、41年から51年迄は山本幹事に御来駕願っておりますが、最近は本部幹事がお見えにならないので淋しく思っております。

(4) 支部長のこと

当支部は発足以来30年間、真田安夫氏が支部長をやっておられます。これは全国各支部の中でも最長不倒であります。

真田支部長は昭2卒で、本年79歳ですが、勿論お元気で、まだまだ最長不倒記録を伸ばすだろうと支部の者全員が期待しております。

(5) 創立30周年記念総会

去る5月27日に、松田先生と木嶋先生をお迎えして、支部創立30周年記念総会が広島グランドホテルで催されました。

予決算など各報告は例年のように型通りすみましたが、いつもと趣きをかえた華やかな会場だったためか、歌のうまい美人ホステスを選びすぐったためか、松田先生創作の「洛友会の歌」を皮切りに、飲むほどに酔うほどに、寮歌、ナツメロととどまるところを知らず、予定時間を大分オーバーする大盛況でした。

(6) おわりに

洛友会は、いろんな人々が、年代を越え職業を越えたふれあいのできる場として貴重な機能を果しておりますが、今後ともこれは変わらないと思われます。洛友会を会員皆さん之力で盛り立ててゆきたいと思います。

(文責 細田 順弘)

6. 洛友会九州支部の歩みについて

洛友会が隆盛のうちに創立 30 周年を迎えたことは、誠に喜びに堪えません、心からお祝い申し上げます。

九州地区におきましては、昭和 26 年に設立された九州電力の当時工務部長をしておられました宮田秀介先輩（大正 15 年卒、三代九州支部支部長）のご尽力により、ロータリーの会合で九州にご出張になった鳥養先生、九州電力の技術指導で福岡にお出になつた岡本先生、大久保先生、林先生と福岡近郊在住の卒業生との懇談会をその都度開催しておりました。このため九州地区名簿の作成、役員の選出など比較的容易に進み、洛友会結成の翌年、昭和 28 年 10 月 26 日に京都大学から加藤先生のご来駕をいただいて、洛友会九州支部が設立されました。設立総会で、支部長に福井正治（明治 43 年卒）、幹事に秋田武夫、安田振之助、吉川徳夫（いずれも昭和 12 年卒）の諸先輩が選出されました。

昭和 30 年代の支部総会には、明治・大正年代にご卒業の会員のご出席も多く、私達卒業直後の会員は、諸先輩の思い出話に深い感銘を受けておりました。九州地区では最もご長老であった浅尾新十郎（明治 42 年卒）、初代支部長の福井正治（前述）、電力事業でご活躍された織田啓治、高柳与四郎（大正 3 年卒）、金子義憲（大正 6 年卒）、宮田秀介（前述）、電機工業界でご活躍された岐美忠雄（大正 13 年卒）、富永和郎、脇山俊一（大正 14 年卒）など諸先輩は総会によくご出席になっておられました。支部発足時、病床におられた九大名誉教授 森 兵吾（明治 45 年卒）先生には、一度も総会にご出席いただけなかったことは大変残念であります。

二代支部長の高柳与四郎、三代支部長の宮田秀介の両先輩は、昭和 30 年代、40 年代の九州支部の発展にご尽力いただき、若い私達会員に常に温い声援を送っていました。高柳支部長の火力発電所の建設、宮田支部長の電力系統の運用などの戦前戦後の苦労話などお聞きしておりますと、現在の高い信頼度を世界に誇る電力系統出現までの長い歴史を感じざるを得ません。昭和 52 年に高柳支部長が、昭和 55 年に宮田支部長が、ご逝去なさいましたが、会合で両先輩の思い出話しがでることも多い今日此頃です。

洛友会九州支部は、設立時会員数は 80 名程度でしたが、現在は 130 名以上となっております。年 1 回の総会と折りにふれ開催している中食会がおもな行事でありますが、会員が九州各地に分散しておりますので、参加者は総会では 30 数名、中食会では 20 数名にとどまっています。

これまで幹事をなさつた加来誠一郎、西村利夫（昭和 11 年卒）、安田振之助（昭和 12 年卒）、小菅佐七郎（昭和 14 年卒）、井上大助（昭和 15 年卒）、増岡健一（昭和 21 年卒）、深町藤吉（昭和 22 年卒）の諸先輩は、会合には欠かさず出席され支部の発展にご尽力いただいております。

遠路にかかわらず、宮崎の日高安壯（昭和10年卒）、佐賀の山口高雪（昭和13年卒）、大分の竹下司（昭和19年卒）、北九州の宮崎英男（昭和22年卒）の諸先輩は総会の常連としてご出席しておられます。また、ご転勤などにより新しく九州支部の会員になられた九州朝日放送の足立斌（昭和6年卒）、九州大学の大橋章男（昭和15年卒）、九州変圧器の清水幸四郎（昭和20年卒）の諸先輩も、熱心に会合へ参加され、九州の生活にすっかり馴染んでおられます。

岡本督（昭和4年卒）、戸山信芳（昭和8年卒）、永山盛敏（昭和19年卒）、古城戸正隆、杉村英男（昭和21年卒）、大塚成吉、久場義隆（昭和22年卒）の諸先輩もよくご出席され、豊富な話題を提供していただいております。

以前よくご出席いただいた電気講習所ご卒業の林田栄蔵（大正10年卒）、万田元房（大正11年卒）、塩田善六（昭和2年卒）の諸先輩はご高令のためかお顔を拝見する機会が少なくなりました。支部役員をなさった本郷式良（昭和10年卒）、西助九郎（昭和16年卒）の両先輩は病気がちとかで、最近は会合を欠席しております。一日も早いご回復をお祈りいたします。

最近は出席者の顔触れが、やゝ固定された傾向にありますが、豊かな経験から繰り出る話題は尽きることなく、時間のたつのも早く、名残を惜しみながらの解散となっております。総会後、二次会へ流れて、更に友好を深め合っている会員も多いようですが、詳しくは知る由もありません。

支部総会には本部、教室から諸先生もご参加いただき、翌日は原子力発電所、超高圧変電所など九州電力の主要設備と附近の名所旧跡などご見学いただくことも恒例化した行事の一つとなっております。支部長と幹事とがお供することが多いのですが、電力設備について専門的見地から種々ご指導くださることが多いようです。電力工学の講座を担当しておられました大久保先生の専門的なご質問には返答に困り、第一種電気主任技術者の免状を取り上げられそうになったという先輩のお話しをお聞きしたこともありました。

支部会員のなかには、九州電力在籍の会員が25名程度と比較的多い関係で、九州電力洛友会といった会食や登山など催し、社内の縦と横との連係を強め、若い会員の激励を行なっております。

現在の支部役員として、

支 部 長	河本 勝寿（昭和 5年卒）	総務幹事	安田振之助（昭和 12年卒）
副支部長	増岡 健一（昭和 21年卒）	会計幹事	大倉富士雄（昭和 26年卒）
	深町 藤吉（昭和 22年卒）	幹 事	上田 保之（昭和 27年卒）
			望月 昭彦（昭和 30年卒）

を昭和55年の総会で選出し、九州支部の運営に当っており、支部の発展に努力したいと決意しております。

運営資金、会員数など積極的な支部活動が阻害される要因も多い現状ですが、本年は支部創立30周年にあたり幹事相寄り記念行事として懇親旅行、ゴルフ会などの計画を話し合っております。

幹事の補佐として、本部および会員への連絡、名簿の整備に献身されている佐藤文紀（昭和29年卒）、加藤勝彦（昭和41年卒）の諸兄へ感謝するとともに洛友会のますますの発展を祈念して、洛友会九州支部の歩みとさせていただきます。

（文責 上田 保之）

7. 洛友会四国支部

洛友会本部および各支部のほとんどが、30周年を迎えるが、四国支部は、昭和30年に結成されて以来、今年で28周年になります。

会員数は、58年6月現在で86名であり、卒業年別にみると昭和40年代卒の者が最も多く21名、次いで20年代卒16名、10年代卒14名などとなっている。県別の居住者数でみると香川県が最も多く43名、次いで愛媛県21名、徳島県14名、高知県6名、その他2名（特別会員）となっている。勤務先別にみると四国電力、住友共同電力の電力関係が過半数を占めていることは、四国支部の特長かと思われます。残りは、大学、工専などが数名ずつ、その他メーカーや個人経営など各方面に分散している。

支部活動の主行事は、毎年1回、5～6月に開催される支部総会および懇親会である。場所は、高松市内の旅館で、長期間、丸の内にあった紅羽で行なわれていたが、都合で昨年より錦町にある新常盤に所を変えている。土曜日（今年は金曜日）の午後5時頃から始まり8時半～9時頃に閉会する。出席者数は大体30数名程度で、顔ぶれもほぼ定着しており、年1回の対面を心待ちしている者も少なくはないようである。

総会は、先ず支部長の挨拶で始まり、来高された本部会長の挨拶に引き続き教室の先生の近況報告がある。3年前になるが、木嶋先生が出席された時には、スライドを持参されて、電気教室の建物や百万遍など大学近辺を見せて頂き、多くの支部会員が、なつかしい学生時代を懐古させられたことがある。なお、四国支部総会に出席された先生方は次のとおり、今は亡き鳥

回	年	先生（敬称略）	回	年	先生（敬称略）
1	昭和31	松田，加藤	5	昭和35	前田，近藤
2	32	七里，林（重）	6	36	阿部，大久保
3	33	松田，林（千），林（重）	7	37	鳥養，林（重）
4	34	清野，大谷	8	38	羽村，大谷

回	年	先生（敬称略）	回	年	先生（敬称略）
9	昭和39	林（千），木嶋	19	昭和49	大谷，岡田
10	40	清野，近藤	20	50	近藤，上之園
11	41	鳥養，林（重）	21	51	松田，卯本
12	42	鳥養，上之園	22	52	松田，池上
13	43	林（千），坂井	23	53	松田，上之園
14	44	田中	24	54	松田，上之園，佐々木
15	45	高木	25	55	松田，上之園，木嶋
16	46	大谷，池上	26	56	松田，林（宗）
17	47	松田，上之園	27	57	松田，岡田
18	48	林（千），坂口	28	58	松田，近藤

養先生や林重憲先生の名前が見られ、なつかしく思われる方も数多いであろう。

総会は、引き続き会務報告、会計報告等があり、最後に新入会員の自己紹介を兼ねた挨拶がある。新入会員は、最近では、平均して毎年1名程度で、多い時は3名の年もある。

総会が終ると、記念撮影の後、懇親会に入る。最年長者の音頭による乾杯で始まり、初めのうちは整然としていても、酒が入るとやがて場内のあちこちでは、お互いに近況報告する者や昔の思い出を語り合う者、教室から来られた先生に昔お世話になったお礼をする者などで、時がたつのも忘れるほどの盛況さになる。余興では、最近流行のカラオケに合わせ自慢のどを披露する者もある。昨年は、松田先生の自作「洛友会の歌」を先生自らテープに合わせて若々しい歌声を披露して頂き、支部会員が感嘆させられたことがある。時計も八時を過ぎる頃には、徐々に退散する者が目立ち、閉会時には、約10名程となり先生を中心に肩を組み合って「三高寮歌」「琵琶湖周航の歌」を合唱して幕を閉じる。

翌日は、最近では恒例となった松田先生の四国八十八個所巡礼に支部長他1名が御案内する。また、教室から来られた先生には、ゴルフを楽しんで頂くか、栗林公園、屋島などへ御案内したりしている。

松田先生の八十八個所巡礼は、5年前から始まつたもので既に香川県に所在している67番（大興寺）から最終の88番（大窪寺）の22個所全部と徳島県に所在している1番（靈山寺）から12番（焼山寺）を除く19番（立江寺）までの18個所、今年になって高知県に足を延ばして、30番（安楽寺）から33番（雪蹊寺）までの4個所、計44個所で全体の半分を終らされている。先生を御案内した会員は、松田先生の若さには驚くばかりで、石段などは自ら先頭に立って登られたこともあるそうです。

今後とも、この若さで残り半分を無事巡礼されることをお祈り致します。

（文責 赤股 義高）

8. 洛友会北陸支部の歩み

洛友会の創立 30 周年にあたり、その記念誌に各支部の歩みを載せたいということで当支部にも原稿依頼がきましたので、過去の洛友会会報等により北陸支部の歩みを振り返ってみました。しかし、資料の不足等でその歴史を十分に網羅してはいないと思われますので、この点を予めお含みおきください。

北陸支部が発足したのは昭和 29 年 5 月 6 日で、来年が丁度 30 周年ということになります。他支部はもう少し早く発足していたようです。昭和 28 年末の加藤信義先生北陸御出張の際、北陸支部結成につき先生からお誘いがあり、また同窓生の間でもその希望が強かったため支部結成の動きが具体化し、丁度昭和 29 年 5 月鳥養会長の北陸御来訪を機に旗揚げとなったものです。当日は鳥養会長はじめ阿部清、林重憲両先生、山村幹事をお迎えし、産業大博覧会で賑う富山市の電気ビルにおいて盛大に創立総会が開催されました。創立時の会員数は 37 名で現在の半数にも満たない数でした。初代支部長には高木金生さんが就任され、幹事には畔柳孫一郎、西岡敬二、増田盛雄の三氏が選任されました。高木支部長は昭和 31 年まで支部長を勤められ、その後長井要蔵さんが支部長に就任されました。

支部の主な行事として、数年ごとに支部総会が開かれてきました。その主なものを拾ってみることにします。発足後しばらくは資料がなくはっきりしたことはわかりませんが、昭和 35 年度の支部総会は、当時完成ま近かの北陸電力有峰ダムの工事視察のため来富された大久保達郎先生と山村幹事をお迎えし、7 月 13 日富山市の奥田屋で開かれました。

昭和 36 年度の支部総会は 5 月 30 日近藤文治先生、山村幹事をお迎えし前年度と同じく富山市の奥田屋にて開催されました。洛友会会報の記事によれば、斎藤敏信さんの手品がすばらしかったそうです。

昭和 39 年度の支部総会は、6 月 16 日林重憲先生、山村幹事をお迎えし富山市の金茶寮にて開催されました。この総会で支部長が長井要蔵さんから荒井武治さんに交替されました。

昭和 42 年度の支部総会は、富山地方気象台発足以来の新記録となった干天続きも終わりを告げた 7 月 8 日富山市の海老亭において、鳥養会長、林重憲副会長、池上淳一先生、山本幹事をお迎えして開催されました。

昭和 44 年 8 月 6 日には、長年支部長を勤め北陸支部発展のため多大の功績を残された長井要蔵さんが富山市を去って兵庫県宝塚市へ移されることになり、その送別会を兼ねて富山市の海老亭において懇親会が開かれました。この会には神奈川県逗子市にお住まいの野際幸雄さんが遠路参加されました。

昭和 51 年 6 月 19 日には、金沢市の金城楼において昭和 51 年度の支部総会が開催され、

松田会長はじめ大谷泰之副会長、田中哲郎先生、山本幹事に御出席いただきました。大谷先生は京都大学を停年退官された後福井工業高専の校長となられ、以来北陸支部とは深いお付き合いをいただいている。このときは金沢市で開催されたため石川県在住の会員多数の御出席をいただきました。

その後荒井支部長が体を悪くされたため、昭和 55 年からは現支部長の西岡敬二さんが支部長を勤めておられます。

一番最近の支部総会は昭和 55 年 11 月 8 日富山市の松月において松田会長、大谷副会長、近藤文治先生をお迎えし開催されました。丁度松田会長が米寿を迎えるということで全員でお祝いを申しあげ心ばかりの記念品をお贈りしました。また、新たに顧問が設けられ荒井前支部長と金井久兵衛本部副会長が就任されました。

総会の記念は以上のとおりです。次に会員の動きについてみてみます。会員数は発足時 37 名でスタートしましたが、その後昭和 40 年代初めまでは大きな変化もなく推移しました。丁度高度成長期で卒業生の多くが太平洋岸の大都市に集中した影響かと考えられます。その後原子力発電所の立地、若者の U ターン現象等を反映し少しづつ会員数も増え現在は 89 名を数えるようになりました。

各県別の会員数は富山県 33 名、石川県 19 名、福井県 37 名となっています。卒業年次別でみますと次表のとおりです。

(文責 久和 進)

卒業年次	大正	昭 2 ～昭 9	昭 10 ～昭 19	昭 20 ～昭 29	昭 30 ～昭 39	昭 40 ～昭 49	昭 50 ～昭 58	大学院	講習所	合計
人數	2	8	8	14	12	18	13	3	11	89

9. 東北支部の歩み

洛友会は昭和 27 年に発足したことであるが、当初東北在住の会員は殆んど支部の存在を知らないのが実体であった。昭和 37 年 12 月平井寛一郎氏（大正 15 年卒）の東北電力社長就任と共に東北支部結成の機運が高まり、昭和 41 年 6 月仙台市において支部設立総会が本部より鳥養会長を迎えて行なわれた。

東北支部会員は東北六県に在住する会員と新潟県に在住する会員の内東北支部に入会を希望する者という事で 30 名程度の東北支部が誕生した。以後支部行事としては年一回の総会のみであるが、毎回本部から先生方が出席され、大学の近況、最新の技術等のお話を戴き、感銘深

い一日を送らせて貰っている。

支部総会出席者は当初は会員の略々半数を数え、高出席率を誇っていたが、当支部には新人の入会が少なく、年々老令化するため最近の出席者は数名程度で淋しい限りである。

支部設立以来の歩みを列記すれば下記の通りである。

記

◎昭和41年

第1回 設立総会

- (1) 日 時 昭和41年6月11日
(2) 場 所 仙台市グランドホテル
(3) 出席者 本部 烏養利三郎・林 重憲・山本 茂雄
 支部 平井寛一郎以下14名
(4) 役員選出 顧問 荒井源三郎(大正4年卒)
 支部長 平井寛一郎(大正15年卒)
 副支部長 内田 英成(昭和9年卒)

◎昭和42年

第2回 総会

- (1) 日 時 昭和42年6月3日
(2) 場 所 仙台共済会館
(3) 出席者 本部 近藤 文治
 支部 平井寛一郎以下11名
(4) 講話 「宇宙通信と宇宙開発」 内田 英成

◎昭和43年

第3回 総会

- (1) 日 時 昭和43年6月8日
(2) 場 所 仙台市電気会館
(3) 出席者 本部 烏養利三郎・山本 茂雄・清野 武
 支部 平井寛一郎以下17名
(4) 役員改選 顧問 荒井源三郎
 支部長 平井寛一郎
 副支部長 内田 英成
(5) 講話 「計算機技術と計算センターの動向」 清野 武

◎昭和44年

第4回 総会

- (1) 日 時 昭和44年7月5日
- (2) 場 所 仙台市電気会館
- (3) 出席者 本部 坂口 忠雄
支部 平井寛一郎以下13名
- (4) 講 話 「萬国博の照明」 坂口 忠雄

◎昭和45年

第5回 総会

- (1) 日 時 昭和45年6月20日
- (2) 場 所 仙台共済会館
- (3) 出席者 本部 板谷 良平
支部 平井寛一郎以下14名
- (4) 役員改選 顧問 荒井源三郎
支 部長 平井寛一郎
副支部長 内田 英成
- (5) 講 話 「核融合プラズマの現状」 板谷 良平

◎昭和46年

1. 第6回 総会

- (1) 日 時 昭和46年6月19日
- (2) 場 所 仙台共済会館
- (3) 出席者 本部 鳥養利三郎・上之園親佐・山本茂雄
支部 平井寛一郎以下12名
- (4) 講 話 「耐電圧試験電圧の考え方」 上之園親佐

2. 荒井源三郎氏逝去 昭和46年11月23日

◎昭和47年

第7回 総会

- (1) 日 時 昭和47年7月1日
- (2) 場 所 仙台共済会館
- (3) 出席者 本部 大谷 泰之
支部 平井寛一郎以下13名

- (4) 役員改選 支部長 平井寛一郎
副支部長 内田 英成
(5) 講 話 「二十一世紀にむかう電気エネルギーについて」 大谷 泰之

◎昭和48年

1. 第8回 総会
(1) 日 時 昭和48年6月23日
(2) 場 所 仙台共済会館
(3) 出席者 本部 田中 哲郎
支部 平井寛一郎以下14名
(4) 役員改選 内田氏逝去に伴ない副支部長二村忠元(昭和15年卒)に変更
(5) 講 話 「半導体工学の進歩」 田中 哲郎
2. 内田英成氏逝去 昭和48年6月14日

◎昭和49年

1. 第9回 総会
(1) 日 時 昭和49年6月22日
(2) 場 所 仙台市大町電力ビル
(3) 出席者 本部 西川 権一
支部 平井寛一郎以下11名
(4) 役員改選 支部長 平井寛一郎
副支部長 二村 忠元
(5) 講 話 「システム工学について」 西川 権一
2. 阿部英一氏(昭和4年卒)逝去 昭和49年3月31日

◎昭和50年

- 第10回 総会
(1) 日 時 昭和50年6月21日
(2) 場 所 仙台市大町電力ビル
(3) 出席者 本部 近藤 文治
支部 平井寛一郎以下13名
(4) 講 話 「省力・自動化の最近の話題」 近藤 文治

◎昭和51年

第11回 総会

- (1) 日 時 昭和51年6月12日
(2) 場 所 仙台共済会館
(3) 出席者 本部 山本 茂雄
 支部 平井寛一郎以下12名
(4) 役員改選 支部長 平井寛一郎
 副支部長 二村 忠元
(5) 講 話 「NHKの現状」椿谷 義明(昭和24年卒)

◎昭和52年

第12回 総会

- (1) 日 時 昭和52年6月11日
(2) 場 所 仙台共済会館
(3) 出席者 本部 木嶋 昭
 支部 二村 忠元以下10名
(4) 講 話 「グラフについて」木嶋 昭

◎昭和53年

1. 第13回 総会

- (1) 日 時 昭和53年6月10日
(2) 場 所 仙台共済会館
(3) 出席者 本部 田中 哲郎
 支部 二村 忠元以下10名
(4) 役員改選 支部長 二村 忠元
 副支部長 山下 実(昭和7年卒)
(5) 講 話 「光通信ならびにその材料」田中 哲郎

2. 平井寛一郎氏逝去 昭和53年1月23日

安倍 季男氏(昭和17年卒)逝去 昭和53年3月2日

◎昭和54年

第14回 総会

- (1) 日 時 昭和54年6月16日
(2) 場 所 仙台市電気会館

- (3) 出席者 本部 上之園親佐
支部 二村 忠元以下 11名
- (4) 講 話 「発電機の脱調とその予測による系統安定度の制御」 上之園親佐

◎昭和55年

第15回 総会

- (1) 日 時 昭和55年6月7日
- (2) 場 所 仙台共済会館
- (3) 出席者 本部 松田長三郎・池上 文夫
支部 二村 忠元以下 8名
- (4) 役員改選 支部長 二村 忠元
副支部長 山下 実
- (5) 講 話 「移動通信の最近の動向について」 池上 文夫

◎昭和56年

第16回 総会

- (1) 日 時 昭和56年6月27日
- (2) 場 所 仙台共済会館
- (3) 出席者 本部 松田長三郎・池上淳一
支部 二村 忠元以下 7名
- (4) 講 話 「光通信の最近の話題」 池上 淳一

◎昭和57年

1. 第17回 総会

- (1) 日 時 昭和57年6月19日
- (2) 場 所 仙台共済会館
- (3) 出席者 本部 近藤 文治
支部 二村 忠元以下 10名
- (4) 役員改選 支部長 二村 忠元
副支部長 山下 実
- (5) 講 話 「先端技術と貿易摩擦」 近藤 文治

2. 二村忠元氏逝去 昭和57年12月18日

◎昭和 58 年

第 18 回 総 会

- (1) 日 時 昭和 58 年 6 月 24 日
(2) 場 所 東北電気会館
(3) 出 席 者 本部 松田長三郎・川端 昭
支部 三国文治郎以下 5 名
(4) 役員改選 支 部 長 三国文治郎（昭和 36 年卒）
副支部長 大家 寛（昭和 36 年卒）

（文責 三上 謙五）

10. 北海道支部の歩み

北海道は京都から最も遠い支部であり、その会員は 29 年発足時 20 名を数えて以来増加することなく、現在では 14 名である。

昭和 29 年 10 月 10 日に支部創立の総会を開いて以来 15 回の集りをもっており、概ね 2 年に 1 回開催してきた。

以上のように小規模な支部でもあり、できるだけ詳しい記録をとめて 30 周年の想い出とした。

(1) 昭和 29 年 8 月 3 日

加藤信義先生がご来道の際の懇談会で、北海道支部結成のお勧めがあった。

(2) 昭和 29 年 10 月 10 日

北海道支部創立総会を石狩川の河口の鮭鍋料理店「扇屋」で会員総数 20 名のうち 10 名とその家族 17 名が参加して開催した。この出席者は、大塚徳雄（支部長・大 6）、小田部 育（大 7）、片山辰雄（支部幹事・大 15）、橋本篤四郎（副支部長・昭 2）、副島敏夫（支部幹事・昭 13）、生田努（昭 14）、森田英夫（昭 17）、池内義則（昭 21）、坂入吉彦（昭 28）、芝山龍一（支部幹事・昭 28）。欠席ではあったが支部発足当時の会員は以下のとおり。泉谷松太郎（大 12）、山上孝（大 14）、俣野麻太郎（大 14）、村松堅三郎（昭 2）、山田武一（昭 2）、岸田徹（昭 4）、長谷川宗三郎（昭 9）、船橋礼蔵（昭 17）、村上勤（昭 17）、師尾守泰（昭 17）。

この中で現在も北海道支部に在るのは俣野、山田、師尾、池内、芝山の 5 名となった。なお総会での料理一切の費用が 1 人 366 円という記録をみると今昔の感がある。

(3) 昭和 30 年 6 月 26 日

レクリエーションを家族同伴で実施した。会員大塚、小田部、俣野、片山、副島、生田、森田、芝山計8名とその家族17名が車3台を利用して支笏湖、千才孵化場へ。当時は自家用車が殆んど無い時代に車を工面していただいた副島氏の苦労に感謝した。

(4) 昭和30年12月7日

副支部長 橋本篤四郎（北海道電力取締役）逝去

(5) 昭和31年6月11日

支部総会 会員8名出席 北電幌西クラブ。

(6) 昭和31年10月14日

支部総会兼観楓会 会員6名（小田部、俣野、片山、村松、副島、池内）と家族3名。

(7) 昭和33年8月31日

札幌郊外の張碓「景勝園」で支部総会。

(8) 昭和36年11月12日

札幌第一ホテルで支部総会 出席10名。

(9) 昭和39年6月28日

札幌「山水閣」で支部総会 小田部支部長、片山、池内、池見幸彦（昭21）、芝山、谷村実（昭31）、中山道夫（昭33）、土橋多一郎（昭34）の計8名出席。

(10) 昭和42年6月17日

支部総会を北電北一条クラブで開催。支部長山上、副支部長師尾、幹事芝山、幹事中山に改選。（その後昭42年8月には芝山から谷村に引継ぐ）。この日の出席は7名。

(11) 昭和44年6月29日

札幌第一ホテルで支部総会 出席は10名。

(12) 昭和47年7月9日

札幌パークホテルで支部総会 出席11名。常連の外に鈴木郁郎（昭21）、福田駿（昭40）、一戸光一（昭42）、の顔があった。この日小田部前支部長が北海道電気事業の変遷の話をされたが、総会出席の最後であった（その後昭53年3月2日逝去）。

(13) 昭和49年6月29日

支部総会。札幌「冰雪の門」で出席9名。

(14) 昭和52年5月6日

支部総会。札幌全日空ホテル内「札幌車屋」で出席10名。山上、師尾、池内、高橋博美（昭28）、芝山、谷村、津田孝夫（昭32）、土橋、天野要（昭46）、田中譲（昭47）。この日は山上支部長の道外転居に伴う送別会を兼ね、役員改選を行った。支部長池内、副支部長師尾、幹事芝山、幹事土橋となつたが、この役員が58年現在も続いている。このうち師尾副支部長は

北海道最大の薬房の社長であるので異色の興味ある話が尽きない。

(15) 昭和 53 年 12 月 1 日

支部総会。北電北二条クラブで 8 名出席。今回はじめて電気工学講習所卒の藤谷良一(大14)が出席。

(16) 昭和 56 年 11 月 24 日

支部総会。札幌「城ヶ崎」で 7 名出席。元支部会員の津田先生(前北大教授)の来札の際に開いたが、久しぶりの京都の近況について話がはずんだ。

(17) 昭和 58 年 7 月 27 日

支部総会。北電北二条クラブで 5 名出席。林宗明先生が来札の機をとらえて開いた。林先生のスライド多数による京大電気教室の模様を詳しく説明いたゞき感慨深かった。

(文責:芝山一竜一)

11. 洛友デルタ会の現況

昭和 33 年 11 月 16 日京都大学工学部電気工学教室創立 60 周年に当り京都大学に於て記念式典が催された際に講習所卒業の参加も認められたのを契機として、当日の出席者が大正 4 年から昭和 15 年迄の卒業生をもって、同窓会を設立することの事前協議がありました。

その後まもなく有志同窓と云う形で昭和 34 年から昭和 49 年迄の間 17 回会合して下記の行事を催しました。

- (1) 同窓会員の中で受勲者に対し栄誉を祝す祝賀会を開催する。
- (2) 会員の中で外遊する方の壮行会を開催する。
- (3) 会員の佐藤三代男氏(建設担当者)のご案内に依り関西電力株式会社喜撰揚水発電所見学して後懇親会開催する。
- (4) 恩師故関野弥三先生の七回忌の法要を執り行う。
- (5) 会員の立石亨三、井口誠一、両氏の喜寿祝賀会を開催する。

上記の開催期日、場所等は略させていただきます。

次に上記有志同窓会も回を重ねる毎に盛大になりましたので、昭和 50 年 10 月 4 日、京都東山の楠荘に於て、電気工学講習所同窓記念集会という名称にて開催することになり、その際出席者全員から電気工学講習所同窓会の確立について強い要望がありましたので、関東、関西の昭和 2 ケタ卒業生が中心となって計画して欲しいとの要望がありましたから世話人十数名が設立発起人となり準備することになりました。

そこでこの事業を発足するに当って、全卒業生を包括した親睦、研修団体として計画立案す

ることになり、会の名称、会則、それに伴う活動資金等について具体案が出来ましたので、いよいよ第1回総会を開催するはこびとなりました。次に準備委員全員集合して講習所同窓会全員に案内状を送付して全国大会を開催する。

(1) 第1回総会の主なる行事

期日 昭和52年5月28日

場所 京都大学電気総会館

イ 経過報告 山口敬二氏（昭和11年卒）

ロ 議長選出について 中野壮二氏に決議する

ハ 会の名称について 中野壮二氏（昭和12年卒）

会の名称、洛友デルタ会と決議する。

ニ 基金の募全現況と設立に伴う会計報告 神戸俊夫氏（昭和14年卒）

ホ 会則案の審議について、提出案に全員賛成する

ヘ 役員人事 幹事長に上野 满氏に決議する

ト 設立記念講演会

テーマ お祝いのことば

講 師 京都大学教授 工学博士 近藤文治先生

テーマ 電気と数学

講 師 京都大学教授 工学博士 木嶋 昭先生

チ 懇親会開宴

場 所 ホテル・サンフラワー

(2) 第2回洛友デルタ会全国大会の主なる行事

期日 昭和53年11月4日

場所 名鉄 犬山ホテル

イ 総 会

洛友会の歌を齊唱 松田長三郎先生 作詞作曲

物故恩師及び会員への黙禱

経過報告 幹事長上野 满氏（昭和15年卒）

長寿者にお祝品贈呈

ロ 懇親会開宴

来賓の諸先生のお祝いのことば賜わりました

(3) 第3回洛友デルタ会全国大会の主なる行事

期日 昭和55年7月5日

場所 京都大学宇治地区研究所

イ 講演会並びに見学会

テーマ ヘリオトロン核融合の研究について

講 師 京都大学教授 工学博士 飯吉厚夫先生

テーマ 電離層の研究について

講 師 京都大学教授 理学博士 加藤 進先生

ロ 総 会

場 所 花屋敷（宇治市）

洛友会の歌を齊唱 松田長三郎先生 作詞作曲

物故恩師及び会員への黙禱

経過報告 幹事長上野 満氏（昭和15年卒）

長寿者にお祝い品贈呈

ハ 懇親会開宴

(4) 第4回洛友デルタ会全国大会の主なる行事

期日 昭和57年9月25日

場所 京都大学電気総会館

イ 講演会並びに見学会

テーマ 電気工学教室新館及び近況について

講 師 京都大学教授 工学博士 近藤文治先生

テーマ 電子工学からイオン工学へ

講 師 京都大学教授 工学博士 高木俊宣先生

見学会 イオン工学研究施設及び電気工学教室新館

ロ 総 会

場 所 石長 松菊園（京都市内）

洛友会の歌を齊唱 松田長三郎先生 作詞作曲

物故恩師及び会員への黙禱

経過報告 幹事長上野 満氏（昭和15年卒）

昭和55、56年度予決算報告 幹事神戸俊夫氏（昭和14年卒）

来賓の諸先生の挨拶

米寿、喜寿者へ記念品贈呈

ニ 懇親会開宴

次に決議事項として毎回同窓会員の短信集を作成して全会員に送付する。以上が簡単ですが

洛友デルタ会の現況であります。なお洛友デルタ会会員も生死は人の世の常とは言え年々少な
くなりますが全員一致して、当会の発展に努力するとともに洛友会の一員として、その責任を
痛感していますので今後一層のご指導とご援助をお願いするしたいです。

(文責 藤村 俊一)

昭和59年 2月15日 印刷
昭和59年 3月1日 発行 (非売品)

洛友会創立30周年記念委員会

京都大学工学部電気系教室内
〒606 京都市左京区吉田本町
